

松江法務総合庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書

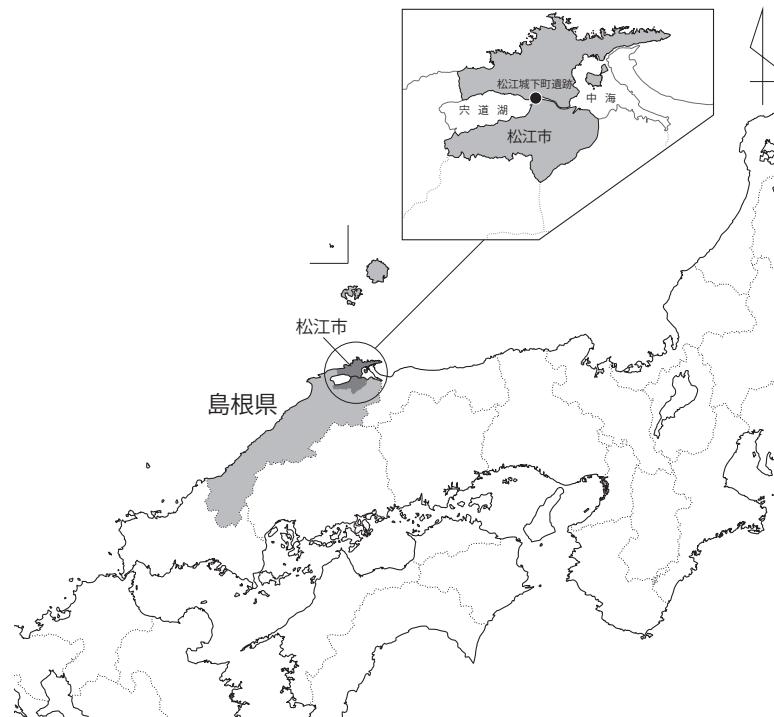
松江城下町遺跡
(母衣町50外)

令和5(2023)年3月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江法務総合庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書

松江城下町遺跡 (母衣町50外)



令和5（2023）年3月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　言

1. 本書は、令和2年度に実施した松江法務総合庁舎新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
2. 本書で報告する発掘調査は、支出負担行為担当官　松江地方検察庁検事正から松江市が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が委託を受けて実施した。
3. 本遺跡の名称および所在地は下記のとおりである。

名 称 松江城下町遺跡（母衣町 50 外）

所在地 島根県松江市母衣町 50 番地外

4. 発掘調査業務および報告書作成業務の事業年度

発掘調査業務 令和2(2020)年8月17日～令和3(2021)年3月16日

報告書作成業務 令和4(2022)年8月1日～令和5(2023)年3月31日

5. 調査面積

調査面積 872m² (1区 522m²、2区 350m²)

6. 調査組織

依頼者 支出負担行為担当官　松江地方検察庁検事正

主体者 松江市 市長 松浦 正敬（～令和3年4月23日）

　　〃 上定 昭仁（令和3年4月24日～）

【令和2年度】 発掘調査業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	須山 敏之
"		次長	松尾 純一
"		"	稻田 信
"	まちづくり文化財課	課長	飯塚 康行
"	" 文化財総合コーディネーター		丹羽野 裕
"	" 埋蔵文化財調査室	室長	尾添 和人
"	" " 調査係	係長	川上 昭一
"	" " " 主任	主任	徳永 隆
"	" " " " 学芸員	学芸員	三宅 和子
調査指導	島根県教育庁 文化財課	企画員	稻田 陽介
米子市経済部文化観光局	文化振興課	担当課長補佐	佐伯 純也
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課長	宮本 英樹
	" 調査係	係長	小山 泰生（担当者）
	" " 調査補助員	調査補助員	宇津 直樹

【令和4年度】 報告書作成業務

事務局	松江市文化スポーツ部	部長	松尾 純一
"	埋蔵文化財調査課	課長	川上 昭一
"	" 文化財総合コーディネーター		丹羽野 裕
"	" 発掘調査係 係長		徳永 隆
"	" 学芸員		森山 優花
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課長	宮本 英樹
	" 調査係 係長		小山 泰生(担当者)
	" " 調査補助員		宇津 直樹

7. 本書に掲載した遺物の復元、遺物実測図の作成・淨書、遺構図の淨書は以下の職員が担当した。
宇津直樹、角 優佳、坂本玲子
8. 本書に掲載した遺構写真は、小山が撮影した。遺物写真は、陶磁器・土師器皿・木製品・金属製品・石製品・錢貨・瓦を小山が、動物遺存体を宇津が撮影した。
9. 発掘調査・報告書作成にあたっては、次の方々から御指導をいただいた。
赤松 和佳(伊丹市文化振興課学芸員)【陶磁器】
石丸恵利子(広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門研究員)【動物遺存体】
大矢 幸雄(松江市史絵図・地図部会長)【松江城下町絵図】
河原荘一郎(松江工業高等専門学校環境・建設工学科教授)【地質】
佐伯 純也(米子市文化振興課担当課長補佐)【遺構・陶磁器】
西尾 克己(松江市史松江城部会長)【遺構・陶磁器】
10. 発掘調査に伴う鑑定・分析は、次の機関に依頼または委託し、その成果を第3・4章に掲載した。
動物遺存体鑑定・分析 広島大学総合博物館 埋蔵文化財調査部門
土壤分析 文化財調査コンサルタント株式会社
11. 本書の執筆は、第1章を松江市埋蔵文化財調査課の徳永、第2・3・5章を小山が執筆し、第4章については執筆者を明記した。編集は小山が担当した。
12. 本書に掲載した測量データ・遺物および実測図・写真等の資料は、松江市にて保管している。
13. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

凡 例

1. 遺跡名は、松江城下町遺跡の後に町名と代表地番を（カッコ）内に付記して呼称している。
2. 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

SA：柵・杭列 **SB**：礎石建物 **SD**：溝・屋敷境 **SE**：井戸 **SF**：通路 **SK**：土坑 **SP**：柱穴
SS：石列・礎石 **SX**：性格不明遺構

3. 本書で示す方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第Ⅲ系の値に基づく。
4. 本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）値を使用した。
5. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に従って記載した。
6. 本書で用いた陶磁器の編年と器種名については以下の論文・報告書に依拠している。これら以外の遺物については、出土陶磁器検討会等で指導を受けた年代を記載している場合もある。

〔貿易陶磁器〕森 肇 1992「十六世紀後半から十七世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究第九』大阪歴史学会
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会

〔肥前陶磁器〕九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』

※肥前陶磁器について、本文中では「九陶〇期」の略号と「生産地年代」（西暦もしくは世紀）での表記を基本とした。

〔瀬戸美濃陶器〕愛知県史編纂室 2007「古瀬戸製品編年表」『愛知県史別編窯業2』

〔京信系陶器〕畠中英二 2007「第二節 信楽焼の編年と技法」『続・信楽焼の考古学的研究』

〔備前焼〕乗岡 実 2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

〔須佐焼〕佐伯昌俊 2010「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古第30号』山口考古学会

〔軒丸・軒平瓦〕花谷 浩 2017「出雲における中近世の瓦と松江城築城期の瓦」『松江市史研究8号』松江市

7. 註は各章ごとに連番を振り、章末に配置した。引用・参考文献は文末に記載した。
8. 本書で使用する近世の時期区分は、堀尾期・京極期・松平期を採用して記述した箇所が含まれている。これは一般的な時期区分とは異なっており、松江城下町遺跡を解釈する上で設定した区分となっている。堀尾期・京極期・松平期と設定した時期区分の年代観は以下のとおりである。
堀尾期…堀尾氏が松江城築城および城下町建設を開始したとされる 1607(慶長12)年前後から 1633(寛永10)年まで
京極期…京極氏が藩主となり統治していた 1634(寛永11)年から 1637(寛永14)年まで
松平期…松平氏が藩主となり統治していた 1638(寛永15)年から 1871(明治4)年まで
9. 本書に掲載した遺構平面図および土層断面図は各図に縮尺とスケールを配置した。遺物実測図の縮尺は以下の縮尺を原則としたが、これに従えないものにはその都度縮尺を配置した。
陶磁器・土師器皿・木製品（漆器）：1/3 木製品（下駄）・瓦：1/4 金属製品・銭貨：1/2
10. 陶器と磁器を区別するために陶器の断面は白ヌキ、磁器の断面は黒塗りで示した。また、陶磁器の施釉範囲（鉄釉・青磁釉等）、漆器椀の漆塗り、土師器の油煙痕、瓦の断面は網掛けで示した。

目 次

例 言

凡 例

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯.....	1
------------------	---

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境.....	3
第2節 松江平野周辺の微地形.....	4
第3節 歴史的環境.....	5

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法.....	11
第2節 基本層序	13
第3節 1区の調査	16
第4節 2区の調査	79

第4章 自然科学分析

松江城下町遺跡（母衣町 50 外）出土の動物遺存体.....	87
--------------------------------	----

第5章 総括

第1節 遺構面の時期と変遷.....	97
第2節 松江城下町遺跡（母衣町 50 外）の陶磁器組成.....	102
第3節 堀尾期における屋敷地の規模と造成工法	105
第4節 結語	109

写 真 図 版

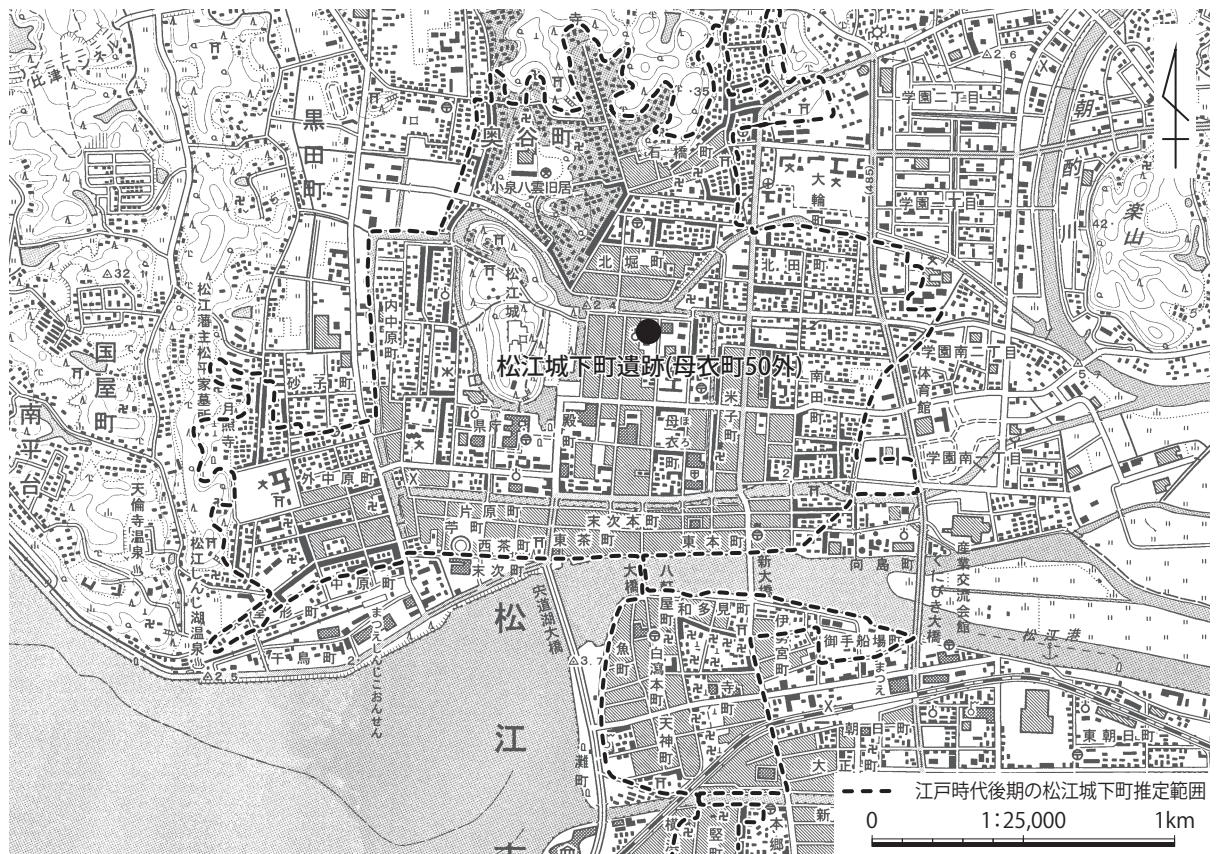
報告書抄録

第1章 調査に至る経緯と経過

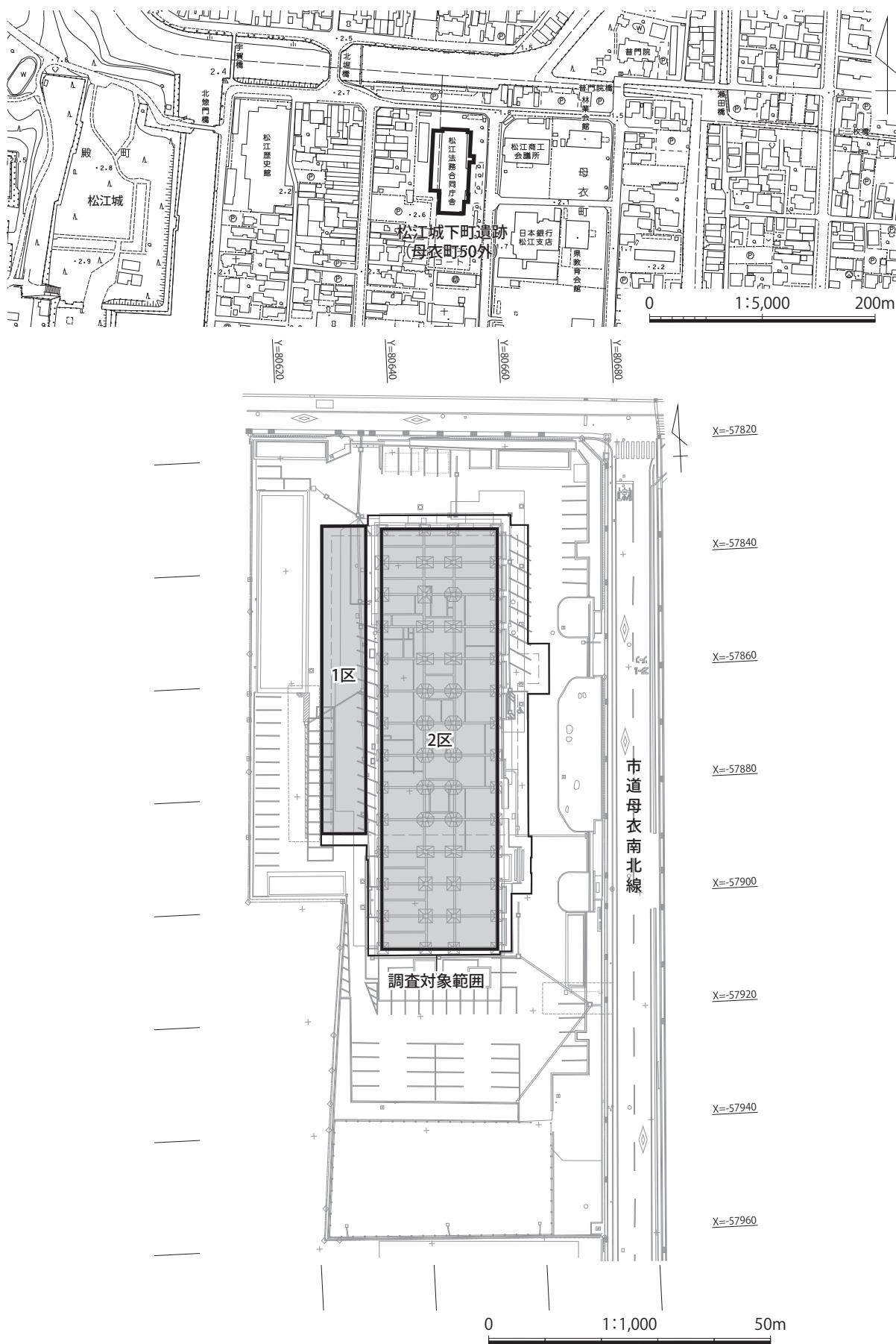
第1節 調査に至る経緯

平成23年8月に松江地方検察庁から、松江法務合同庁舎の老朽化による既存建物の建替え工事の計画に伴い、埋蔵文化財の有無に関する調査依頼が松江市文化スポーツ部埋蔵文化財調査課（当時は松江市教育委員会文化財課）へ提出された。現存する松江城下町絵図によると、江戸時代を通して武家地や町屋が描かれている範囲であり、城下町遺跡の存在が想定されることから、事業予定地となる現庁舎の敷地内において発掘調査が可能な箇所について協議・選定し、同年11月に3箇所の調査区を設定して試掘調査を実施した。その結果、近代以降に大きく搅乱された場所もあったものの、概ね全域にわたって城下町遺跡が埋蔵されていることを確認した。平成24年6月に遺跡の発見通知がなされ、「松江城下町遺跡（母衣町50外）」として周知されるところとなった。

その後、工事計画が具体化し、平成29年2月に松江地方検察庁から遺跡の発掘通知が提出され、その内容について島根県教育委員会と協議した結果、現庁舎の取り壊しと仮設庁舎の建設箇所については工事立会、新庁舎建設箇所については発掘調査を実施する旨の勧告を受けることとなった。ただし、その後に仮設庁舎建設に伴う工事立会を実施する中で、現庁舎の取り壊しに伴う基礎の撤去にかかる掘削が、当初の50cmから207cmまで深くする必要が生じたことから、令和2年6月に発掘の変更通知が島根県教育委員会に提出され、改めてこの範囲も本調査範囲とすることとなった。以上の経過を経て、令和2年8月から令和3年3月まで本発掘調査を実施するに至ったものである。



第1図 調査地位置図



第2図 調査地および調査区配置図

第2章 遺跡の位置と環境

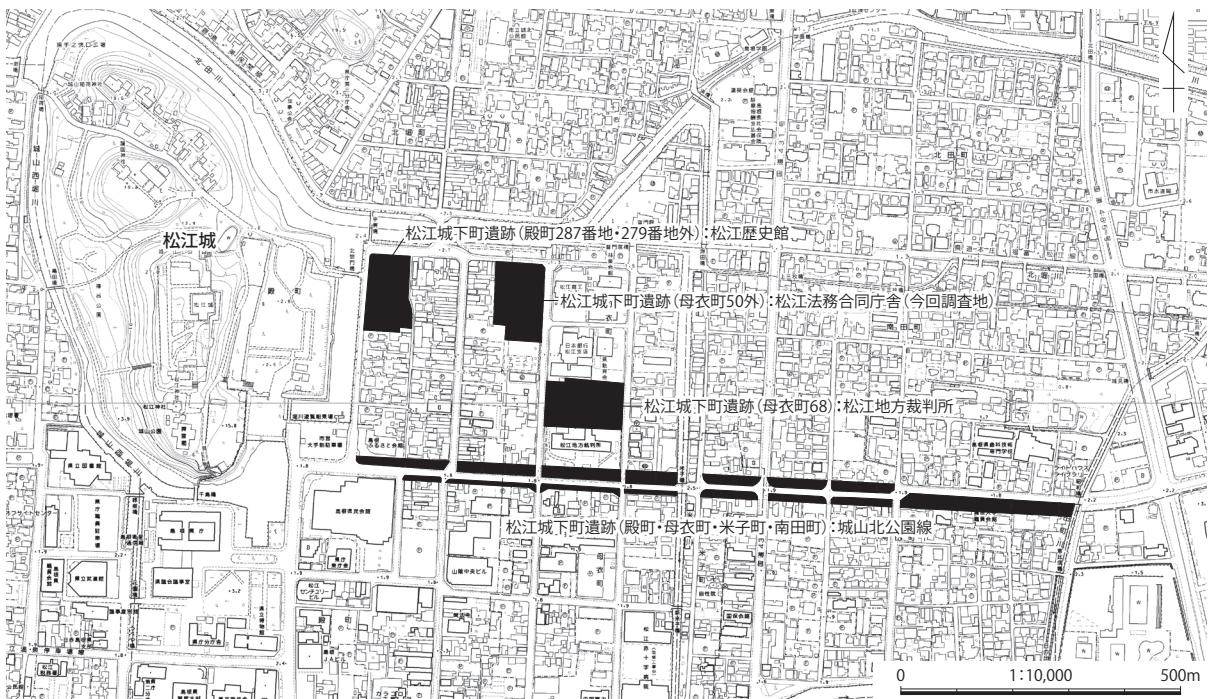
第1節 地理的環境 (第3図)

松江城下町遺跡（母衣町 50 外）は、松江城大手前から北東へ直線距離で約 300m 離れた場所に所在する。現存する堀尾期・京極期・松平期の松江城下町絵図や文献に照らし合わせてみると、江戸時代には空白地・町屋・侍屋敷（武家地）となっていた場所に比定される。

本遺跡の西側に所在する松江城は、宍道湖北東岸からやや北側に位置し、南北方向に延びる宇賀丘陵と地続きにあったとされる丘陵南端部の亀田山に築かれている。松江の城下町は、この城郭を取り囲むように武家地が配置され、その外側に町人地や寺社地が置かれていた。

17世紀初頭の松江城築城に際して城の外郭となる内堀の開削を行っており、この開削にあたっては、松江城が置かれた亀田山と北側の宇賀丘陵を分断して堀を貫通させる必要があった。かなりの大規模工事であったと考えられ、内堀の開削時に生じた亀田山と宇賀丘陵の掘削土（山土）で北田町・南田町・中原町の沼沢地を埋め立てたという伝承が残っている。⁽¹⁾しかし、この山土を城下町の初期造成土として使用している場所は、現段階で松江城の北惣門（脇虎口）の正面に位置する家老屋敷：松江城下町遺跡（殿町 287 番地・279 番地外）などの限られた屋敷地でしか確認していない。⁽²⁾

発掘調査では、城下町形成以前に堆積していた自然堆積層を掘削した素掘りの大溝や土取穴が見つかっており、これらは城下町形成段階に屋敷地の縁辺部分や境界部分にあたる場所に掘削され、掘削時に生じた残土を屋敷地の初期造成土として利用していることが明らかとなっている。また、発掘調査時の層序を把握する際には、城下町形成以前の旧地表面と考えられる黒褐色～茶褐色の有機質粘土（自然堆積層）をひとつの指標としている。⁽³⁾この土層は、これまでに調査を実施した松江市橋北地域（大橋川より北の地域）における松江城下町遺跡のほぼ全域で確認している土層である。



第3図 調査地とその周辺の主な松江城下町遺跡

第2節 松江平野周辺の微地形（第4図）

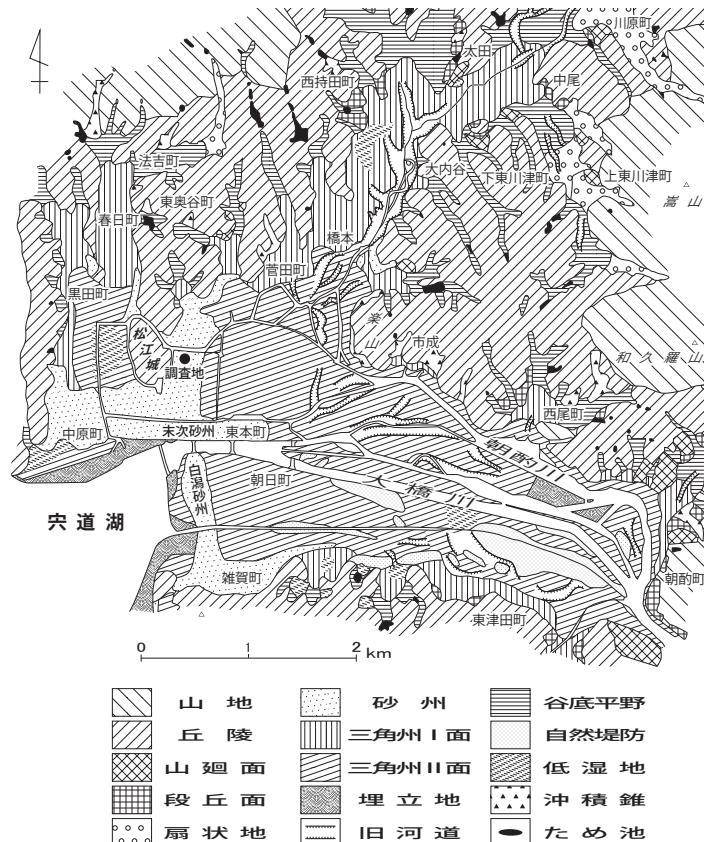
松江平野は、宍道湖東岸に位置する東西約4km、南北約2.5km、標高1～3mの低湿な三角州平野である。中海と宍道湖を結ぶ大橋川や朝酌川・馬橋川などの小河川の沖積作用によって形成されたもので、宍道湖に面して小規模な砂州が存在しているために後背湿地が広くなっている。⁽⁴⁾

松江平野の基岩は、地下6～20mにある新生代新第三紀中新世の松江層であり、その上位に第四紀層（完新統～更新統）が分布する。松江層は、砂岩・泥岩・玄武岩・凝灰岩の互層からなる。

松江平野の沖積低地を特徴づけるのが、砂州と低湿な三角州である。砂州は宍道湖東岸の大橋川を挟んで南北に分布し、東方および北方に延びる砂嘴状の形態を示す。北の砂州は、中原町付近から東本町までの東西方向に形成され、宍道湖と北側の低地を区切っている。中世にはこの砂州上に末次の集落が展開していたとされる（末次砂州）。末次砂州の北側には南北方向に延びる宇賀丘陵があり、その南端に亀田山がある。南の砂州は、白潟付近に南北方向に形成され、宍道湖東岸をせき止める形となっている。中世にはこの砂州上に白潟の集落が展開していたとされる（白潟砂州）。これらの砂州地帯は近世松江城下町の中心地となっていた場所であり、城下町の発展に伴って人為的な微高地も造成されている。

砂州の背面には三角州Ⅰ面が分布する。標高2～5mで谷底平野面に連続するが、傾斜は緩やかである。三角州Ⅰ面は、朝酌川に沿って中尾付近まで広がる。表層部は河川によって運搬された土砂に覆われるが、下部には海成の泥層が存在して平坦な地形を呈する。三角州Ⅰ面の末端部の菅田や黒田には小規模な砂州状の微高地も見られる。西持田と大内谷の間の平地には条里制遺構が存在し、古くから人々の生活の場所となっていたことが分かる。

三角州Ⅱ面は、砂州より東側の大橋川沿いや松江城の西側に広がる。標高2m以下で三角州Ⅰ面よりも一段低く、非常に平坦で洪水時には常に冠水する低湿な土地である。三角州Ⅰ面を切る旧河道面へと連続しており、Ⅰ面とⅡ面との境界部には比高差1m以下の小崖も認められる。三角州Ⅱ面が現在のように陸地化したのは比較的新しい時代で、古代の「出雲国風土記」には三角州Ⅱ面上に位置する神社・寺院などの記載は見られない。三角州Ⅱ面の前面には人工的な埋立地が広がっているが、これは明治時代以降の近代の新しい陸地である。⁽⁵⁾



第4図 松江平野の微地形分類図

第3節 歴史的環境

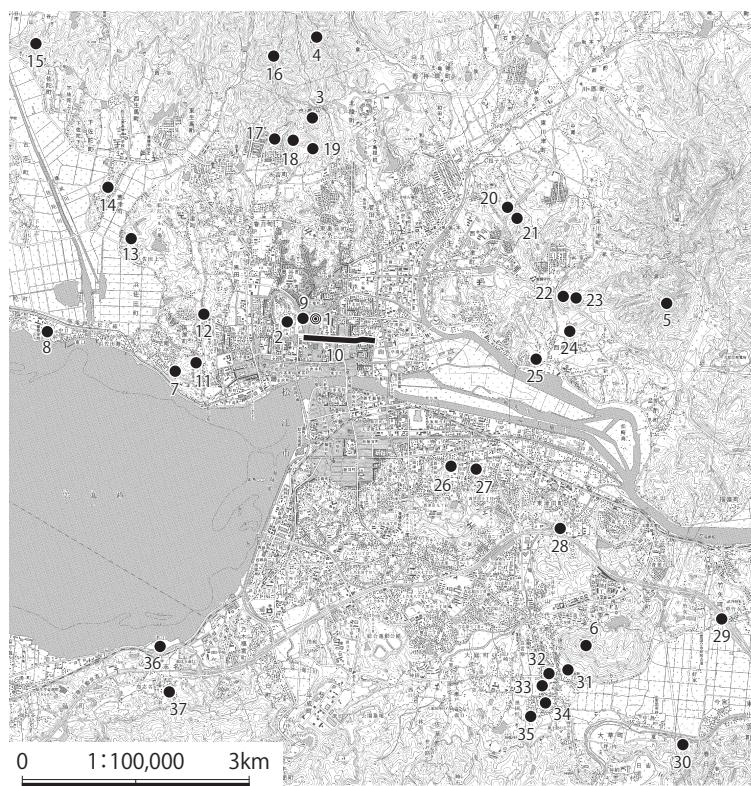
松江城下町遺跡は、松江城を中心としてその周囲に位置する近世遺跡である。さらに広域に見ると松江平野の北西部に位置している。この平野部には周知されている原始・古代の遺跡は少なく、ここでは周辺部を含めた中世後半～近現代の状況について若干触れておく。

第1項 中世の松江と中・近世の主な城館跡（第5図・表1）

近世以前の松江城周辺は古代からあまり変化がなく、沼や浅い湖が残る湿地帯が広がっていたと考えられている。⁽⁶⁾ 中世になると宍道湖東岸沿いの砂州上に「末次」と「白潟」の港湾集落（町場）が展開していたとされる。近世城下町形成以前の白潟の北には、京都東福寺の荘園である末次荘・法吉荘・西長田郷があり、これらの荘郷には中原・黒田・奥谷・菅田・末次の5つの名⁽⁷⁾（村）が点在し、この他にも多くの名も置かれ、新開地の開発が進んでいたとされている。

戦国時代の「末次」は末次氏が治めており、永禄12（1569）年の尼子再興戦では尼子・毛利両軍の争奪戦の舞台となった。また、永禄6（1563）年に末次氏が毛利氏から末次森分や市屋敷等をあてがわれていることから、末次荘内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたことが窺える。⁽⁸⁾

「白潟」は、中国の明代に著された『籌海図編』（明の嘉靖41年：1562年）の中に出雲地方の港湾の一つとして「失喇哈咈（白潟）」と記され、日本海から宍道湖内奥部に至る水運ルートの重要な港湾であったと考えられている。また、毛利氏が河村又三郎なる人物を白潟・末次の磨師・塗師・鞆師の司に任じていることから、この地に商人や職人の集団が存在し、町場が存在していたものと推定されている。⁽⁹⁾ 近世の松江城下町は、末次・白潟の既存の港湾集落を取り込むように形成されており、城下町の成立過程を考察する上では、中世の姿を念頭に置いておく必要がある。



1. 松江城下町遺跡(母衣町50外)
2. 松江城
3. 白鹿城跡
4. 真山城跡
5. 和久羅山城跡
6. 茶臼山城跡
7. 荒隈城跡
8. 満願寺城跡
9. 松江城下町遺跡(殿町287・279)
10. 松江城下町遺跡(城山北公園線)
11. 荒隈城跡(小十太郎地区)
12. 舎人遺跡
13. 薦津殿山城跡
14. 高柳城跡
15. 海老山城跡
16. 大高丸跡
17. 高つぼ山城跡
18. 小白鹿城跡
19. コゴメダカ遺跡
20. 堂頭山城跡
21. 川津城跡
22. 稲葉山城跡
23. 二保山城跡
24. 城廻城跡
25. 城山城跡
26. 西城ノ前遺跡
27. 東城ノ前遺跡
28. 石台遺跡
29. 中竹矢遺跡
30. 天満谷遺跡
31. 市場遺跡
32. 黒田館跡
33. 下黒田遺跡
34. 黒田畠遺跡
35. 出雲国造館跡
36. 布志名焼窯跡群
37. 布志名城山城跡

第5図 中世以降の主な城館遺跡位置図

松江城 (2) …松江平野の北西端に位置する亀田山（標高 28 m）に築かれた輪郭連郭複合式平山城である。慶長 5（1600）年に堀尾忠氏が出雲・隱岐両国 24 万石を拝領し、父吉晴と共に安来市広瀬町の富田城に入った後、慶長 12～16（1607～11）年にかけて築かれたとされる。縄張りは亀田山の最高所に本丸があり、五層六階の望楼式の複合天守をもち、本丸周縁には櫓を配置して高石垣をめぐらす。天守の東側に二之丸・二之丸下ノ段、南側に三之丸、西側に腰郭を配置し、これらの外側に内堀をめぐらす。島根県史によると中世においては亀田山に末次城があったとされる。

白鹿城跡 (3) …松江城から北西へ約 3km のところに位置し、松江市街地北側にある北山山脈から派生する白鹿山（標高 154 m）に築かれた山城である。戦国時代には出雲の戦国大名尼子氏の重要な支城であり、安芸の戦国大名毛利氏との雲芸攻防戦の舞台となる。城は白鹿山頂上部の平坦地を主郭とし、険しい地形を活用した大小の郭を設置する。

真山城跡 (4) …白鹿城跡の北隣に位置する真山（標高 256 m）に築かれた山城である。「雲陽軍実記」によると平安時代末期に築いたとの伝承がある。毛利元就が白鹿城を攻めた際に、元就の次男吉川元春が向城として陣を置き、白鹿城陥落後は毛利氏による周辺支配の拠点となる。その後、尼子再興戦で尼子軍の手に落ちるが、尼子氏の出雲出国後には再び毛利氏の手に戻り、江戸時代を迎えると破却される。城は尾根伝いに郭を築き、土壘や石積みも見られる。

和久羅山城跡 (5) …松江城から東へ約 5km のところに位置する和久羅山（標高 262 m）に築かれた山城である。城主は当初、尼子方の原田氏であったが毛利氏の手に落ち、尼子復興戦の際には再び尼子方の羽倉氏が城主となり、尼子氏の出雲出国後には再度毛利氏の手に帰した。城は中海・宍道湖をはじめ松江の中心地が一望できる和久羅山の最高所に 4 つの郭をもち、腰郭や虎口がある。

茶臼山城跡 (6) …松江城から南東へ約 6km のところに位置する茶臼山（標高 171 m）に築かれた山城である。築城年代や城主は定かではないが、「雲陽誌」には雲芸攻防戦の際に村上伯耆守が拠ったとされている。茶臼山の最高所に主郭を持ち、その東西を別の郭で囲み、さらにその外側の東西に尾根を遮断する堀切が掘られ、山の斜面には連続豊堀群がある。

荒隈城跡 (7) …松江城から西へ約 1.5km のところに位置する荒隈山（標高 40 m）に築かれ、雲芸攻防戦における毛利軍の前線拠点となっていた山城である。また、宍道湖北岸沿いに築かれた城は、宍道湖一帯の水運や流通機能を掌握して取り込んでいたとされる。

満願寺城跡 (8) …宍道湖北岸に接し、宍道湖の水運を握る水軍の拠点でもあった湯原氏の居城で、当初は尼子方に属していたが、毛利元就の出雲進出により毛利方に属した。また、雲芸攻防戦での争奪の舞台にもなる。城の主郭部分には横堀があり、宍道湖に面する斜面には階段状遺構がある。

表1 主な中世山城の変遷

城 名	城主の移り変わり
白鹿城	尼子氏の居城(尼子十旗のひとつ)→毛利氏
真山城	吉川氏→毛利氏→尼子氏→毛利氏
和久羅山城	原田氏(尼子方)→毛利氏→羽倉氏(尼子方)→毛利氏
茶臼山城	城主不明
荒隈城	毛利氏の前線拠点
満願寺城	湯原氏(尼子方)→湯原氏(毛利方)

第2項 調査地周辺の近現代の沿革

近代以降になると、明治初頭の廢藩置県によって松江城下町の武家屋敷や藩施設は取り壊され、江戸時代の広大な屋敷地はそのまま公共施設や学校として利用されたり、街区は短冊状に細かく分筆されて庶民の住まいへと変化していくようになる（写真1・2）。

調査地周辺の近現代の沿革として、本遺跡から東側の市道母衣南北線を挟んだ隣地にある現在の松江商工会議所は、明治後半～昭和前半にかけて島根県立松江高等女学校の校舎となっていた場所で、明治30（1897）年に開校し、昭和17（1942）年まで所在していた。その後、昭和19（1944）年には松江赤十字病院の分院となり、昭和50（1975）年になると松江商工会議所ビルが竣工される。

本遺跡は、この松江高等女学校の寄宿舎や松江赤十字病院の病棟が所在していた場所にあたり、その後、昭和23（1948）年に松江地方検察庁（鉄筋コンクリート4階建）が開庁されて現在に至る。



写真1 調査地周辺の昭和22年の航空写真（1947年撮影：国土地理院）

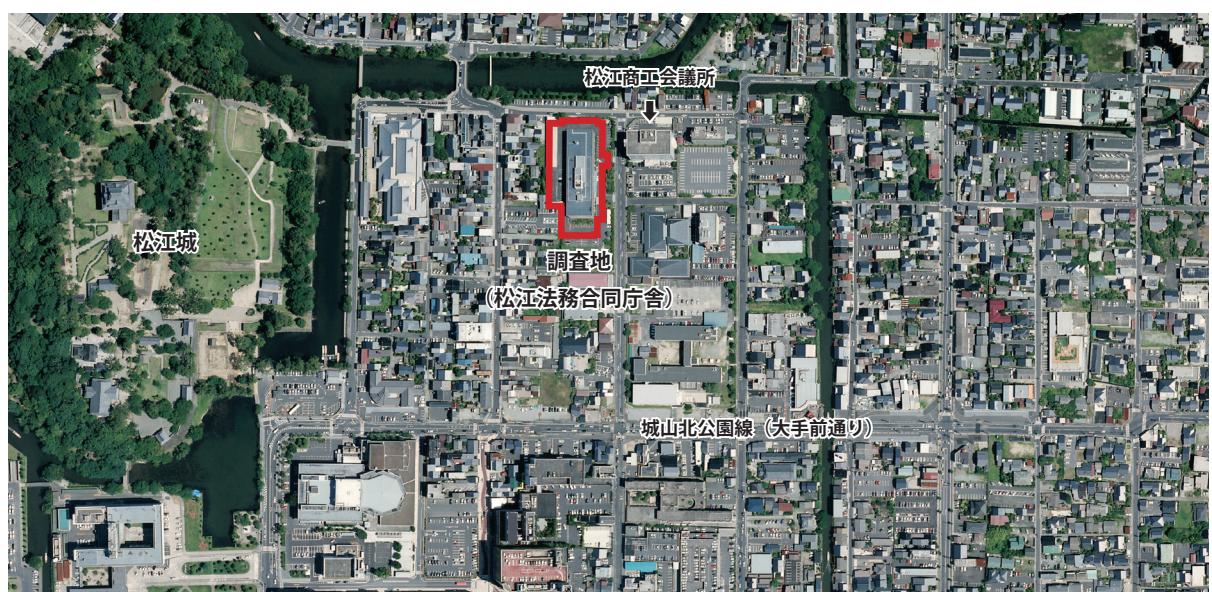


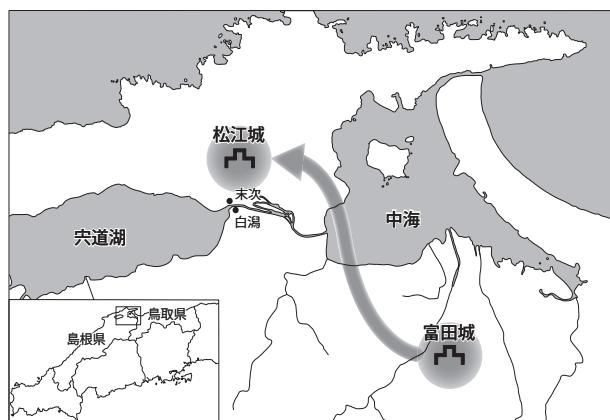
写真2 調査地周辺の平成23年の航空写真（2011年撮影：島根県松江県土整備事務所）

第3項 松江藩主の移り変わり —堀尾氏・京極氏・松平氏の出雲国統治—

藩主の変遷（第6図・表2）

開府以前の中世の松江には、大橋川流域の沖積地に堆積した砂州上に末次・白潟の町場が展開していた。この砂州は砂の堆積によって周辺よりも高い陸地なっていたことから、人々の居住域として利用されていた。

慶長5（1600）年、関ヶ原合戦の戦功により、堀尾吉晴・忠氏父子は遠江国浜松城（現：静岡県浜松市）より出雲・隠岐両国の太守となつた。出雲入国に際しては、それまで吉川広家が居城



第6図 富田城と松江城の位置

としていた富田城（現：島根県安来市）に一旦入城する。その後、堀尾氏は最初に拠点とした富田城が出雲東部に偏り、城郭も急峻な山頂にあり城下が狭隘であったことや物資輸送の利便性などの理由により、新たな城下町建設地を探索していく。そして、領国支配のために出雲国の中心に近く、城下が広くとれ、海上輸送を掌握できる宍道湖岸の松江に新しい城地を求めたとされている。⁽¹⁰⁾

慶長12～16（1607～1611）年、吉晴が早世した忠氏の遺志を受け継いで標高28.4mの亀田山と呼ばれる小丘陵に松江城を築き、城郭を中心とする城下町を形成した。吉晴が家臣団と共に富田から松江へ移転したのは慶長13（1608）年とされる。⁽¹²⁾ 堀尾氏は33年間にわたって出雲を統治して城下町建設の基礎を築くが、嗣子無く二代で断絶となつた。

寛永11（1634）年、徳川家光から出雲・隠岐両国26万4千2百石を拝領した京極忠高が、若狭国小浜（現：福井県小浜市）から出雲へ入国して松江藩主となるが、寛永14（1637）年に逝去し、一代で断絶となる（半年後に播磨国龍野6万石で再興）。忠高は、わずか3年余りの統治であったが、その間に治水工事や殖産興業を行うなど、その治績は大きかった。⁽¹³⁾

寛永15（1638）年、徳川家光から出雲国18万6千石（隠岐国は預り地）を拝領した松平直政が、信濃国松本（現：長野県松本市）から出雲へ入国して松江藩主となる。明治時代を迎えて廢藩置県が実施されるまでの233年間、松平氏十代にわたって藩政が続いた。

表2 松江藩主の時期区分

時代	安土桃山時代	江戸時代				明治時代
		初期	前期	中期	後期／幕末	
世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	
西暦	1600年	1700年	1800年	1900年		
松江藩主の変遷						
		堀尾期(1600年～1633年) 忠氏 吉晴				
			京極期(1634年～1637年) 忠高			
				松平期(1638年～1871年) 直政 綱隆 綱近 吉透 宣維 宗衍 治郷 斎恒 斎貴 定安		
遺跡周辺の状況	低湿地	城下町				城下町の解体

第4項 松江城下町絵図による調査地とその周辺

現存する江戸時代の松江城下町絵図から、17世紀代～19世紀代（堀尾期・京極期・松平期）の松江城下町における屋敷地の変遷を把握することができる。ここでは屋敷地の変遷を知る上で資料とした絵図3点を提示して、各絵図の詳細・屋敷地名義・禄高について述べておきたい。なお、各絵図の左側には調査地周辺部分を示す黒枠で加筆した絵図を、右側にはその部分を拡大して調査地推定箇所を示す黒枠を加筆した絵図を掲載している。

今回の調査地は、北側に東西方向に流れる外堀（北田川）沿いの南岸に所在している。母衣町地内の街区北側に位置し、江戸時代には堀尾期絵図の空白地と京極期絵図の南北方向の短冊状に配置された町屋以外の南側の屋敷地は、この街区を東西にほぼ二分する形で屋敷割りがなされている。

また、絵図に記載がある屋敷地名義の向きを根拠とした場合、調査地周辺の屋敷地の表口は江戸時代を通して道路に面した北側または東側にあたり、調査地は町屋および屋敷地内の裏地（奥側）部分に該当するものと考えられる。以下では、各時期の絵図3点を通して調査地周辺の様子を概観する。

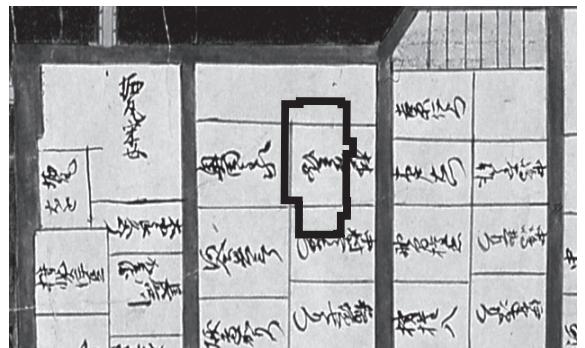
①堀尾期絵図（第7図） 堀尾氏が統治していた時期の絵図として「堀尾期松江城下町絵図」（絵図作成年代：1620～1633年、島根大学附属図書館所蔵）がある。この絵図は複数枚現存する松江城下町絵図の中で、17世紀代前半の松江開府の間もない時期を示す最も古い絵図とされている。

調査地が比定する地点には、街区北端に空白地、その南隣に「林吉兵衛」（禄高300石）の記載が見られる。絵図から空白地の利用状況は知り得ないが、それ以外の場所は堀尾期の段階から屋敷地となっていたことが分かる。



第7図 堀尾期松江城下町絵図

□ …右絵図のトリミング範囲



堀尾期（17世紀代前半）の屋敷地

□ …調査地推定箇所（絵図は上方北）

②京極期絵図（第8図） 京極氏が統治していた時期の絵図として「寛永年間松江城家敷町之図」（絵図作成年代：1634～1637年、丸亀市立資料館所蔵）がある。この絵図は京極家が所蔵していた伝来の確かな絵図である。ただし、現存の京極期絵図は清書本の写しと考えられ、所々に誤写がある。⁽¹⁴⁾

調査地が所在する街区北端は、堀尾期には空白地となっていたが、京極期の段階になると南北方向の明瞭な界線で区画された12軒の町屋が配置されるようになる。⁽¹⁵⁾ 調査地が比定する地点には、街区北端に町屋、その南隣に「松岡四郎太夫」（禄高150石）の記載が見られる。京極期絵図では、堀尾期から屋敷割りはほぼ変化せず、屋敷地をそのまま踏襲している様子が窺える。

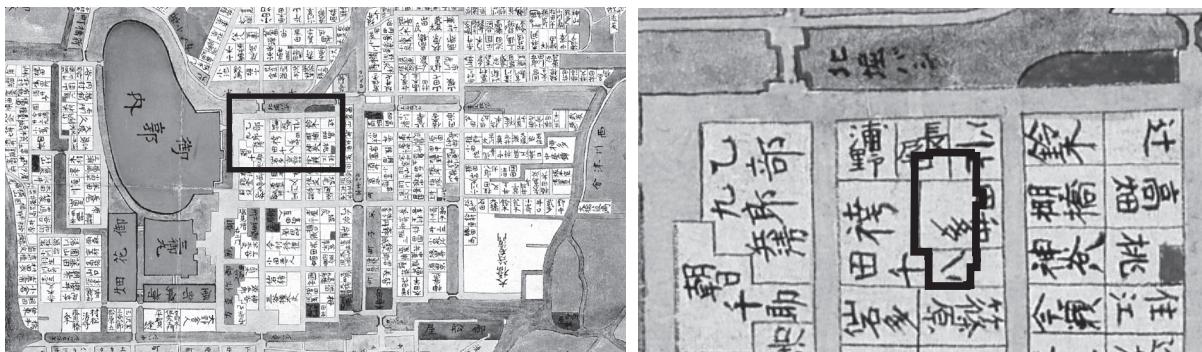


第8図 寛永年間松江城家敷町之図

京極期(17世紀代前半)の屋敷地

③松平期絵図(第9図) 松平氏が統治していた19世紀代中頃の絵図として「松平期松江城下町絵図」(絵図作成年代:1825~1851年、島根大学附属図書館所蔵)がある。

調査地が所在する街区には12軒の屋敷地が配置されている。調査地が比定する地点には、街区北東角に「上川権左衛門」(禄高180石)、その西隣に「長尾傳藏」(禄高100石)、その南隣に「和多田奥八」(禄高450石)⁽¹⁶⁾の記載が見られる。この時期の街区北端の屋敷地は3つに分筆されている。



第2章 註

- (1) 島根県内務部島根県史編纂掛 1930『島根県史9』藩政時代(下)46頁 「…城山と赤山との中間なる低き丘陵宇賀山を截ちて鹽見畠の大濠を作る…此堀鑿土を以て彼の南北田町及中原の沼澤地を埋立たり…」とある。
- (2) 松江城下町遺跡(殿町287)の発掘調査では、屋敷境を境界として北屋敷と南屋敷に分けて調査を実施している。北屋敷では松江層軟砂岩(山土)が堀尾期の屋敷地の造成土として使用されていることが明らかとなっている。
- (3) 松江城下町遺跡のほぼ全域に見られる初期造成土は、旧地表面上に盛られた最初の造成土であることを前提として、17世紀代初頭の堀尾氏による城下町形成段階に施されたものと位置付けている。
- (4) 林 正久 1991「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地理科学46-2』から引用した。
- (5) 前掲註(4)と同じ。
- (6) 島根大学附属図書館編 2006「松江平野の地形とその形成過程」『絵図の世界』から引用した。
- (7) 島根県編 1965『新修島根県史』史料篇2・近世(上)のうち「雲陽大数録」(春日鎧三郎所蔵、天保三年写本)による。
- (8) 山根正明 2009『松江市ふるさと文庫6 堀尾吉晴—松江城への道一』松江市教育委員会から引用した。
- (9) 岡 宏三 2008「中世のプレ松江」『松江藩の時代』山陰中央新報社から引用した。
- (10) 松尾 寿 2008『松江市ふるさと文庫5 城下町松江の誕生と町のしくみ』松江市教育委員会から引用した。
- (11) 島根県内務部島根県史編纂掛 1930『島根県史9』藩政時代(下)51頁 県史の記述は年代の根拠が示されていない。
- (12) この年代根拠については、『堀尾古記』に記載されている慶長13年の条「松江越 十月二日」によるが、諸説ある。
- (13) 西島太郎 2010『松江市ふるさと文庫8 京極忠高の出雲国・松江』松江市教育委員会から引用した。
- (14) 西島太郎 2011「堀尾期松江城下町絵図の制作工程と伝来」『日本歴史 第755号』吉川弘文館から引用した。
- (15) 当地が「町屋」であるという認識については、大矢幸雄・渡辺理絵 2023「堀尾期松江城下町絵図からみた近世初頭における松江城下町の空間的特性」『論集 松江城I』の論考を根拠としている。
- (16) 当該期の屋敷地名義は、島根県立図書館所蔵「嘉永5(1852)年 御家中屋敷割帳写」を参考とした。

第3章 調査の方法と成果

本章では本発掘調査の成果を報告する。第1節では調査の方法について触れ、第2節では本遺跡における基本層序の概要を記し、第3・4節では各調査区で検出した遺構面の状況や遺構と遺物について事実報告を行う。各遺構面の変遷と遺跡の全体的な評価は、第5章でまとめることとする。

第1節 調査の方法

第1項 調査区の位置と遺構面の認定（表3）

本遺跡は、松江城大手前から直線距離で北東へ約300m離れた松江市母衣町50番地外に所在する。本遺跡から西へ約150m離れた場所には、平成18（2006）～20（2008）年度にかけて松江歴史館整備事業に伴う発掘調査を実施した松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外⁽¹⁷⁾）が、さらに本遺跡から南東へ約150m離れた場所には、平成23（2011）～24（2012）年度にかけて松江地方裁判所庁舎新営工事に伴う発掘調査を実施した松江城下町遺跡（母衣町68⁽¹⁸⁾）が所在している。

今回の調査は、松江法務合同庁舎敷地内において計画された新庁舎の工事範囲を発掘調査対象としている。調査区は、既存の現庁舎西側の駐車場部分を1区、現庁舎部分を2区として調査を行った。

1区は、現庁舎西側の駐車場部分にあたる東西9.5m×南北55m（調査面積522m²）の範囲で、平面形が南北方向の長方形となる調査区を設定して調査を実施した。調査は1区から先行して行い、ここでは広範囲の調査面積を確保することが可能であったため、面的な調査を進めることができた。

2区は、現庁舎の建物基礎および地中梁が残っていた場所にあたり、調査区は四方を地中梁で囲まれた東西7m×南北5mの範囲内に東西または南北方向の長さ5～7m×幅2～2.5mのトレチを設定して調査を行った。ここでは狭小な調査面積しか確保することができなかったため、1区の調査成果を踏まえて目的を絞った10箇所のトレチ調査（T1～T10）を実施した。

遺構面の認定は、事前の試掘調査結果を基に、現地調査時に人為的な造成面・生活面（機能面または廃絶面）・遺構の掘り込み面などを基準としている。今回の調査で遺構検出と土層堆積状況の観察を行った結果、1区では4つの遺構面、2区では断面調査に留まったが2つまたは3つの遺構面を確認した。遺構面は、調査時に現地表面に近い上層から検出した順に第1～4遺構面と呼称しており、本報告でもそれを踏襲して、上層から下層の遺構面の順に発掘調査成果について報告する（表3）。

表3 本遺跡における遺構面の認定区分

層位	調査時・本報告共通	時期区分	遺構面の想定期	検出遺構
↑ 上層	現地表面	現代	現代	駐車場部分（1区）・現庁舎部分（2区）
	第1遺構面	松平期	19世紀代前半～中頃	井戸（来待石製井戸・木枠井戸）・土坑
	第2遺構面	京極期	17世紀代前半	礎石建物跡・溝（屋敷境溝含む）・通路跡・土坑
	↓ 第3遺構面	堀尾期	17世紀代初頭～前半	溝（屋敷境溝含む）・土坑
下層	第4遺構面	中世後半か	城下町造成以前	性格不明遺構

第2項 本調査の手順

調査前の現地の状況は、1区は現庁舎の駐車場として利用され、2区は現庁舎が建っていた場所である。本調査は、調査時の作業ヤード（排土仮置き場等）の確保および調査工程を踏まえて1区から調査を開始し、1区の調査完了後に調査区の埋め戻し作業を実施し、続けて2区の調査を行った。

アスファルト舗装直下の搅乱層の除去は、バケットに平爪を装着したバックホーを用いて現況地盤から約100～120cm下までの掘削を行い、以下は人力により遺構面まで掘り下げて遺構検出を行った。遺構は主に移植ゴテを使用して掘り下げ、遺構内の調査は大型の土坑や溝等には土層観察用畦（ベルト）を設置して掘り下げを行った。土坑や柱穴は平面的に全体を検出した後に、柱痕跡の有無や遺構が切り合うものについては先後関係を確認し、その後の段階で半截して断面図を作成した。

調査区および遺構の平面測量には電子平板ソフト（福井コンピュータ製現場端末システム TREND-FIELD）を用い、その測量図と遺構を照合しながら平面図を縮尺1/20で作成してレベルを記録した。平面図の方位は、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺1/20で作成し、土層観察の注記は新版標準土色帖を使用した。遺物の取り上げについては、出土状況を記録した後、必要に応じて取り上げNoを与え、出土地点と層位の記録を行った。

遺構の記録写真は、フルサイズデジタル一眼レフカメラ（Nikon D610）を主に使用し、35mmリバーサルフィルムカメラを併用した。遺構完掘後の調査区全景写真は、各遺構面の調査が完了した段階に写真撮影用足場を用いて、高所からの撮影を行った。

第3項 報告書の作成と経過

報告書の作成は、令和4年度に測量図面やデータなどの整理作業に取り掛かり、遺構の検討と遺物の復元および実測作業を行った。掲載遺物の選別は、主に遺構内および遺構外出土遺物の中から、実測可能で各遺構面の年代の指標となるものを抽出した。遺物が小片で図化できないものは非掲載遺物としたが、その中で器種や形態が判別可能で時期を示すものについては本文中に補うこととした。整理作業および実測作業の後、遺構・遺物のデジタルトレースと遺物の写真撮影を行った。

本報告に掲載した図版は、全てデジタルデータで作成している。編集作業にあたってはDTP方式を採用し、遺構・遺物のトレースはAdobe Illustrator CC2022を使用して図版を作成した後、Adobe InDesign CC2022を用いて割付作業と原稿執筆を行った。

松江城下町遺跡に関する発掘調査報告書は、現在までに15冊刊行している。今回の報告は16冊目となる。このうち、城山北公園線都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書を8冊刊行しており、各報告書には「1～8」のシリーズ番号を配している。

このほかに、松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書『市139』、アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う発掘調査報告書『市149』、松江赤十字病院別棟建設に伴う発掘調査報告書『市153』、松江地方裁判所庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書『市164』、小泉八雲記念館整備事業に伴う発掘調査報告書『市170』、山陰電力所設置工事のうち付属建物新築工事に伴う発掘調査報告書『市182』および『市196』の7冊刊行している。

第2節 基本層序(第10～12図)

本遺跡の基本層序は、今回の調査成果から層序を組み立てた第10図を基本土層とする。第11・12図に図示した土層図は、1区の調査区内に設定した北壁および西壁土層を掲載した。本遺跡の土層は、1区と2区を通して第10図の基本土層と概ね共通するものであり、第11・12図に提示した各遺構面の土層区分については、これに準じて対応するように図示している。

今回の調査で遺構検出と土層堆積状況の観察を行った結果、1区では4つの遺構面、2区では2つまたは3つの遺構面を確認した。ただし、2区で確認した遺構面については、トレンチ調査の土層断面で確認した遺構面である。2区では、現地表面から100～120cm下までは建物基礎による搅乱を受けていたために上層の遺構面は消失しており、1区の調査成果および土層堆積状況を踏まえると、1区の第2～4遺構面に相当する遺構面を確認したものと捉えている。

現地表面は標高2.00～2.10mで、1区の調査区内北西角に層序を確認するために設けたトレンチの最深部で、現地表面下約3.00m(標高-1.00m)の深さまでの土層堆積の確認を行っている。以下では、各遺構面の土層堆積状況について上層から下層の順に詳述する。

第0層：現地表面～搅乱層 標高2.00～2.10m、層厚約100cm

アスファルト舗装以下に堆積する砂利・碎石を含む近現代の搅乱層である。搅乱層中から19世紀代後半(近代を含む)の陶磁器類が出土している。

第1層：第1遺構面 標高1.00～1.20m、層厚約40cm

橙褐色粘土と白色粘土ブロックの混合土を基盤層とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面および遺構内から19世紀代前半～中頃の陶磁器類が出土している。

第2層：第2遺構面 標高0.50～0.60m、層厚10cm

1区の調査区内北側では黒灰色粘土、南側では黄灰色シルト質軟砂岩を基盤層とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面および遺構内から17世紀代前半の陶磁器類が出土している。

第3層：第3遺構面 標高0.30～0.50m、層厚40cm

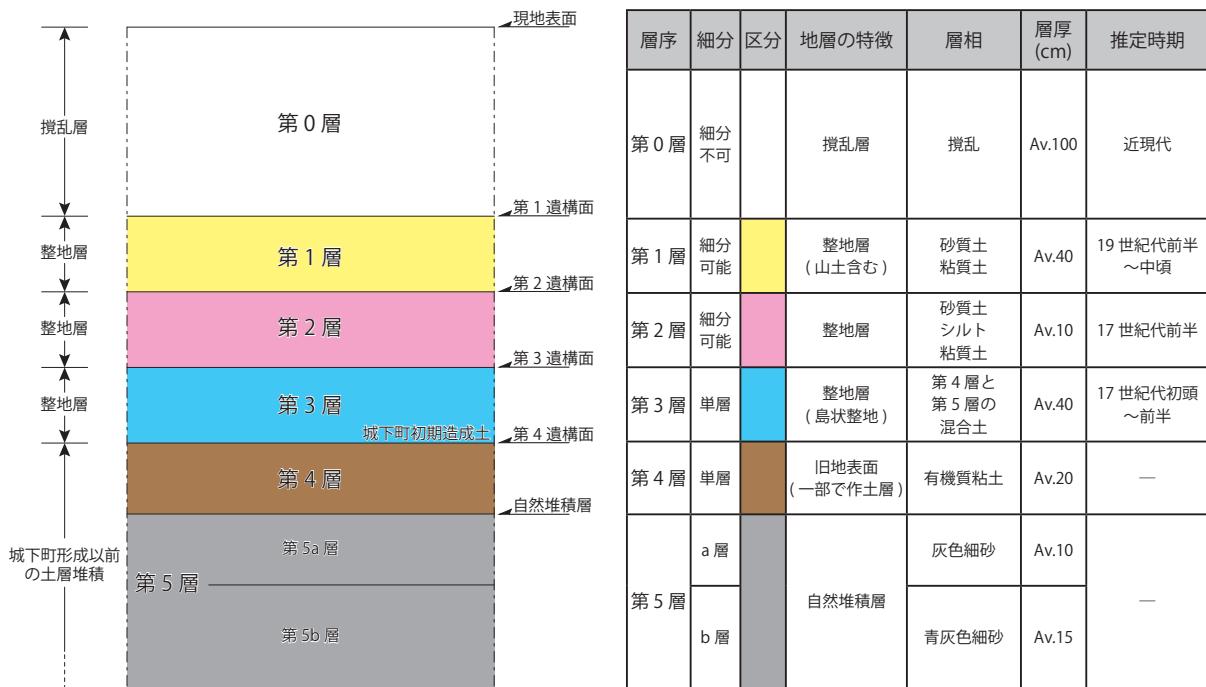
城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された城下町初期造成段階の整地層である。第3層よりも下位にある第4層の黒褐色粘質土とその直下の第5a層の灰色細砂の混合土を主体とし、この土層は屋敷境溝などの掘削によって生じた残土をそのまま屋敷地の造成土として使用しているものと考えられる。この遺構面および遺構内から17世紀代初頭～前半の陶磁器類が出土している。

第4層：第4遺構面 標高0.10m、層厚20cm

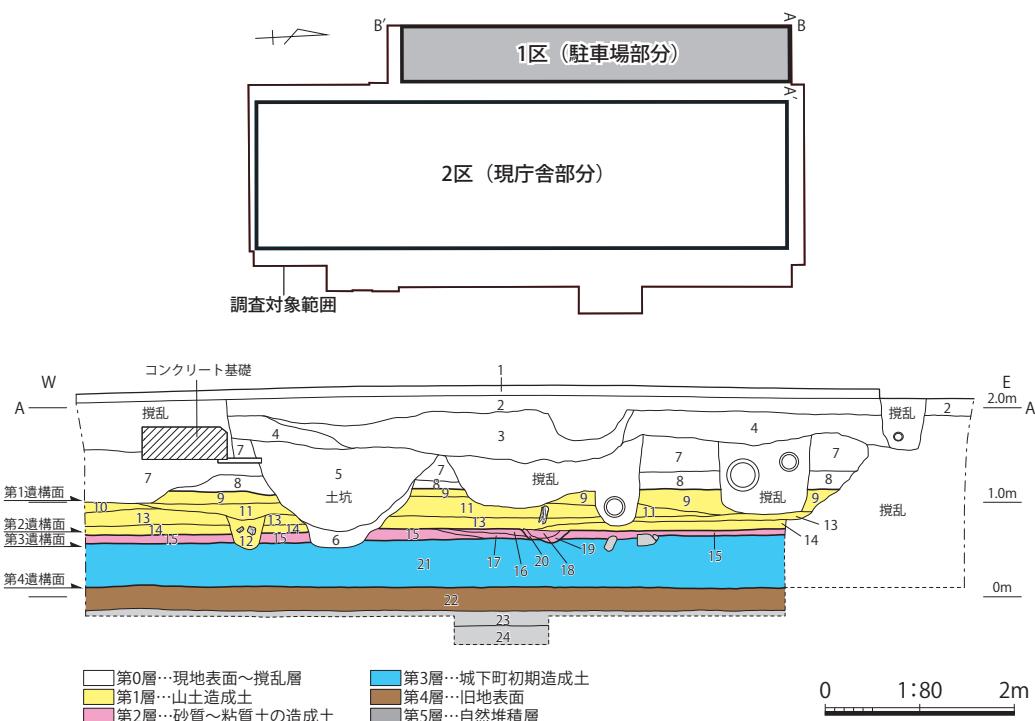
土壤分解が進んだ有機質の黒褐色粘質土を主体とする城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、下位の第5層上面にほぼ均一の厚さで水平堆積している。

第5層：自然堆積層 標高-0.10m

灰色細砂を主体とする堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。灰色を呈する細砂を第5a層、青灰色を呈する細砂を第5b層としたが、これらの土層は色調の違いがあるだけで同じ細粒の砂層である。

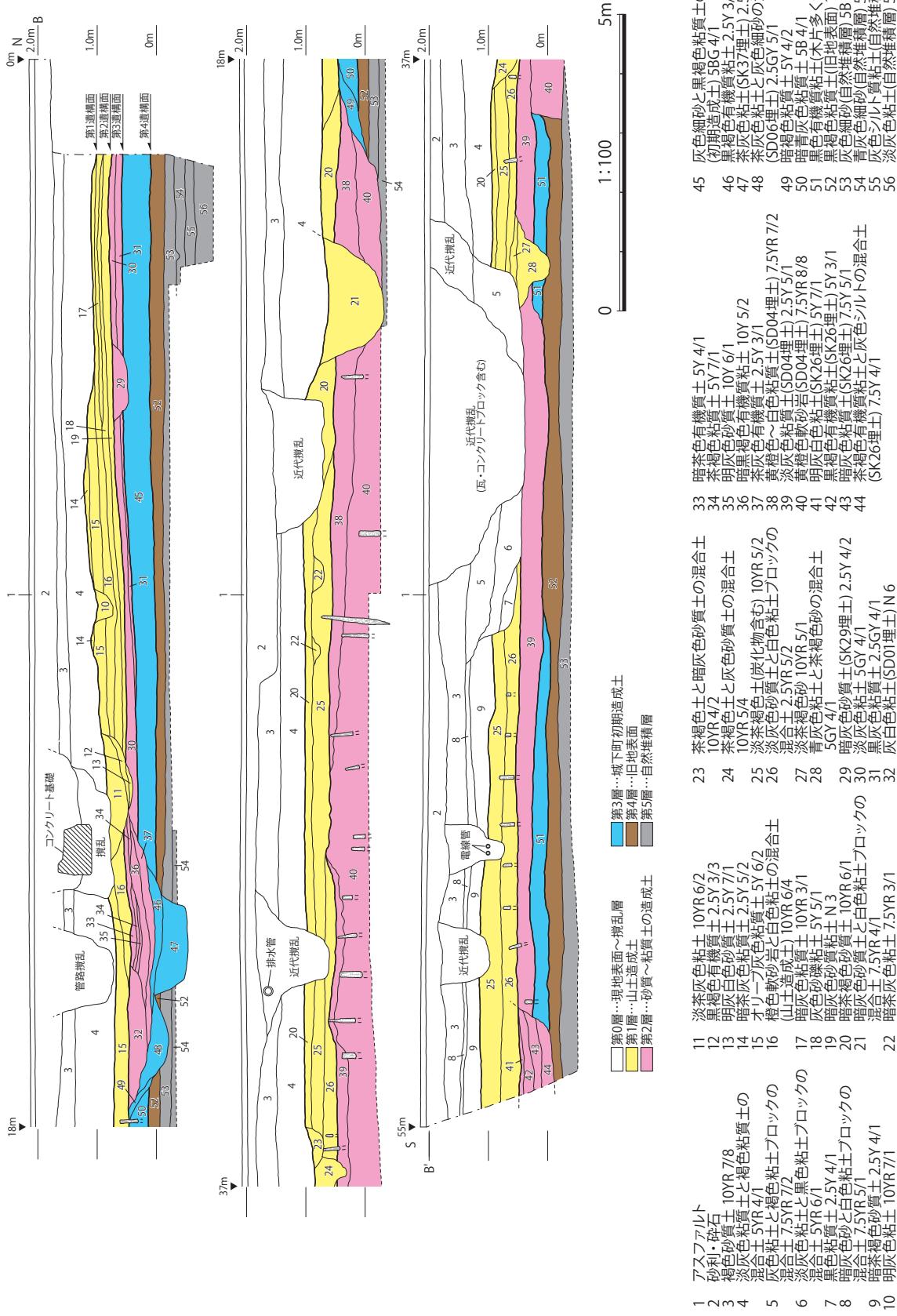


第10図 基本土層模式図



- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 アスファルト | 13 暗灰色砂質粘土 N3/0 |
| 2 砂利・砕石 | 14 淡灰色粘土 5GY8/1 |
| 3 真砂土 7.5YR8/4 | 15 黒灰色粘質土 2.5GY4/1 |
| 4 砂利と灰色粘土ブロック(搅乱層) 2.5Y6/1 | 16 灰白色砂礫(SF01埋土) 5GY8/1 |
| 5 茶灰色粘質土 7.5YR5/1 | 17 淡茶褐色粘質土(SF01埋土) 2.5Y4/2 |
| 6 茶灰色粘質土と褐褐色粘土ブロックの混合土 10YR6/4 | 18 灰色粘土(SD02埋土) 2.5GY6/1 |
| 7 淡灰色粘質土と褐色粘質土の混合土 5YR4/1 | 19 暗灰色有機質粘土(SD02埋土) 2.5GY3/1 |
| 8 黄灰色粘質土 10YR4/3 | 20 緑灰色粘質土(SD02埋土) 10Y4/2 |
| 9 橙褐色粘土と白色粘土ブロックの混合土 10YR7/8 | 21 灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土(初期造成土) 5BG4/1 |
| 10 暗灰色粘質土 10YR3/1 | 22 黒褐色粘質土(旧地表面) 10YR3/2 |
| 11 明オリーブ灰色粘土と白色粘土ブロックの混合土 5Y8/2 | 23 灰色細砂(自然堆積層) 5B6/1 |
| 12 灰褐色粘質土 7.5YR4/2 | 24 青灰色細砂(自然堆積層) 5B5/1 |

第11図 1区 北壁土層図



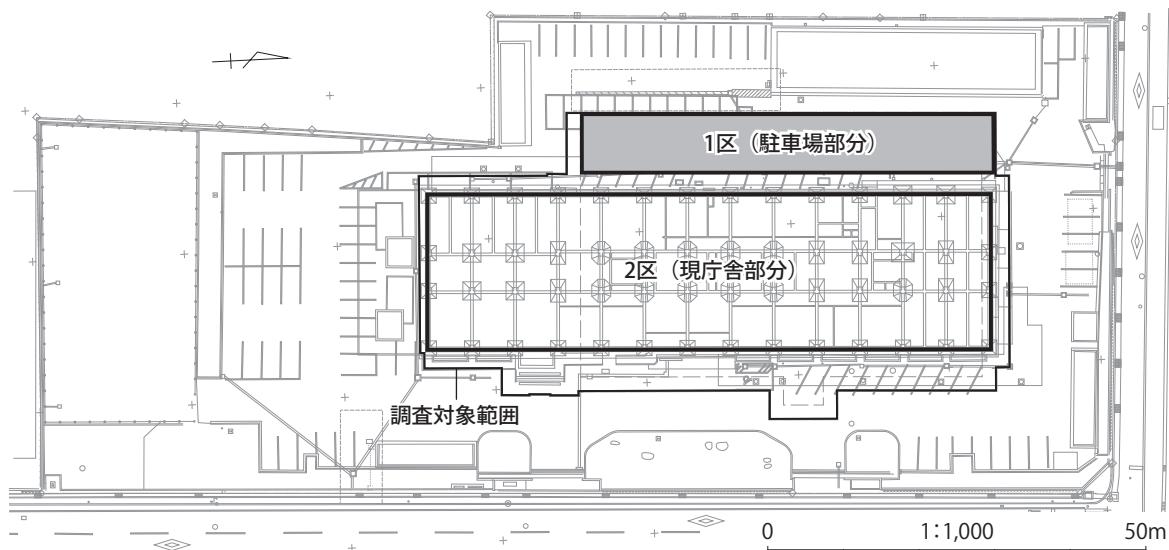
第12図 1区 西壁土層図

第3節 1区の調査（第13図）

1区は、現庁舎西側の駐車場部分にあたる東西9.5m×南北55m（調査面積522m²）の範囲に、平面形が南北方向の長方形となる調査区を設定して調査を実施した。ここでは広範囲の調査面積を確保することが可能であったため、面的な調査を行うことができた。

調査前の現況はアスファルト舗装がなされており、現地表面は標高2.00～2.10mである。アスファルト舗装直下には層厚約100cmを測る搅乱層が堆積していたため、0.45m³バックホーを用いた表土掘削を実施した。重機掘削はバケットに平爪を装着し、少しづつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。併せて土層観察を行いながら、第1遺構面上まで余裕を持たせて掘削を停止した。搅乱層中からは、19世紀後半（近代を含む）の肥前系磁器、瀬戸美濃磁器、在地系陶磁器が出土した。

調査の結果、1区では4つの遺構面を確認した。以下では、現地表面に近い上層の遺構面から順に第1～4遺構面とし、検出遺構と出土遺物を含めた各遺構面の詳細について報告する。



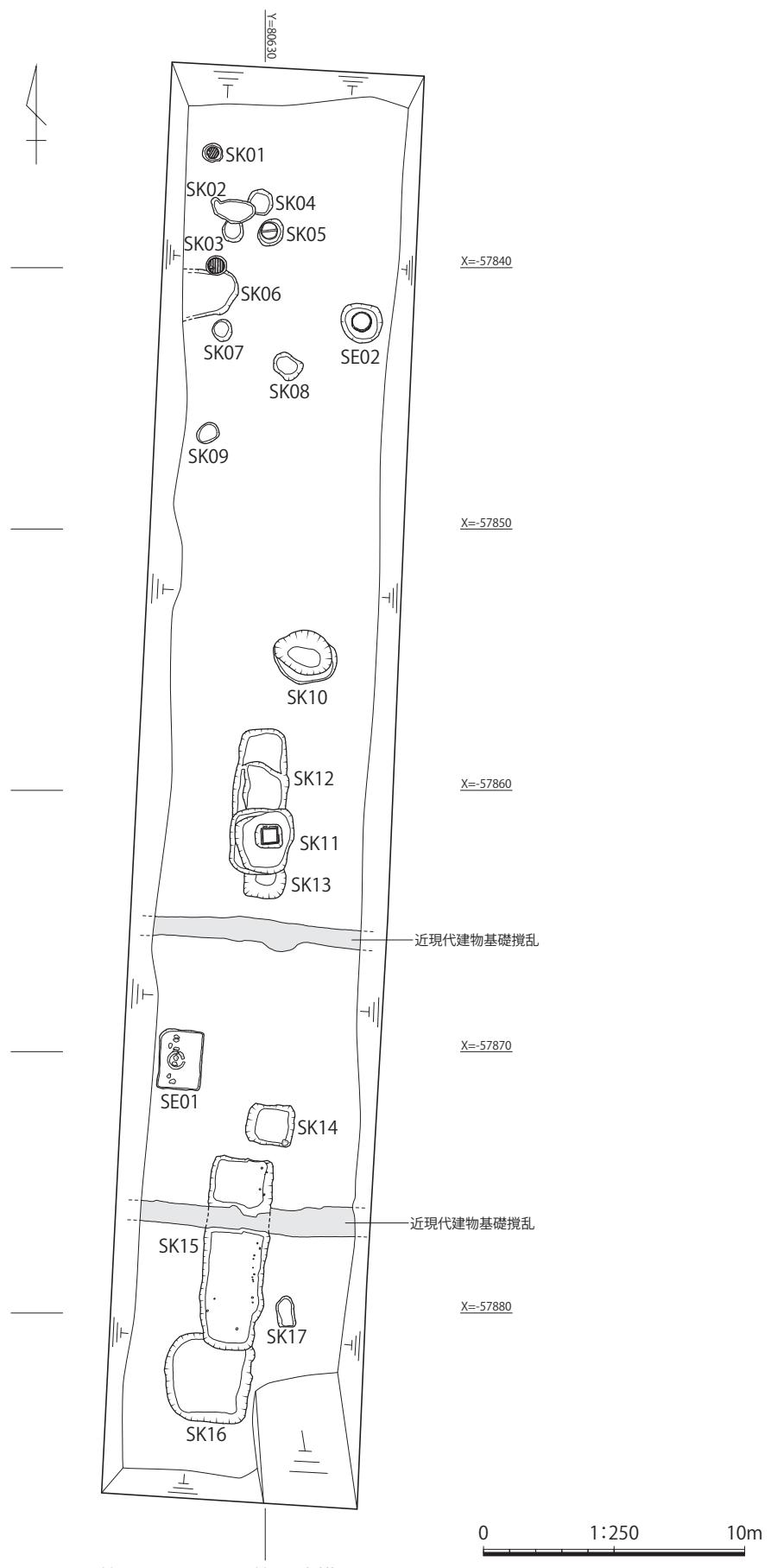
第13図 1区 調査区配置図

第1項 第1遺構面の概要（第14図）

第1遺構面は、標高1.00～1.20mで検出した遺構面である。遺構は、土坑17基（SK01～17）、⁽¹⁹⁾来待石製井戸1基（SE01）、木枠井戸1基（SE02）を検出した。この遺構面は、現地表面以下に堆積する搅乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面である。

第1遺構面の基盤となる土層は、橙褐色粘土と白色粘土ブロックの混合土を基盤とする整地層である。層厚は40cmを測り、最上位の整地面で遺構を検出したことから、これを第1遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から19世紀前半～中頃が中心となるものと想定している。

なお、報告書作成時に陶磁器指導会を実施した結果、「第1～2遺構面までの間に位置付けられる17世紀後半～18世紀後半の陶磁器が数点と極端に少ない。特に第1遺構面については、肥前陶磁器の生産地年代で、九陶IV期（1690～1780年代）の陶磁器群が抜けている可能性がある。」⁽²⁰⁾という指摘を受けている。



第14図 1区 第1遺構面平面図

第2項 第1遺構面の遺構と遺物

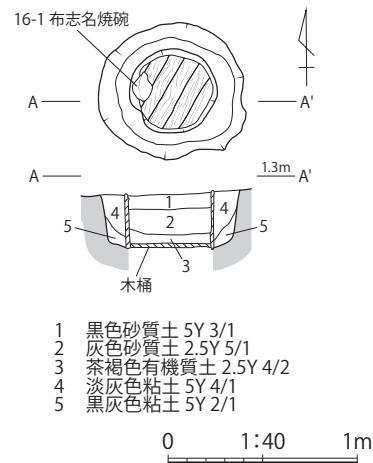
埋桶土坑 SK01（第15図）

調査区の北西角で検出した埋桶土坑である。検出面は標高1.22mで、平面形は円形を呈する。土坑の掘り方の規模は、直径76cm、深さ30cmを測る。埋桶は、直径45cm、高さ30cmを測る木桶である。木桶は、外面に竹製のタガを1条巻いて固定している。

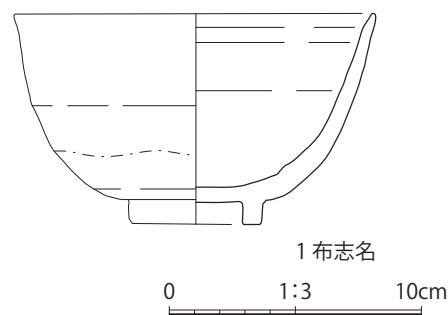
桶の埋土は3層に分層でき、木桶内から陶器碗が横向きに直立した状態で出土した。この埋桶は、埋桶土坑SK05・06と近接した位置で検出しており、遺構の性格は便槽遺構の可能性が考えられる。⁽²¹⁾

SK01出土遺物（第16図）

ここではSK01の木桶内から出土した遺物を掲載する。16-1は在地系陶器（布志名焼）の丸碗である。赤褐色の素地で内外面に灰釉を施し、胴部下方から高台は露胎。19世紀代前半。なお、掲載した遺物以外に肥前磁器が出土している。



第15図 SK01 平面図・断面図



第16図 SK01 出土遺物

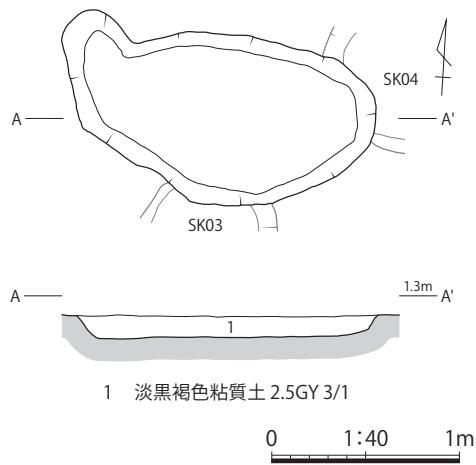
土坑 SK02（第17図）

調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高1.20mで、平面形は橢円形を呈する。規模は上縁長軸が1.74m、短軸が90cm、深さ12cmを測る。

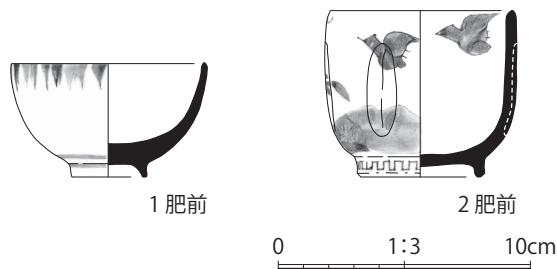
土坑埋土は淡黒褐色粘質土の単層で、埋土から陶磁器と土師器皿が出土した。

SK02出土遺物（第18図）

ここではSK02の埋土から出土した遺物を掲載する。18-1は肥前磁器の小壺である。丸形の小壺で、口縁部外面に雨降文を描く。九陶V期(1820～1860年代)。18-2は肥前磁器の筒形碗である。胴部外面に橢円状の窪みをもつ碗で、口縁部内面に鳥文、胴部外面に竹筐・鳥文、高台外面に櫛歯文を描く。九陶V期(1820～1860年代)。なお、掲載した遺物以外に須佐擂鉢・土師器皿が出土している。



第17図 SK02 平面図・断面図



第18図 SK02 出土遺物

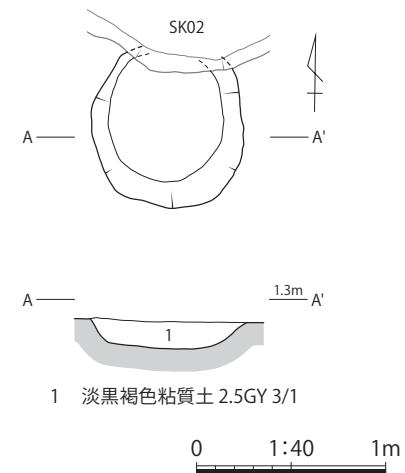
土坑 SK03（第19図）

調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高1.20mで、平面形は円形を呈する。規模は直径80cm、深さ18cmを測る。SK01やSK05と規模が類似する円形土坑だが、土坑内に埋桶は遺存していない。土坑の北側はSK02と一部切り合い、新旧関係はSK03が古く、SK02が新しい土坑である。

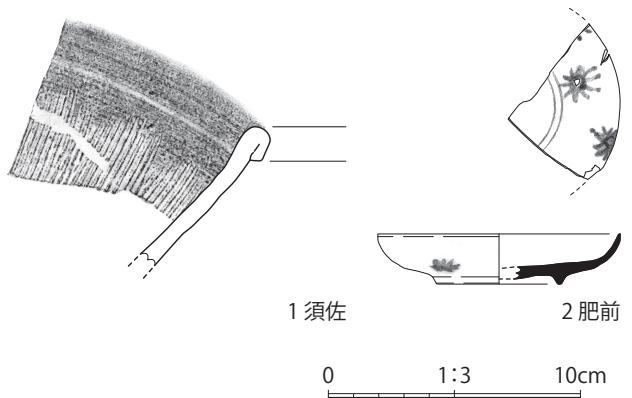
土坑埋土は淡黒褐色粘質土の単層で、埋土から陶磁器と土師器皿が出土した。

SK03出土遺物（第20図）

ここではSK03の埋土から出土した遺物を掲載する。20-1は須佐擂鉢で、口縁部のみ残存する。口縁部上端に面をもち、口縁端部を外側に向かって折り返して丸くおさめる。スリ目単位は10条を1単位とし、スリ目上端を口縁部下で揃える。19世紀代前半のもので、須佐擂鉢佐伯分類II群A類に該当する。20-2は肥前磁器の皿である。丸形の小皿で、内外面に花卉文を描く。九陶V期（1780～1860年代）。なお、掲載した遺物以外に京信系陶器・土師器皿が出土している。



第19図 SK03 平面図・断面図



第20図 SK03 出土遺物

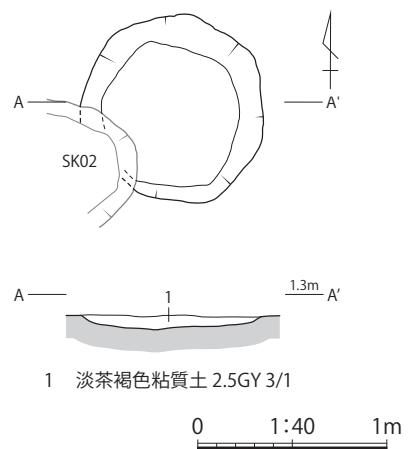
土坑 SK04（第21図）

調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高1.20mで、平面形は円形を呈する。規模は直径1.00m、深さ8cmを測る。SK01やSK05と規模が類似する円形土坑だが、土坑内に埋桶は遺存していない。土坑の南西側はSK02と一部切り合い、新旧関係はSK04が古く、SK02が新しい土坑である。

土坑埋土は淡茶褐色粘質土の単層で、埋土から陶磁器が出土した。

SK04出土遺物

遺物は小片のため図示できなかったが、SK04の埋土から19世紀代前半～中頃の肥前磁器が出土している。



第21図 SK04 平面図・断面図

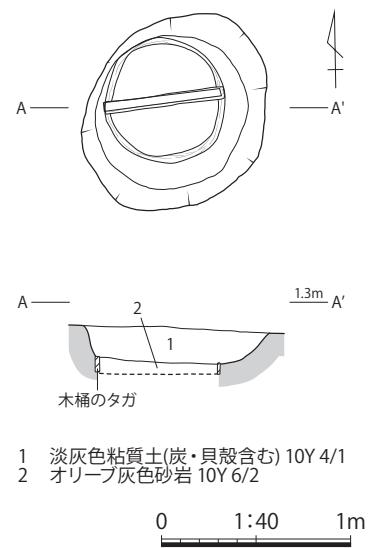
埋桶土坑 SK05（第22図）

調査区の北西側で検出した埋桶土坑である。検出面は標高1.18mで、平面形は円形を呈する。土坑の掘り方の規模は、直径1.10m、深さ26cmを測る。埋桶は、直径65cm、高さ8cm以上を測る木桶と考えられるが、土坑床面に竹製のタガ1条と底板の一部のみ遺存していた。

桶の埋土はオリーブ灰色砂岩の単層が堆積する。この埋桶は、埋桶土坑SK01・06と近接した位置で検出しており、遺構の性格は便槽遺構の可能性が考えられる。

SK05出土遺物

遺物はいずれも小片や細片のため図示できなかったが、SK05の埋土から19世紀代前半～中頃の肥前磁器・在地系陶器・須佐擂鉢・瓦が出土している。



第22図 SK05 平面図・断面図

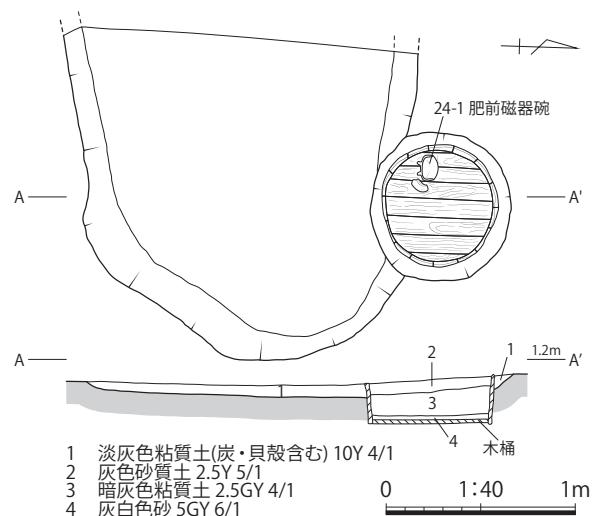
埋桶土坑 SK06（第23図）

調査区の北西角で検出した埋桶土坑である。検出面は標高1.12mで、平面形は橢円形を呈する。埋桶土坑としたが、埋桶は土坑の北側に位置し、その南側にやや規模の大きな土坑を伴う形状で検出した。土坑の規模は、上縁長軸1.90m以上、短軸1.70m、深さ8cmを測る。埋桶は、直径65cm、高さ25cmを測る木桶である。木桶は、外面に竹製のタガを1条巻いて固定している。

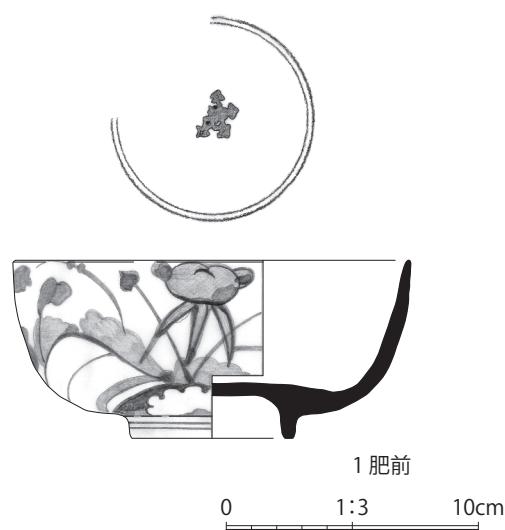
桶の埋土は3層に分層でき、木桶内から磁器碗が横向きに直立した状態で出土した。この埋桶は、埋桶土坑SK01・05と近接した位置で検出しており、遺構の性格は便槽遺構の可能性が考えられる。

SK06出土遺物（第24図）

ここではSK06の木桶内から出土した遺物を掲載する。24-1は肥前磁器の半球碗である。胴部外面に草花文を描き、見込みにコンニャク印判で五弁花を施す。九陶V期（1820～1860年代）。なお、掲載した遺物以外に在地系陶器・須佐擂鉢・土師器皿が出土している。



第23図 SK06 平面図・断面図



第24図 SK06出土遺物

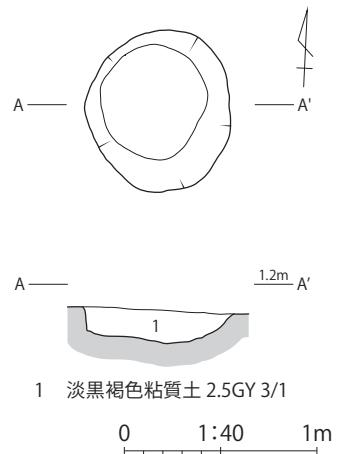
土坑 SK07（第25図）

調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高1.10mで、平面形は円形を呈する。規模は直径65cm、深さ20cmを測る。

土坑埋土は淡黒褐色粘質土の単層で、埋土から陶磁器が出土した。

SK07 出土遺物

遺物はいずれも小片のため図示できなかったが、SK07の埋土から19世紀代前半～中頃の肥前磁器・在地系陶器が出土している。



第25図 SK07 平面図・断面図

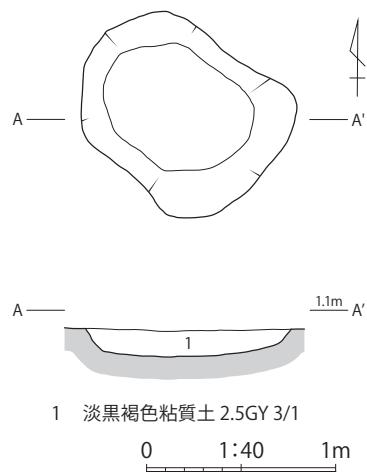
土坑 SK08（第26図）

調査区の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高1.00mで、平面形は歪んだ橢円形を呈する。規模は上縁長軸1.10m、短軸80cm、深さ15cmを測る。

土坑埋土は淡黒褐色粘質土の単層で、埋土から陶磁器と土師器皿が出土した。

SK08 出土遺物

遺物はいずれも小片のため図示できなかったが、SK08の埋土から19世紀代中頃～後半の肥前磁器・在地系陶器・須佐擂鉢・土師器皿が出土している。



第26図 SK08 平面図・断面図

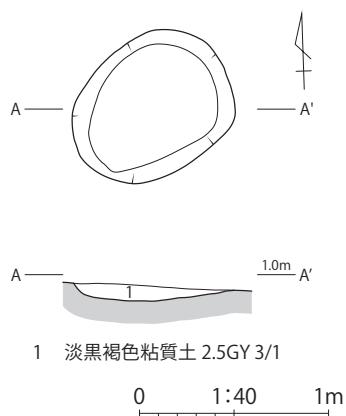
土坑 SK09（第27図）

調査区の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高0.95mで、平面形は橢円形を呈する。規模は上縁長軸90cm、短軸70cm、深さ10cmを測る。

土坑埋土は淡黒褐色粘質土の単層で、埋土から陶磁器が出土した。

SK09 出土遺物

遺物は小片のため図示できなかったが、SK09の埋土から19世紀代前半～中頃の肥前磁器が出土している。



第27図 SK09 平面図・断面図

土坑 SK10（第 28 図）

調査区の中央からやや北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.95m で、平面形は歪んだ橢円形を呈する。規模は上縁長軸 2.50 m、短軸 2.05 m、深さ 76 cm を測る。

土坑埋土は 4 層に分層でき、上位層の黒色有機質粘土（ゴミ層）と淡灰色粘土から陶磁器・木製品・瓦が出土した。

SK10 出土遺物（第 29 図）

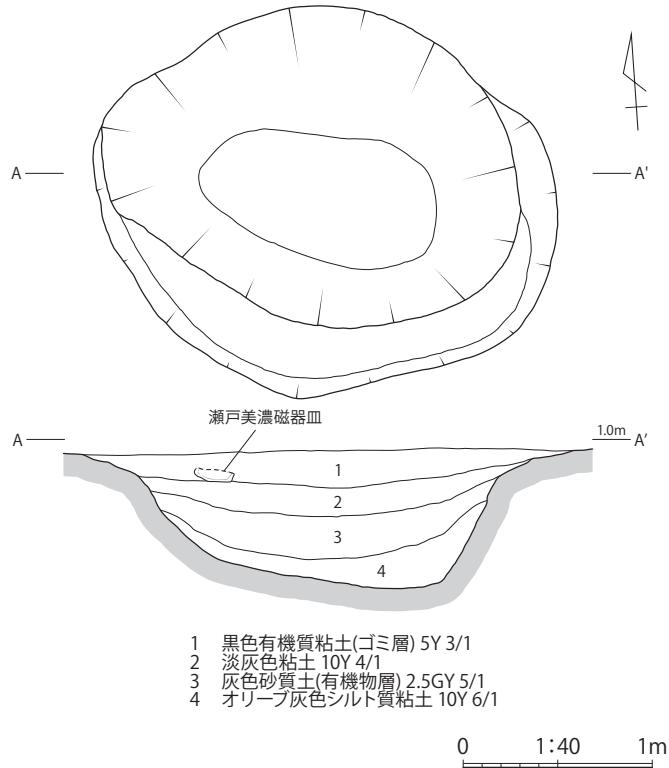
ここでは SK10 の埋土から出土した遺物を掲載する。29-1～5 は国産陶器である。

29-1 は萩系陶器の底広形の碗である。高台から上方に向かって緩やかに湾曲する胴部で、底部の器壁は極めて薄い。見込みに 5 箇所の目跡が残る。高台は露胎。19 世紀代前半。29-2・3 は在地系陶器（布志名焼）

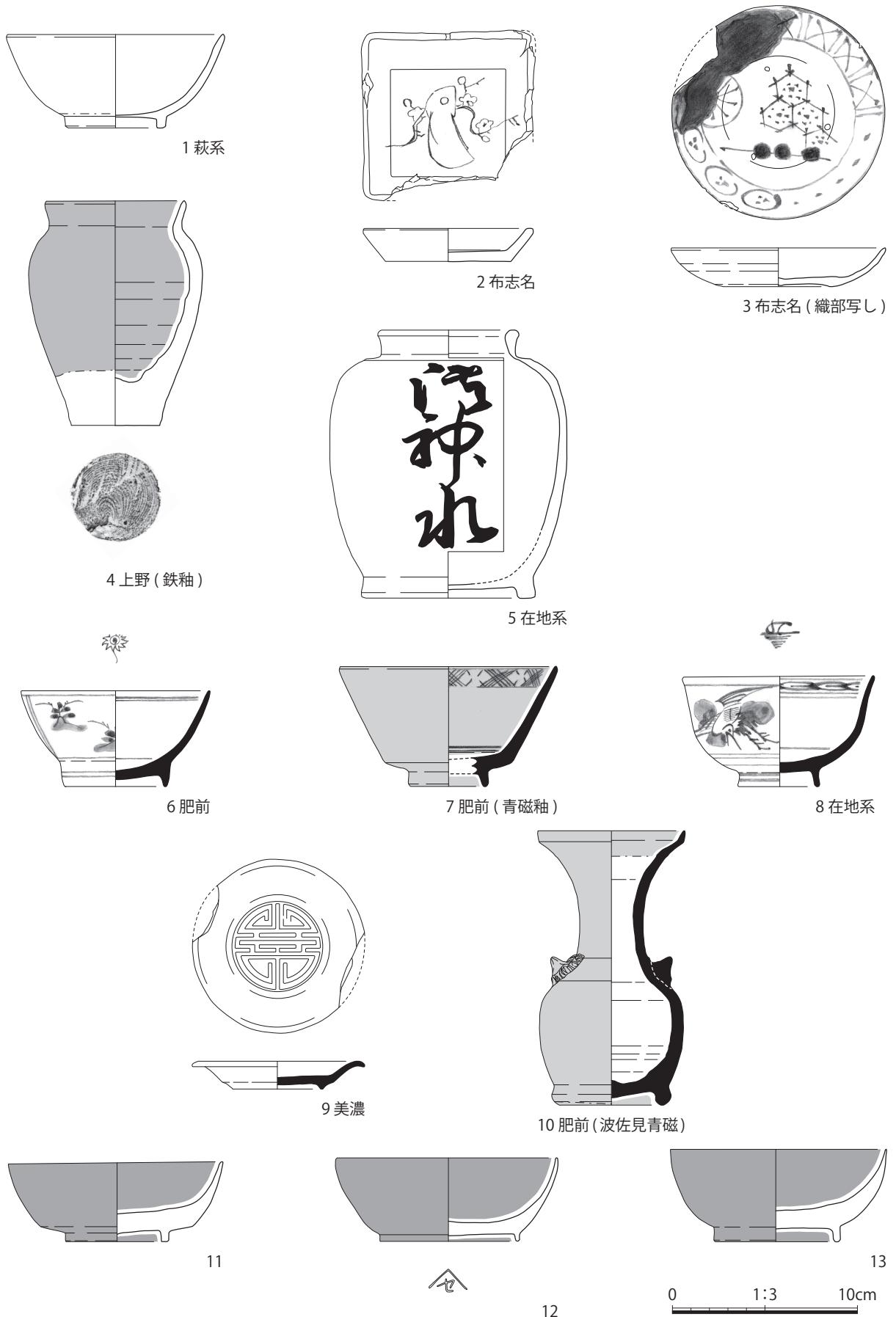
の皿である。29-2 は型押成形の方形皿で、内外面に薄い黄釉を施す。見込みに黒呉須で宝文を描く。19 世紀代前半。⁽²²⁾ 29-3 は織部焼の写し物の丸皿である。片側の口縁部周辺に緑釉を掛け流し、内面に幾何学文を描く。高台の周囲に釉剥ぎを施す。19 世紀代前半。29-4 は肥前系陶器（上野焼）の三官飴壺である。卵形の壺で、内外面に鉄釉を施し、胴部下方から底部は露胎。底部外面に糸切り痕をもつ。19 世紀代前半か。29-5 は在地系陶器の壺である。胴丸形の壺で、内面に鉄釉、外面に白濁釉を施す。胴部外面に青呉須で「御神水」と書かれている。19 世紀代前半。

29-6～10 は国産磁器である。29-6・7 は肥前磁器の碗である。29-6 は広東碗で、胴部外面に平行線で区画した中に萩文、見込みに火焰宝珠文を描く。断面に漆継ぎ痕をもつ。九陶 V 期（1780～1810 年代）。29-7 は青磁染付碗である。内外面に青磁釉を施し、口縁部内面に櫛文を描く。九陶 V 期（1780～1810 年代）。29-8 は在地系磁器の端反碗である。口縁端部をわずかに外反させる碗で、口縁部内面に渦繋ぎ文、胴部外面に鶴文、見込みに帆掛舟文を描く。19 世紀代前半か。29-9 は美濃磁器の丸皿である。白磁の皿で、見込みに紗綾形文の陰刻を施す。19 世紀代中頃。29-10 は肥前磁器（波佐見）の青磁仏花瓶である。盤口形の仏花瓶で、口縁部内面から外面全体にかけて青磁釉を施す。胴部の括れ部分に鳥形の粘土を貼り付けている。九陶 V 期（1820～1810 年代）。

29-11～13 は木製品である。いずれも器高が 5cm 未満で、高台高が 8mm 未満の浅い漆器椀である。29-11 は腰張形の平椀で、塗色は内外面ともに黒漆である。29-12・13 は平椀で、塗色は内外面ともに黒漆である。29-12 は高台内に「八セ」の陰刻を施す。なお、掲載した遺物以外に須佐擂鉢・瓦が出土している。



第 28 図 SK10 平面図・断面図



第29図 SK10 出土遺物

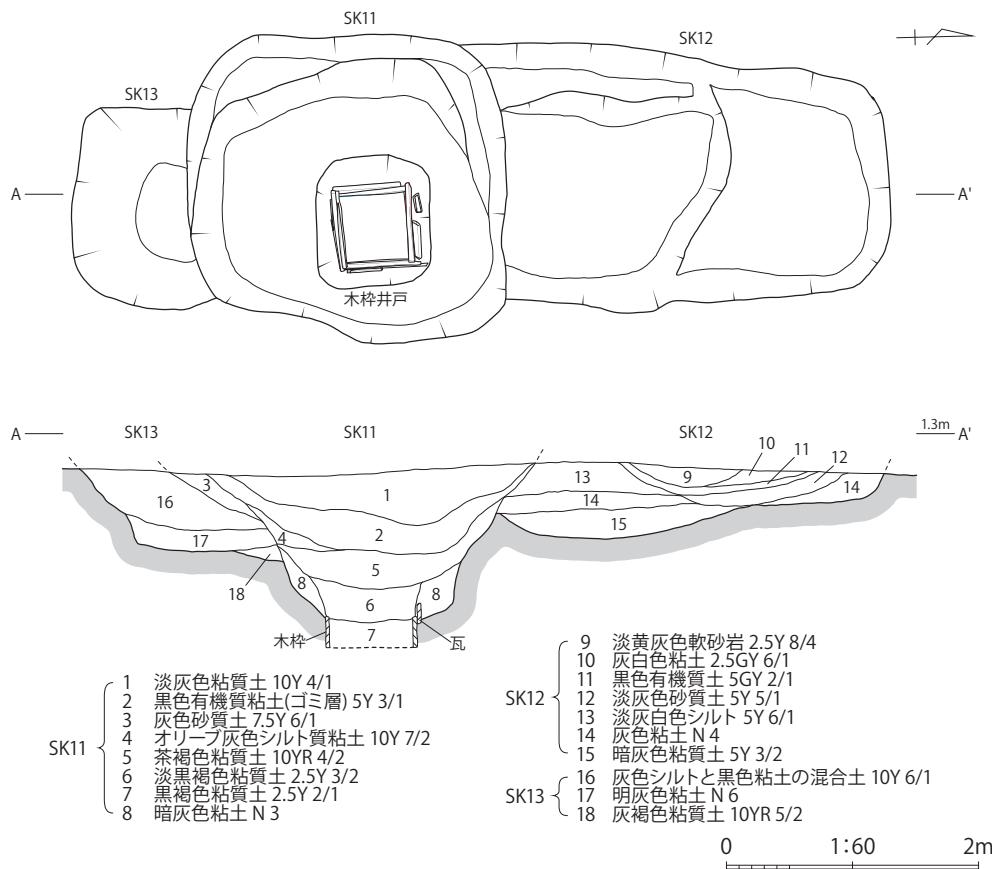
土坑 SK11・12・13（第30図）

調査区の中央で検出した土坑で、調査時に3基の土坑が互いに切り合った状態で遺構を検出したため、ここではまとめて取り扱う。土坑の新旧関係はSK12・13が古く、SK11が新しい土坑である。

SK11は、3基の土坑の中央で検出した廃棄土坑である。検出面は標高1.05mで、平面形は隅丸方形を呈する。規模は上縁長軸2.50m、短軸2.40m、深さ1.40mを測る。土坑埋土は8層に分層でき、上位層の黒色有機質粘土（ゴミ層）と中間層の茶褐色粘質土から陶磁器・木製品・金属製品・瓦が出土した。また、この土坑の床面付近にあたる標高-0.20m地点では、長さ70cm、幅22cm、厚さ2cmの板材が方形状に組み込まれた木枠遺構を検出した。木枠遺構の規模は長さ70cm四方、深さ25cm以上を測る。この木枠遺構は、遺構の底部で湧水が確認できることから井戸の可能性を考えており、土層堆積状況から当初は井戸として機能していたが、廃絶時には廃棄土坑として二次利用されたものと捉えている。

SK12は、SK11の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高1.05mで、平面形は長楕円形を呈する。規模は上縁長軸2.80m以上、短軸2.10m、深さ60cmを測り、土坑の南側はSK11と切り合う。土坑埋土は7層に分層でき、上位層の黒色有機質土から陶磁器と瓦が出土した。

SK13は、SK11の南側で検出した土坑である。検出面は標高1.00mで、平面形は隅丸方形を呈する。規模は上縁長軸1.60m以上、短軸90cm、深さ60cmを測り、土坑の北側はSK11と切り合う。土坑埋土は4層に分層できるが、この土坑から遺物は出土していない。

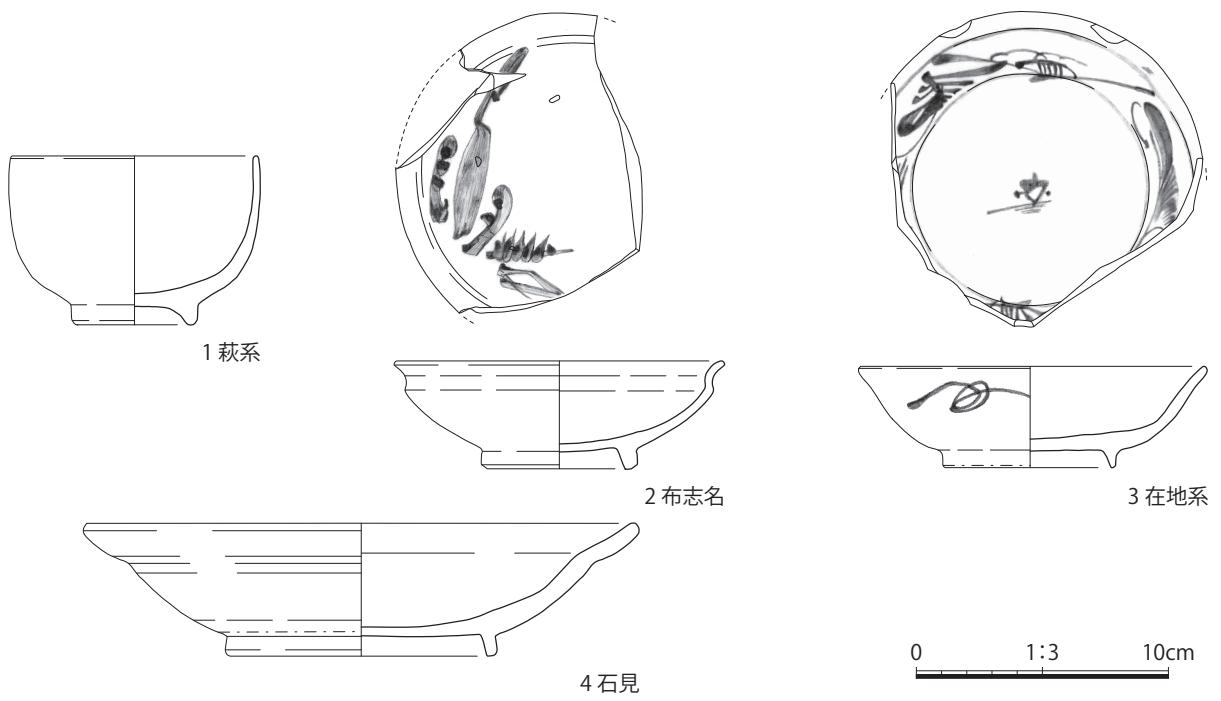


第30図 SK11・12・13 平面図・断面図

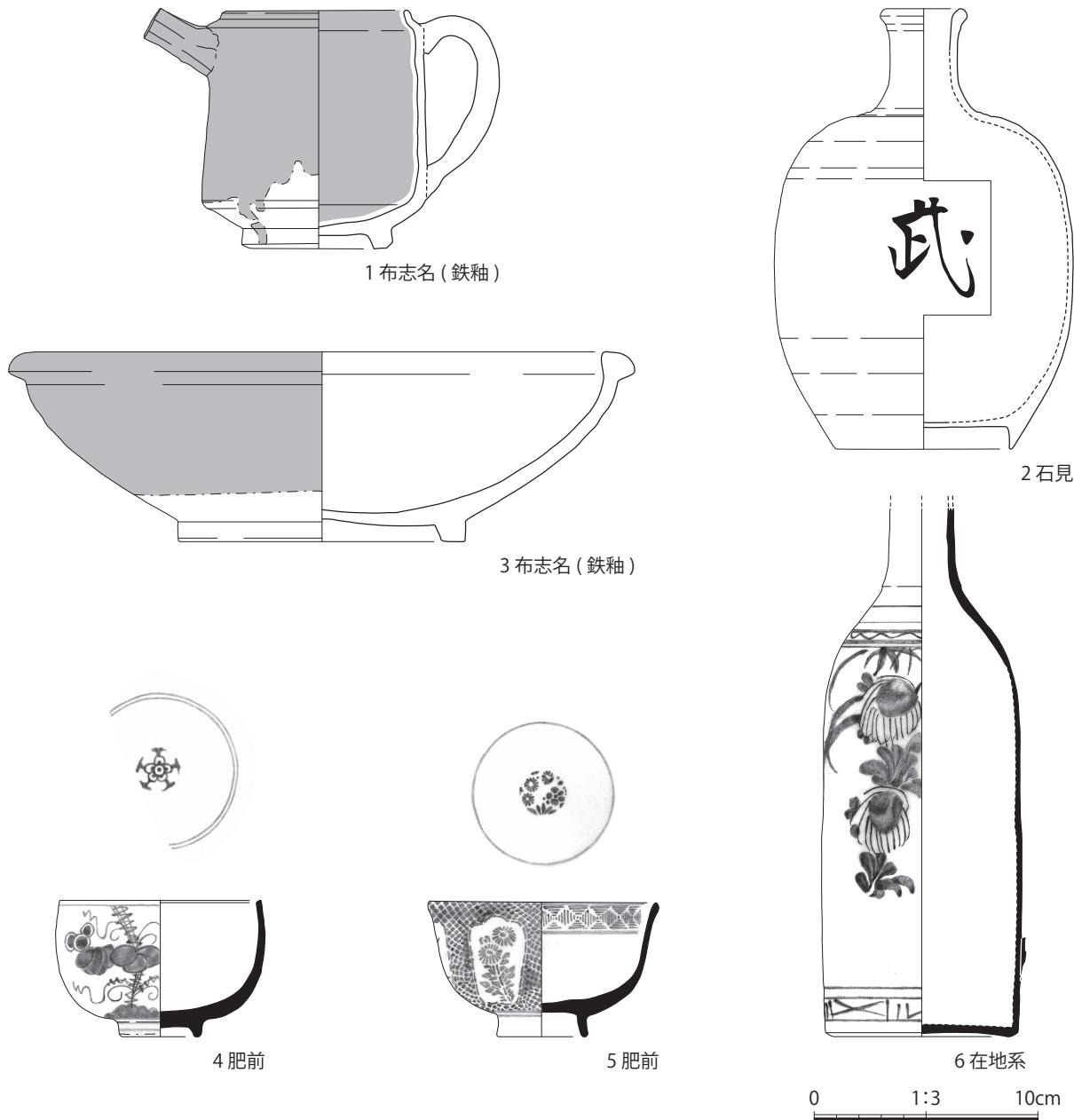
SK11 出土遺物（第31・32図）

ここではSK11の埋土から出土した遺物を掲載する。31-1～4・32-1～3は国産陶器である。31-1は萩系陶器の腰張碗である。高台から上方に向かって直線的に延びる胴部をもつ碗で、内外面に透明釉を施す。畳付無釉。19世紀代前半。31-2は在地系陶器（布志名焼）の折縁皿である。口縁端部を外側に折り曲げ、内外面に透明釉を施す。見込みに黒呉須で草文を描き、3箇所の目跡が残る。畳付から高台内は無釉。19世紀代前半。31-3は在地系陶器の皿である。半磁器の木盆形の皿で、内外面に白濁釉を施す。口縁部内面に肥前磁器を模倣した染付で花唐草文、見込みに帆掛舟文を描く。19世紀代前半か。31-4は在地系陶器（石見焼）の折縁皿である。内外面に灰釉を施し、高台外側端部を面取りする。高台は露胎。19世紀代後半か。32-1は在地系陶器（布志名焼）の汁差である。蓋付きの汁差だが、蓋は出土していない。円筒形の胴部をもち、内外面に鉄釉を施し、胴部下方から高台は無釉。胴部の片側に把手が付く。19世紀代後半。32-2は在地系陶器（石見焼）の徳利である。口縁部内面から外面全体にかけて透明釉を施す。口縁端部を丸くおさめ、肩部から胴部下方にかけて丸く膨らむ肩丸形の徳利で、底部は碁笥底状の抉りをもつ。胴部外面に黒呉須で「武代店」と書かれる通い徳利である。19世紀代後半。32-3は在地系陶器（布志名焼）の捏鉢である。浅丸形の捏鉢で、赤褐色の素地で内面に黄釉、外面に鉄釉を施し、胴部下方から高台は露胎。口縁端部を玉縁状におさめ、見込みに目跡が残る。19世紀代前半。

32-4～6は国産磁器である。32-4・5は肥前磁器の碗である。32-4は丸碗で、胴部外面に蔓草文、見込みに手描きで五弁花を描く。九陶V期（1780～1810年代）。32-5は端反碗で、型紙摺りで口縁部内面に市松文、胴部外面に菊花文、見込みに環状の松竹梅文を施す。19世紀代後半（明治以降）。32-6は在地系磁器の瓶である。胴部は円筒形で、外面に青呉須で草花文を描く。底部無釉。19世紀代前半。なお、掲載した遺物以外に瀬戸美濃磁器・京信系陶器・木製品・瓦が出土している。



第31図 SK11出土遺物（1）

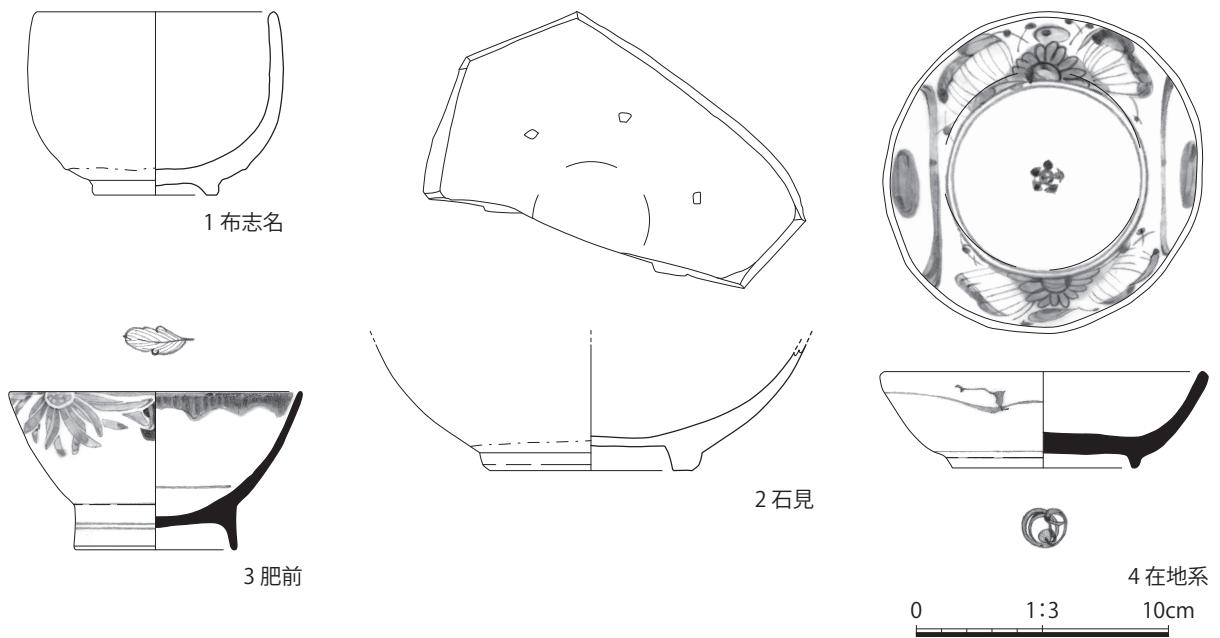


第32図 SK11出土遺物（2）

SK12出土遺物（第33図）

ここではSK12の埋土から出土した遺物を掲載する。33-1・2は国産陶器である。33-1は在地系陶器（布志名焼）の碗である。腰張碗のいわゆる「ぼてぼて茶碗」⁽²³⁾で、内外面に青地釉を施し、胴部下方から高台は露胎。19世紀代前半。33-2は在地系陶器（石見焼）の鉢である。内外面に透明釉を施す。見込みに目跡が残り、高台外側端部を面取りする。高台は露胎。19世紀代前半。

33-3・4は国産磁器である。33-3は肥前磁器の広東碗で、胴部外面に草花文、見込みに葉文を描く。断面に漆継ぎ痕をもつ。九陶V期（1800～1810年代）。33-4は在地系磁器の丸皿である。全体的に灰色がかった色調で、京焼系磁器の可能性もある。内面に肥前磁器を模倣した染付で半菊唐草文、見込みに五弁花、高台内に渦文を描くが、肥前の意匠ではない。19世紀代前半。なお、掲載した遺物以外に瓦が出土している。

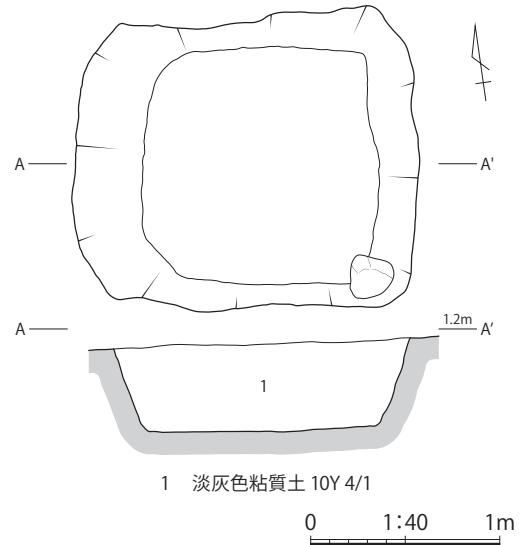


第33図 SK12出土遺物

土坑 SK14（第34図）

調査区の南側で検出した土坑である。検出面は標高 1.10m で、平面形は隅丸方形を呈する。規模は上縁長軸 1.80m、短軸 1.50m、深さ 45cm を測る。

土坑埋土は淡灰色粘質土の単層が堆積するが、コンクリートブロックや電線などを含むことから、攪乱層と考えられる。SK14 は近代以降の廃棄土坑か、あるいは電柱の控え部分（アンカー）を検出した可能性がある。SK14 から遺物は出土していない。



第34図 SK14 平面図・断面図

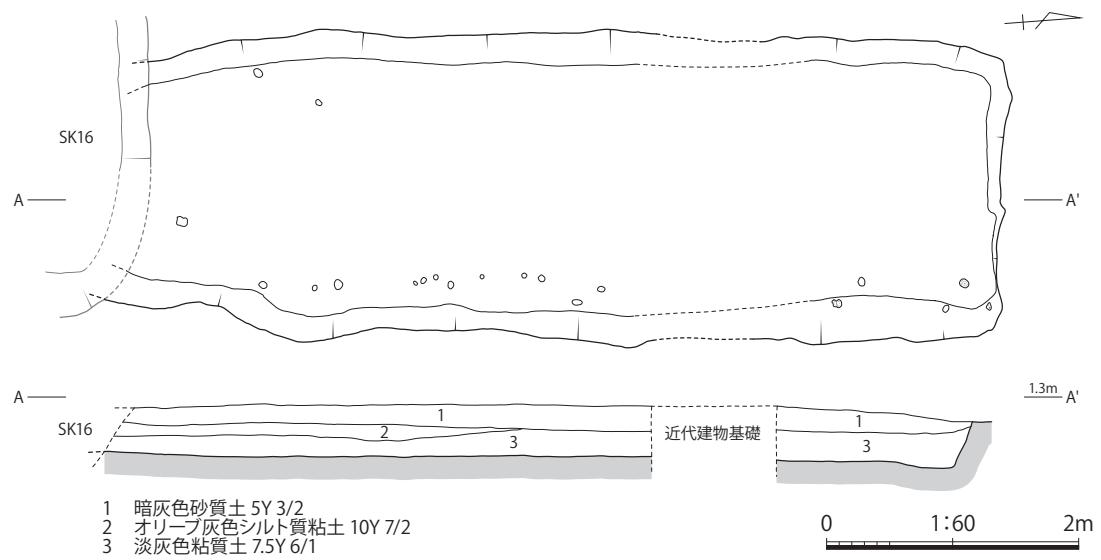
土坑 SK15（第35図）

調査区の南側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 1.20m で、平面形は長方形を呈する。規模は上縁長軸 7.40m、短軸 2.40m、深さ 40cm を測るが、一部に近代建物基礎による攪乱を受けている。

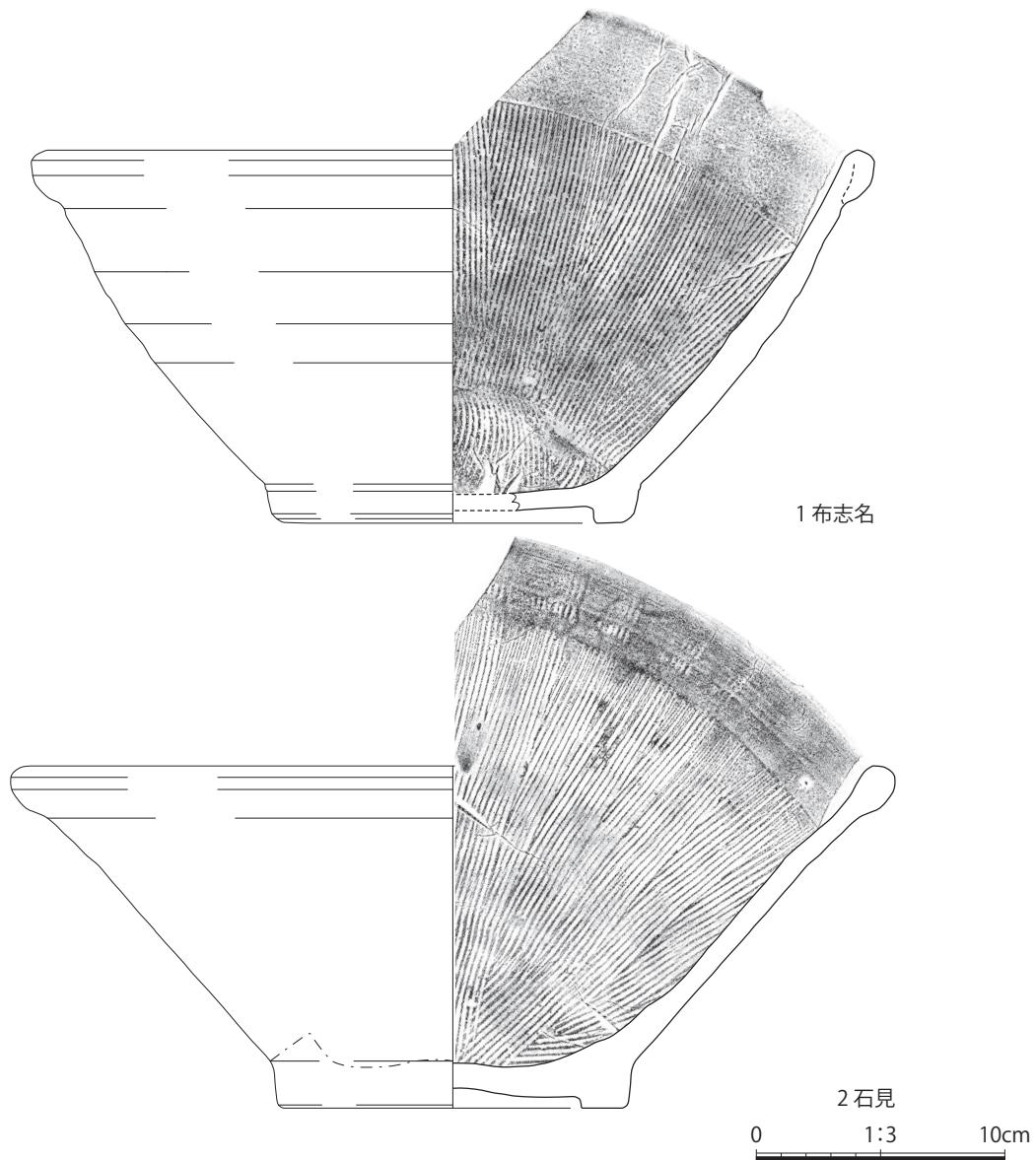
土坑埋土は 3 層に分層でき、最下層の淡灰色粘質土から陶磁器が出土した。

SK15 出土遺物（第36・37図）

ここでは SK15 の埋土から出土した遺物を掲載する。36-1・2 と 37-1 は国産陶器である。36-1 は在地系陶器（布志名焼）の擂鉢である。赤褐色の素地で内外面に鉄釉を施し、畳付無釉。高台外側端部を薄く面取りする。胴部はやや丸味をもって上方へ立ち上がり、スリ目は幅広で 20 条を 1 単位として上端を揃える。口縁端部を折り返して玉縁状におさめる。19 世紀代前半。36-2 は在地系陶器（石



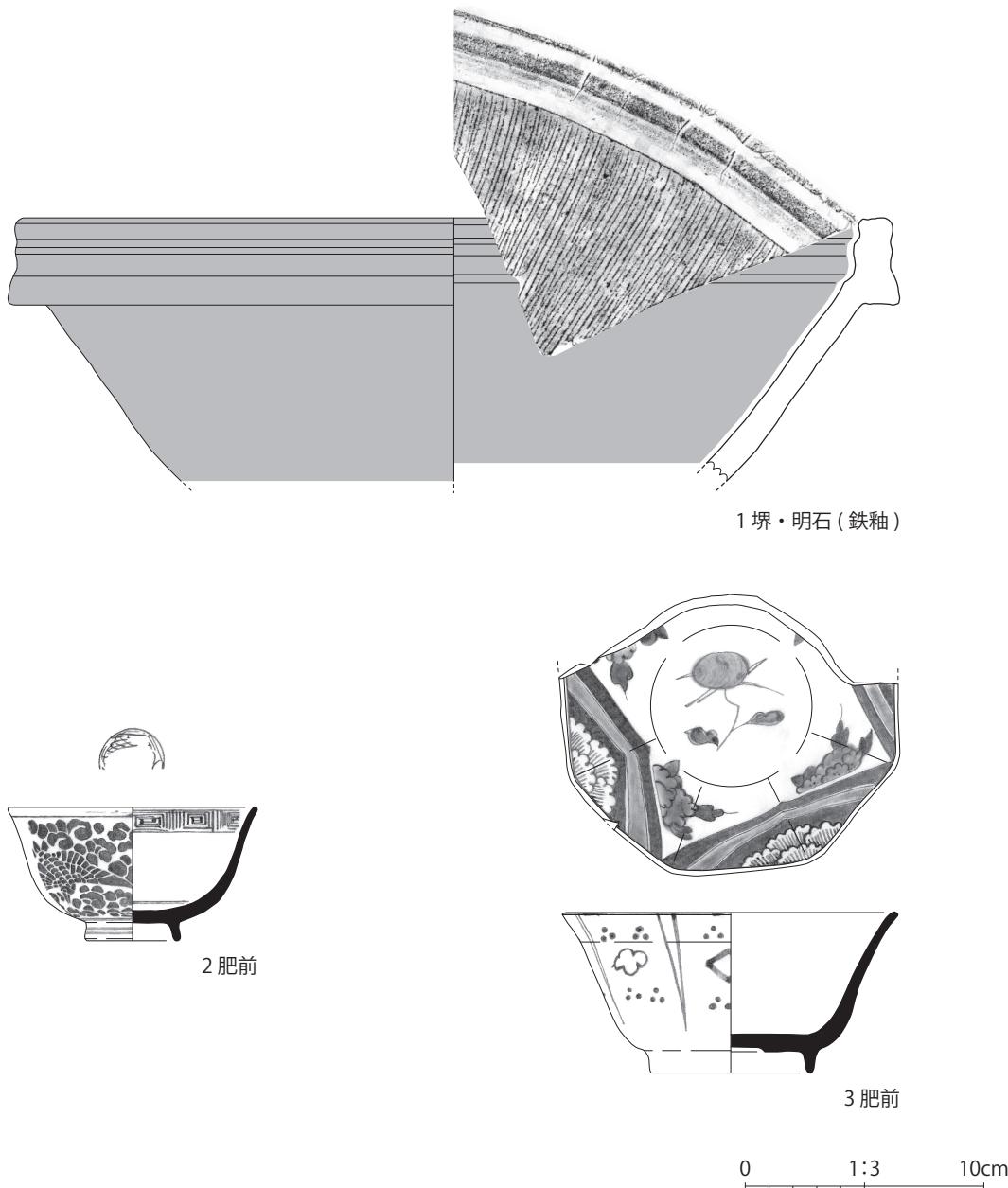
第35図 SK15 平面図・断面図



第36図 SK15 出土遺物 (1)

見焼) の擂鉢である。黄土色の素地で内外面に褐色の来待釉を施し、高台は露胎。高台外側端部を面取りする。胴部は上方へ直線的に延び、口縁端部を丸くおさめる。スリ目は15条を1単位として口縁端部まで搔き上げた後、スリ目上端をナデ消して口縁部下方で揃える。19世紀代前半。37-1は堺・明石焼の擂鉢である。赤褐色の素地で内外面に鉄釉を施す。スリ目は高密度で上端を揃え、口縁部下方の屈曲部でナデ消す。口縁帯に2条の凹線をもつ。19世紀代中頃。

37-2・3は国産磁器である。37-2は肥前磁器の端反碗である。コバルトで口縁部内面に雷文帯、胴部外面に鳥・雲文、見込みに簡略した環状の松竹梅文を描く。19世紀代後半(明治以降)。37-3は肥前磁器の八角鉢である。口縁部内面に花重ね・三重三角文、胴部外面に区画・幾何学文、見込みに花卉文を描く。九陶V期(1820～1860年代)。なお、掲載した遺物以外に瀬戸美濃磁器・京信系陶器が出土している。



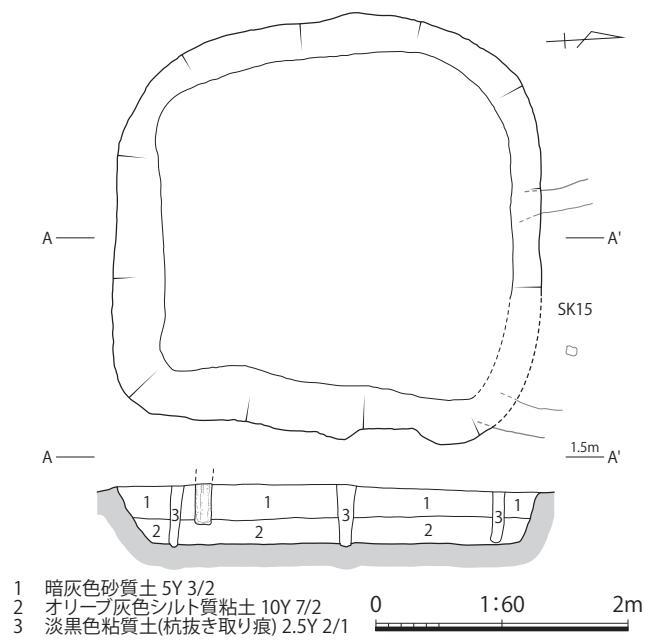
第37図 SK15出土遺物(2)

土坑 SK16 (第38図)

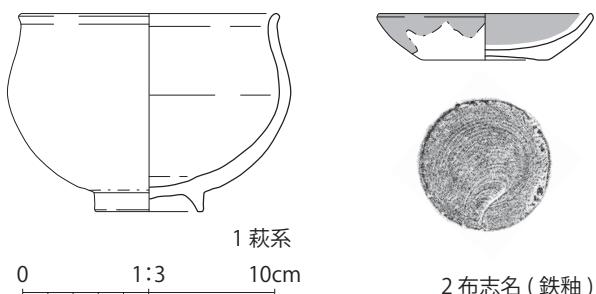
調査区の南側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 1.24m で、平面形は隅丸方形を呈する。規模は上縁長軸 3.40m、短軸 3.30m、深さ 50cm を測る。土坑埋土は 2 層に分層でき、下層のオリーブ灰色シルト質粘土から陶磁器が出土した。

SK16 出土遺物 (第39図)

ここでは SK16 の埋土から出土した遺物を掲載する。39-1・2 は国産陶器である。39-1 は萩系陶器の碗である。壺形碗で、内外面に薄い青灰釉を施し、釉薬の表面には全体的に貫入が入る。高台は露胎。19 世紀代前半。39-2 は在地系陶器（布志名焼）の灯明皿である。内面から口縁部外面上方にかけて鉄釉を施し、底部無釉。底部外面に糸切り痕をもつ。19 世紀代前半。なお、掲載した遺物以外に肥前磁器・京信系陶器・土師器皿が出土している。



第38図 SK16 平面図・断面図



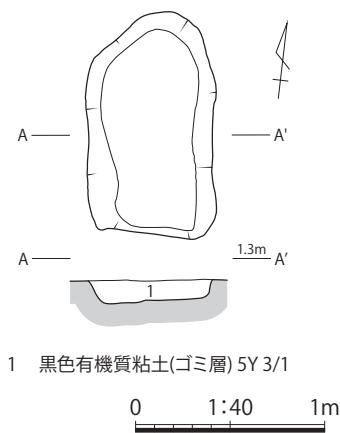
第39図 SK16 出土遺物

土坑 SK17 (第40図)

調査区の南東角で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 1.20m で、平面形は橢円形を呈する。規模は上縁長軸が 1.20m、短軸が 65cm、深さ 14cm を測る。土坑埋土は木片を多く含む黒色有機質粘土の単層で、埋土から陶磁器が出土した。

SK17 出土遺物 (第41図)

ここでは SK17 の埋土から出土した遺物を掲載する。41-1・2 は国産陶磁器である。41-1 は在地系陶器（布志名焼）の脚付壺である。内外面に薄い黄釉を施し、見込みに黒呉須で 3 箇所に大小の宝珠文を描く。19 世紀代後半。41-2 は肥前磁器の平碗である。型紙摺りで口縁部内面に瓔珞文、胴部外面に鶴・菊花文を施す。19 世紀代後半（明治以降）。なお、掲載した遺物以外に肥前磁器・在地系陶器が出土している。



第40図 SK17 平面図・断面図



第41図 SK17 出土遺物

来待石製井戸 SE01（第42図）

調査区の南西側で検出した来待石製井戸である。検出面は標高1.10mで、井戸の掘り方の平面形は方形を呈する。規模は上縁長軸2.30m、短軸1.60m、深さ20cmを測る。

井戸側上部は近現代の搅乱によって消失していたが、直径74cm、高さ40cmを測る来待石製の井筒を1段検出した。

井戸内の埋土は4層に分層でき、最下層の暗灰色粘質土から陶磁器が出土した。

SE01出土遺物（第43図）

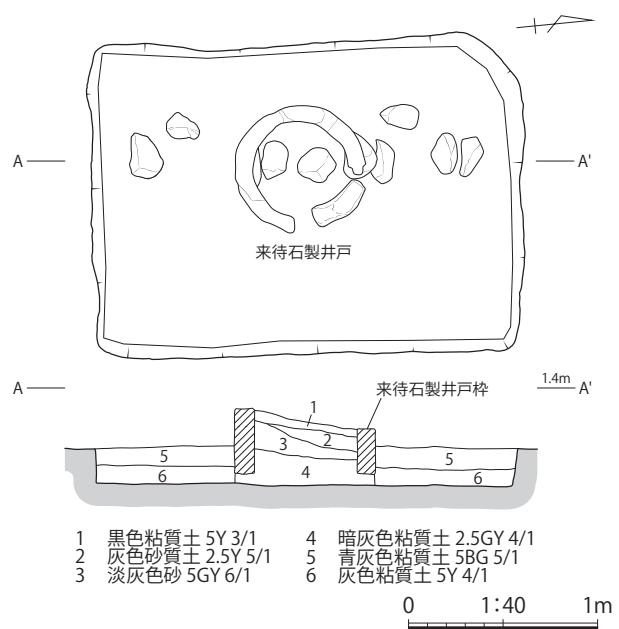
ここではSE01の井戸内から出土した遺物を掲載する。43-1・2は国産陶器である。43-1は在地系陶器（石見焼）の灯明皿である。内面から口縁部外面上方にかけて透明釉を施し、底部無釉。19世紀代前半。43-2は須佐擂鉢で、口縁部のみ残存する。口縁部上端に面をもち、口縁端部を外側に向かって折り返して丸くおさめる。スリ目単位は12条を1単位とする。19世紀代前半のもので、須佐擂鉢佐伯分類II群B類に該当する。

木枠井戸 SE02（第44・45図）

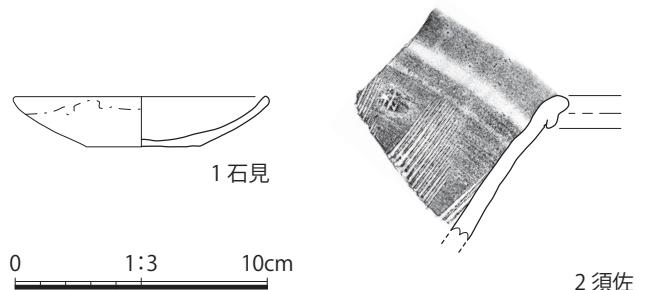
調査区の北東側で検出した木枠井戸である。SE02は、第1遺構面から第2遺構面までの掘り下げ途中の段階に検出した遺構だが、出土遺物の年代から第1遺構面に伴う遺構として判断したため、ここで取り扱う。

検出面は標高0.70mで、井戸の掘り方の平面形は円形を呈する。規模は直径1.60m、深さ60cm以上を測る。

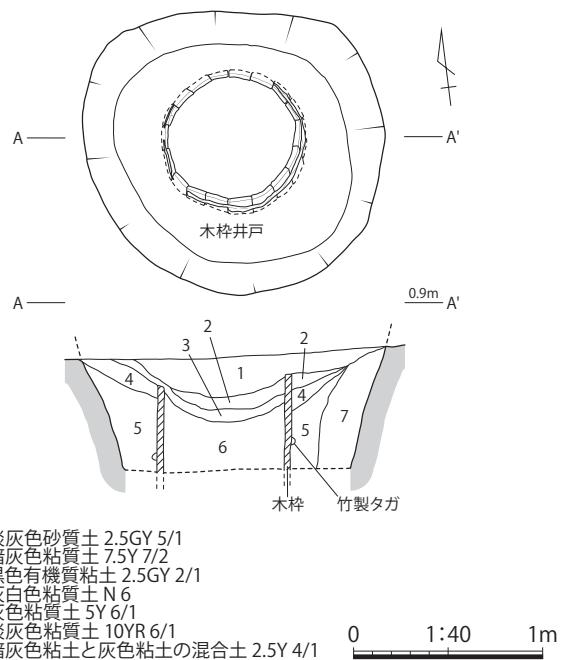
井戸側となる木枠の上部は近現代の搅乱によって消失していたが、直径72cm、高さ50cm以上を測る円筒状に埋設された木枠を検出した。木枠に使用する板材は、長さ50cm以上、



第42図 SE01 平面図・断面図



第43図 SE01 出土遺物



第44図 SE02 平面図・断面図

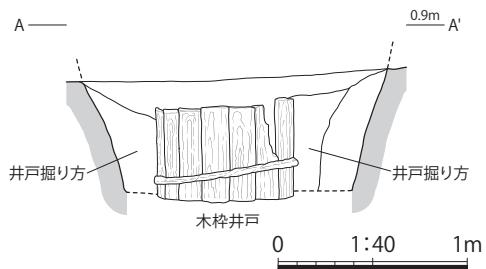
幅10～12cm、厚さ2cmの木板19枚を目釘で輪状に繋ぎ合わせ、幅3cmの竹製のタガで木枠の外周を固定している。

井戸内の埋土は3層に分層でき、井戸の掘り方と井戸内の埋土から陶磁器が出土した。掘り方から出土した遺物はSE02を構築した段階の時期を示し、井戸内の埋土から出土した遺物はSE02が廃絶した段階の時期を示すものと考えられる。

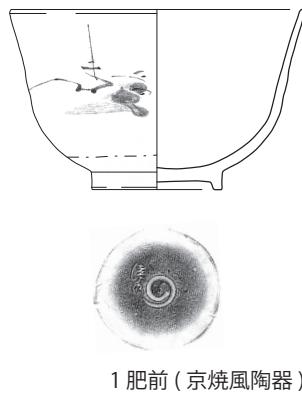
SE02出土遺物（第46図）

ここではSE02の掘り方から出土した遺物を掲載する。46-1・2は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。46-1は京焼風陶器の端反碗である。内外面に透明釉を施し、高台は露胎。胴部外面に山水文を描き、高台内に「清水」の押印をもつ。九陶Ⅲ期（1650～1690年代）。46-2は刷毛目碗である。外面に白化粧土を掛けて刷毛目塗りを施す。畳付無釉。九陶Ⅲ期（1650～1690年代）。

46-3は銭貨の寛永通寶である。初鋳年が1668年以降の新寛永で、背文に「文」をもつ文錢である。なお、掲載した遺物以外に井戸内の埋土から肥前磁器が出土している。



第45図 SE02立面図



第46図 SE02出土遺物

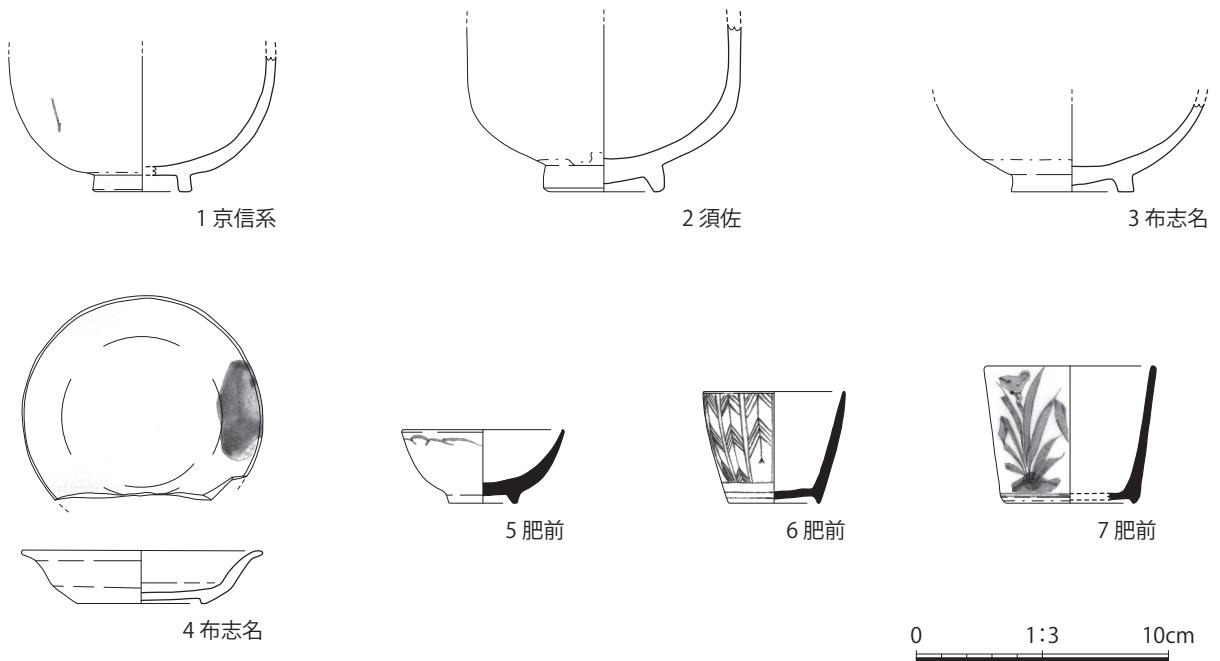
第1遺構面遺構外出土遺物（第47・48図）

ここで掲載する遺物は、第1遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

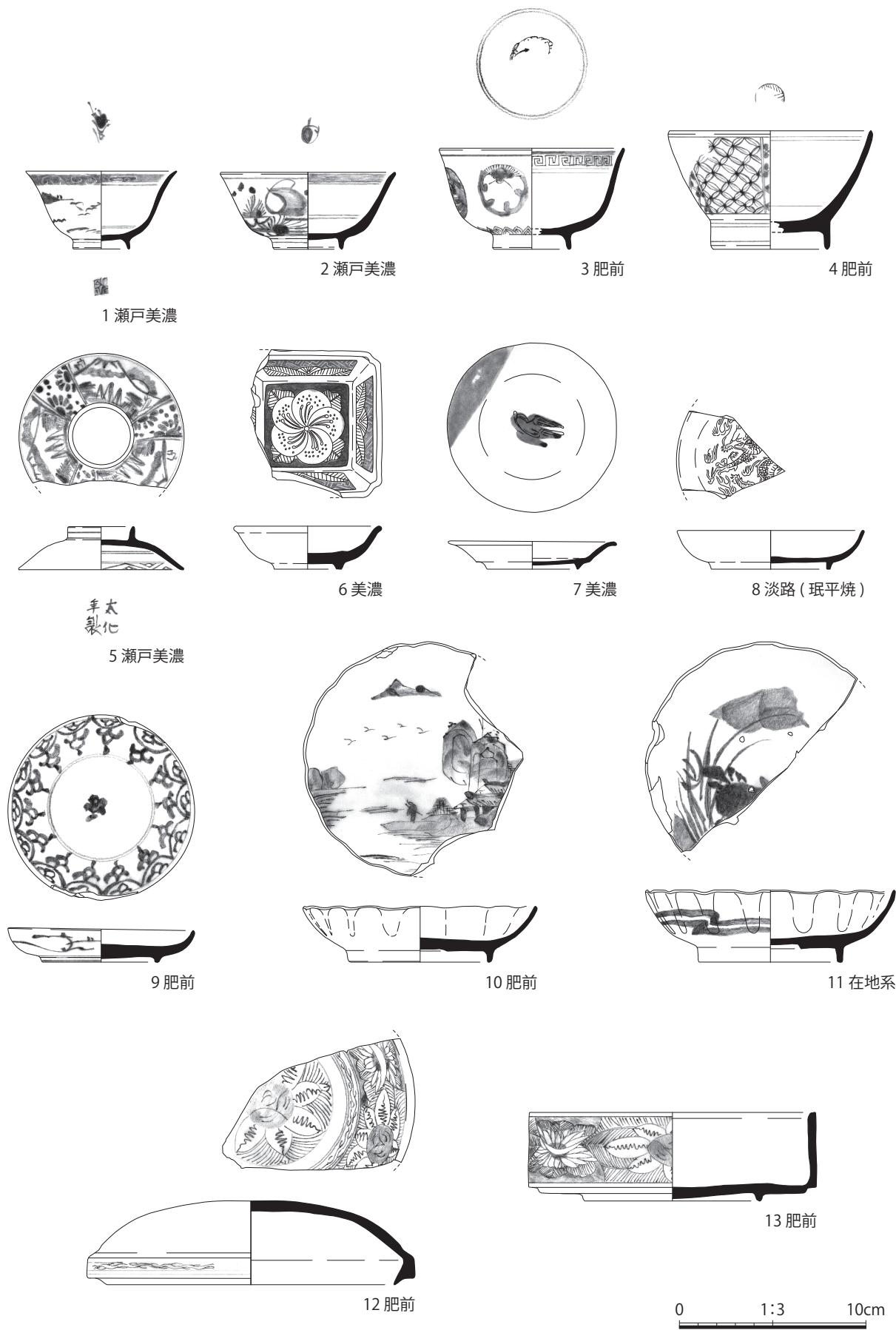
47-1～4は国産陶器である。47-1は京信系陶器の半球碗である。内外面に透明釉を施し、胴部外面に黒呉須で注連縄文を描く。高台は露胎。18世紀代前半。47-2は須佐陶器の腰張碗である。内外面に薄い緑灰釉を施す。高台は露胎。19世紀代前半。47-3は在地系陶器（布志名焼）の碗である。腰張碗のいわゆる「ぼてぼて茶碗」で、内外面に青地釉を施し、胴部下方から高台は露胎。19世紀代前半。47-4は在地系陶器（布志名焼）の丸皿である。内外面に黄釉を施し、内面片側のみに緑釉の重ね掛けをする。口縁端部を外側へ折り曲げて、端反状におさめる。碁笥底状の高台で、畳付無釉。19世紀代前半。

47-5～7・48-1～13は国産磁器である。47-5は肥前磁器の小壺である。口縁部外面に呉須で雲

文を描く。九陶V期（1820～1860年代）。47-6・7は肥前磁器の桶形の猪口である。47-6は胴部外面に矢羽根文を描く。九陶IV期（1750～1780年代）。47-7は胴部外面に水仙文を描く。九陶IV期（1700～1750年代）。48-1・2は瀬戸美濃磁器の端反碗である。48-1は口縁部内面に雲文、胴部外面に風景文、見込みに花文を描く。19世紀代前半。48-2は胴部外面に草花文、見込みに花文を描く。断面に焼き継ぎ痕をもつ。19世紀代前半。48-3・4は肥前磁器の碗である。48-3は端反碗で、口縁部内面に雷文帯、胴部外面に丸・蓮弁文、見込みに簡略した環状の松竹梅文を描く。九陶V期（1850～1860年代）。48-4は広東碗で、胴部外面に四方櫛・七宝文、見込みに簡略した環状の松竹梅文を描く。九陶V期（1810～1840年代）。48-5は瀬戸美濃磁器の碗蓋である。外面に富士山・菊花文、口縁部内面に櫻文を描く。見込みに圈線と「太化年製」の銘款をもつ。19世紀代前半。48-6・7は美濃磁器の皿である。48-6は方形皿で、口縁部内面に紗綾形文の陽刻、見込みに梅花文の陽刻を施す。19世紀代後半（明治以降）。48-7は丸皿で、内面片側のみに鉄釉を掛け流し、見込みに鳥文を描く。19世紀代前半。48-8は関西系磁器（珉平焼）の丸皿である。内外面に淡い黄釉を施し、見込みに型押しによる龍文の陰刻を施す。19世紀代後半（明治以降）。48-9は肥前磁器の丸皿である。口縁部内面に輪宝文、体部外面に如意頭崩れの唐草文を描き、見込みにコンニャク印判による五弁花を施す。畳付無釉。九陶V期（1810～1820年代）。48-10は肥前磁器の皿である。型押成形による菊花皿で、蛇ノ目凹形高台である。見込みに舟人物・遠山文を描く。九陶V期（1780～1820年代）。48-11は在地系磁器の皿である。肥前磁器を模倣した型押成形による菊花皿で、蛇ノ目凹形高台である。見込みにコバルトで草花文を描き、ハリ支えの痕跡をもつ。19世紀後半。48-12・13は肥前磁器の蓋付鉢である。48-12が丸形の蓋、48-13が半筒形の身で、これらはセット関係のものである。蓋の外面と身の胴部外面に線描きのみで文様表現をする、いわゆる素描きで花卉文を描く。蓋と身の断面に焼き継ぎ痕をもつ。九陶V期（1820～1860年代）。



第47図 第1遺構面遺構外出土遺物（1）



第48図 第1遺構面遺構外出土遺物 (2)

第3項 第2遺構面の概要(第49図)

第2遺構面は、標高0.50～0.60mで検出した遺構面である。遺構は、礎石建物跡1棟(SB01)、溝5条(SD01～05)、通路跡1条(SF01)、土坑8基(SK18～25)を検出した。

第2遺構面の時期に該当する松江城下町絵図に京極期絵図(第8図)があり、1区が比定する地点には北側に町屋、南側に武家地が描かれている。町屋と武家地は、東西方向の界線で南北に区画されており、第2遺構面で検出した東西方向に延びる屋敷境溝SD01がこの境界線にあたるものと考えている。京極期絵図を根拠として、第2遺構面で検出した遺構配置を考えた場合、検出したSD01を境に北側は町屋の敷地内、南側は武家地の敷地内を調査したものと捉えている。

第2遺構面の基盤となる土層は、このSD01を境に北側と南側で土層堆積が異なる様相を示している。SD01から北側の町屋の範囲内では黒灰色粘土、南側の武家地の範囲内では黄灰色シルト質軟砂岩を基盤層とする土層堆積を確認し、いずれも嵩上げ造成による整地層である。層厚は10cm前後を測り、最上位の整地面で遺構を検出したことから、これを第2遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から17世紀代前半を想定している。

第4項 第2遺構面の遺構と遺物

礎石建物跡SB01(第50・51図)

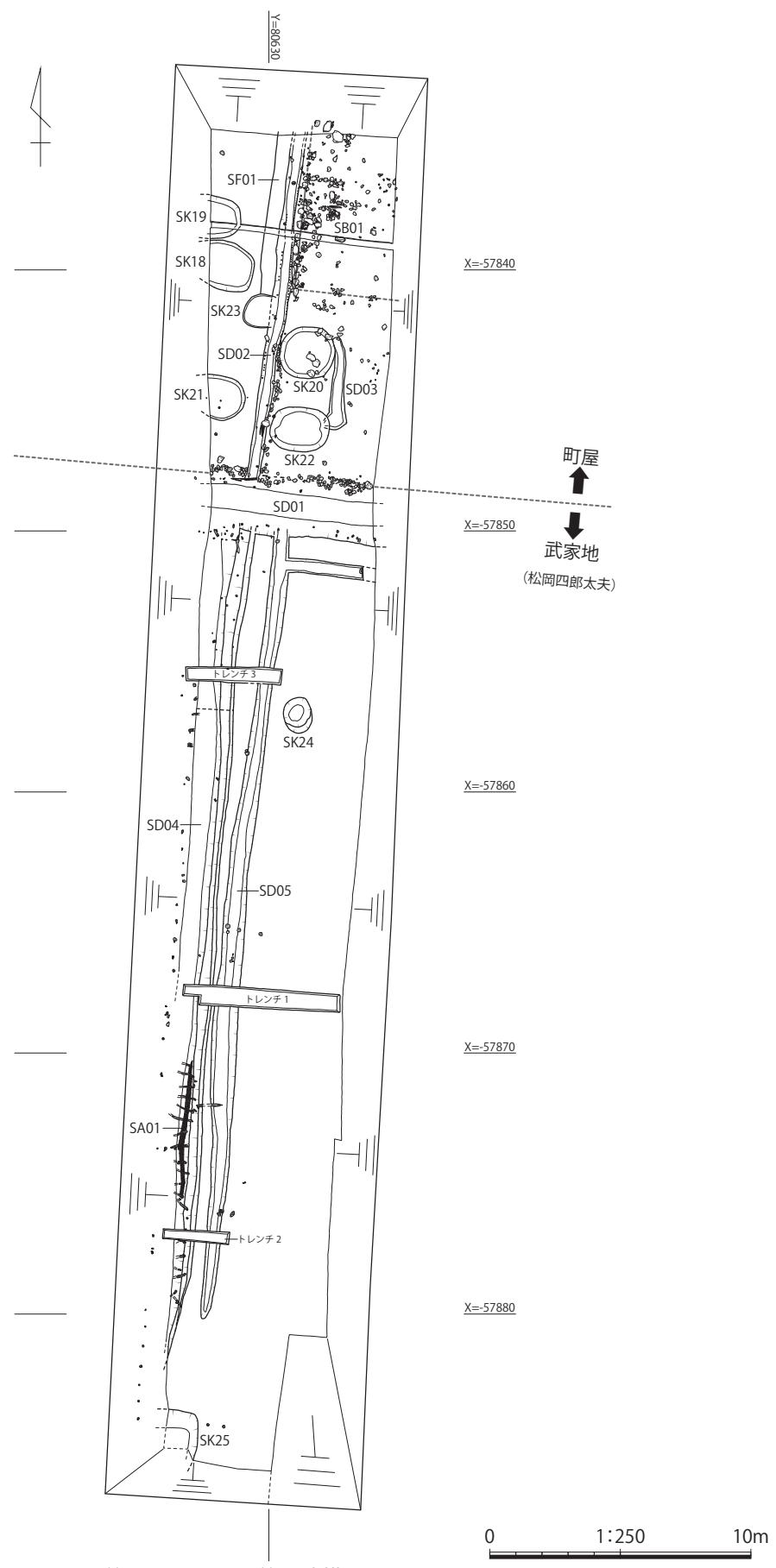
調査区の北東角で検出した礎石建物跡である。検出面は標高0.60mで、平面形は南北方向の長方形を呈するものと考えられる。建物の主軸方位はN-4°-Eで、規模は南北桁行6.00m以上、東西梁行4.50m以上を測る。柱間寸法は現地測量での1.00m(3尺3寸)を基準とする。建物の表口は調査区外となるが、北田川南岸の東西方向の道路に面した北側にあたるものと想定している。

SB01を構成する礎石の大きさは長軸30cm前後、厚さ15～25cmを測り、石材は大海崎石⁽²⁴⁾や川原石を混在して使用する。南北桁行の礎石列(第50図A-A'間)は、SB01の西側に隣接するSD02の溝肩東側に並列する形で顕著に検出したが、それ以外では疎らに検出している。礎石には根石を伴うものと伴わないものがあり、東西梁行の礎石列(第50図B-B'間SS07・08)は根石のみを検出した。

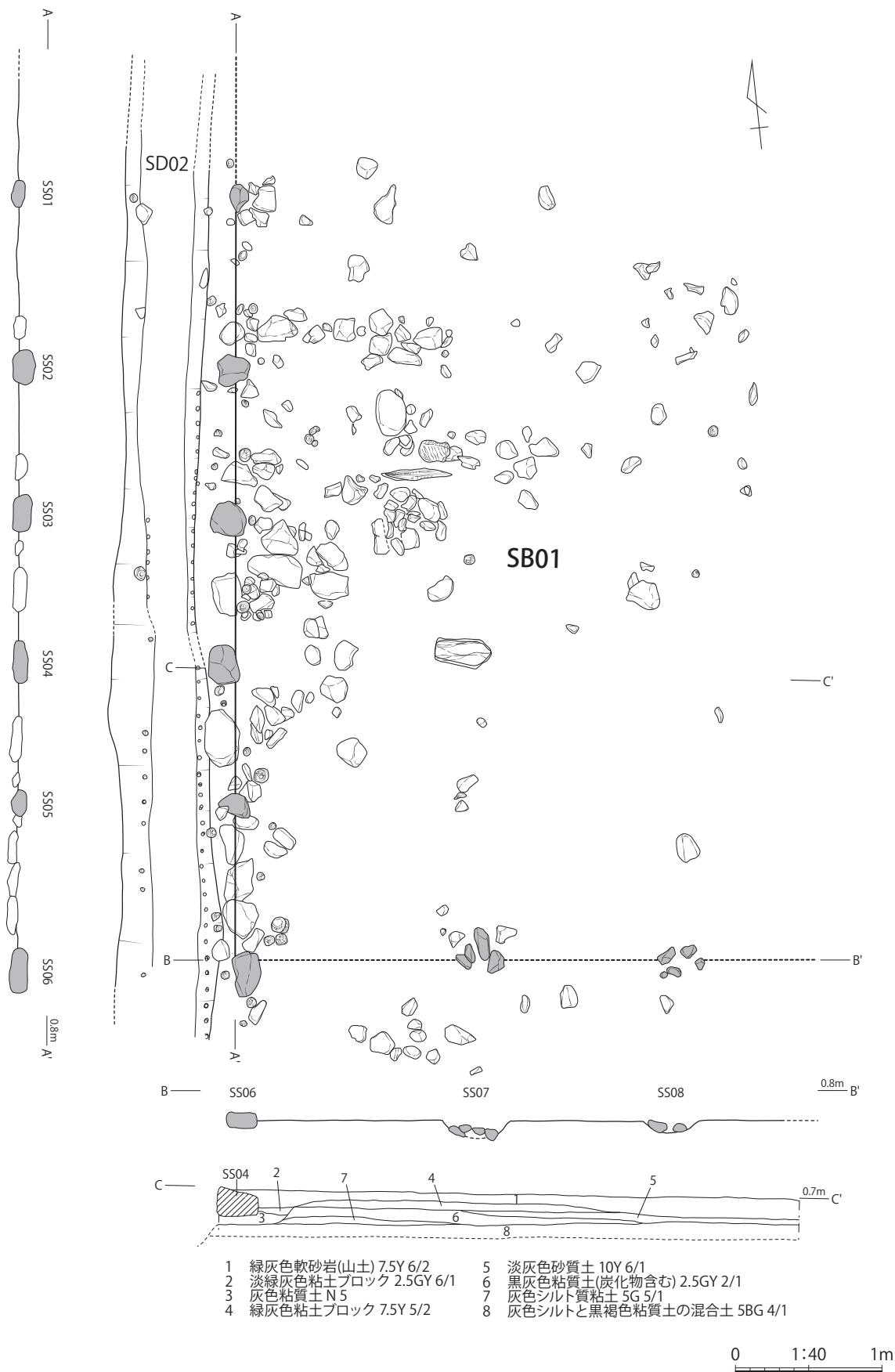
SB01の建物範囲内の造成土は、東西畦土層断面(第50図C-C'間)で図示したように、上層から緑灰色軟砂岩・緑灰色粘土ブロック・淡灰色砂質土・黒灰色粘質土・灰色シルト質粘土の堆積を確認し、これらは建物範囲内のみで確認した土層である。下層に堆積する砂質土と粘質土は硬く締まった土質で、三和土(敲き土)として捉えることもでき、礎石を疎らに検出した建物範囲内の南側は土間空間となっていた可能性が考えられる。

SB01に付属する遺構として、SB01の西側に隣接する位置で区画境溝SD02と通路SF01を検出した(第51図)。SD02は、南北方向の短冊状に配置された町屋の敷地と敷地とを区画するための区画境と考えられ、同時に水路として排水機能をもたせた素掘り溝である。SF01は、機能面に礫敷をもつ通路跡で、SB01がある敷地からSD02を挟んで西側の敷地内に伴う遺構に位置付けられる。

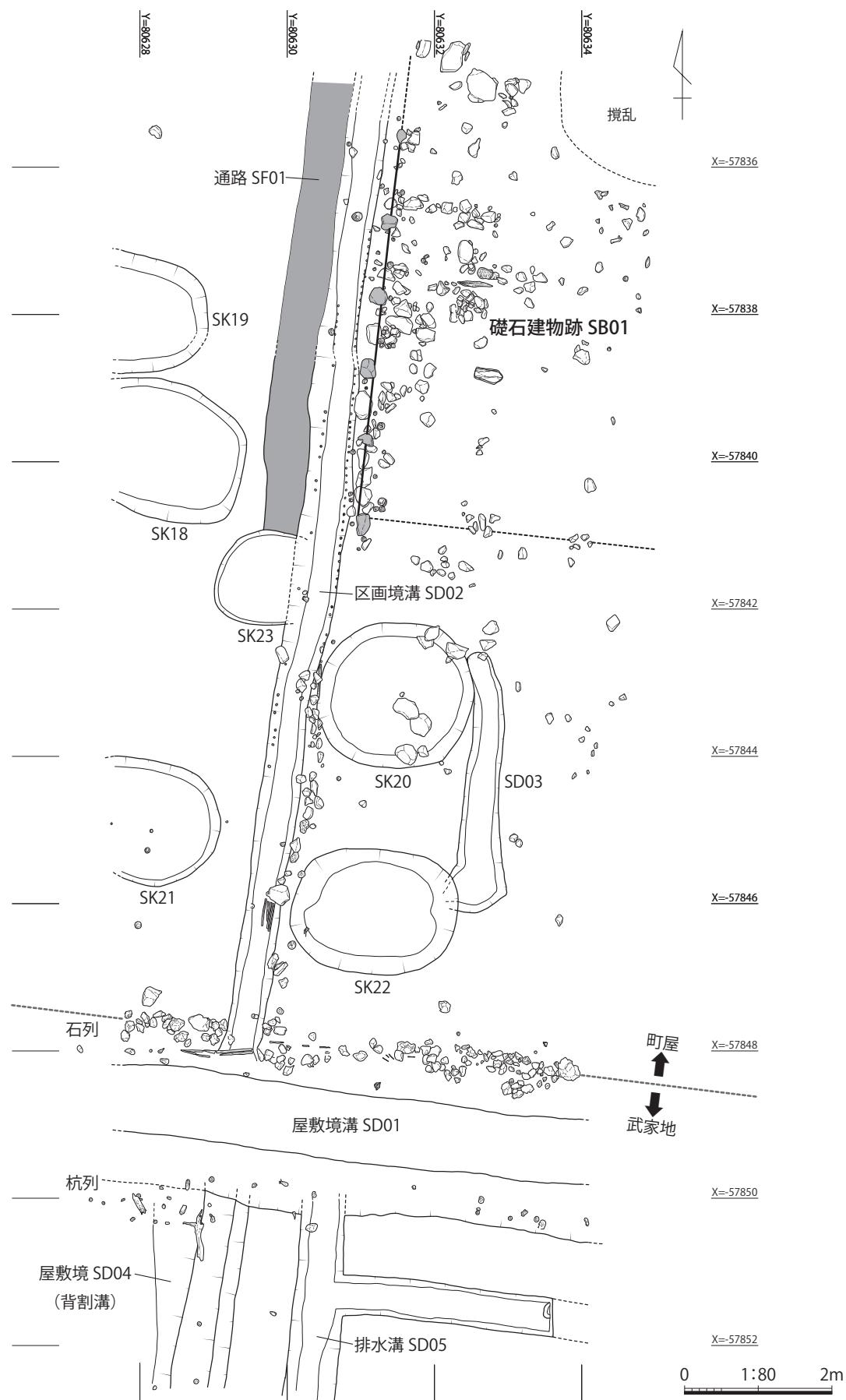
SB01は京極期絵図を根拠とした場合、町屋が配置されていた場所に該当することから、町屋の敷地内に構築された礎石建物の南西側の一部を検出したものと考えている。



第49図 1区 第2遺構面平面図



第50図 SB01 平面図・断面図



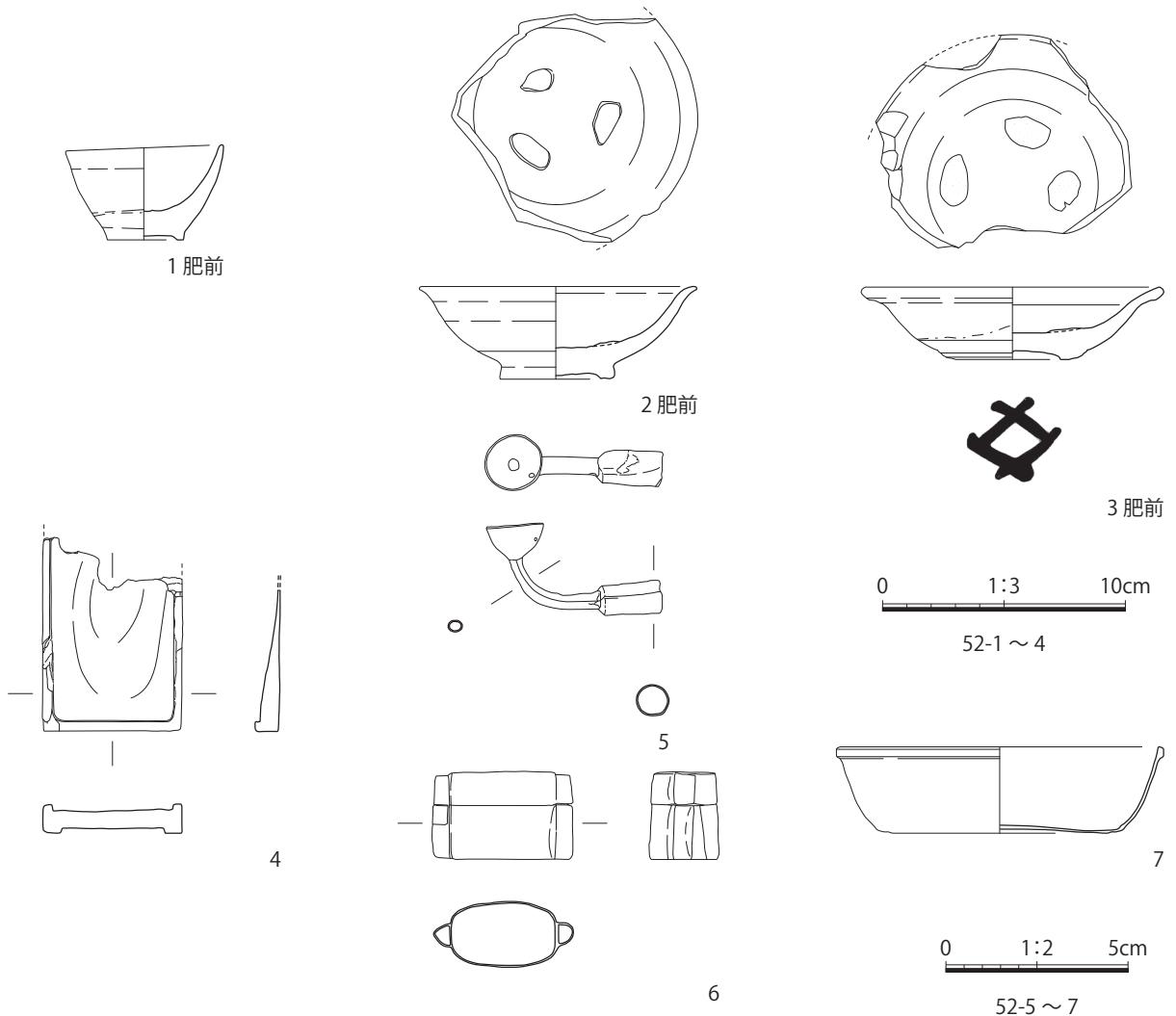
第51図 SB01周辺遺構配置図

SB01 出土遺物（第52図）

ここでは SB01 検出面の建物範囲内から出土した遺物を掲載する。52-1～3 は国産陶器である。52-1 は肥前陶器の小杯である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）。52-2・3 は肥前陶器の皿である。52-2 は端反皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに3箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。体部下半は被熱により黒く焦げている。九陶Ⅰ-2期（1594～1610年代）。52-3 は折縁皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに3箇所の砂目痕が残る。体部下方から高台は露胎。高台内に井桁状の墨書をもつ。九陶Ⅰ-2期（1594～1610年代）。

52-4 は石製品である。暗灰色を呈する長方硯で、硯上方の墨池部分は欠損している。丘（陸）部分は厚さ 1mm と磨り減りが顕著で、硯両側の側面に墨が付着している。

52-5～7 は金属製品である。52-5 は真鍮製の煙管の雁首である。火皿はやや大きく、火皿の斜め後方に火皿冠の穿孔をもつ。肩部を筒状におさめる。52-6 は真鍮製の矢立である。平面形が橢円形を呈する印籠形の矢立てで、蓋と身に分かれる。蓋と身の両端に紐通し用の耳が付属し、外面全体に金メッキが施されている。52-7 は真鍮製の丸形皿である。直径 8.7cm、厚さ 1mm を測り、口縁端部をわずかに丸くおさめる。



第52図 SB01 出土遺物

屋敷境溝 SD01（第 53 図）

調査区の北側で検出した東西方向に一直線に延びる素掘り溝である。検出面は溝上端で標高 0.50 ~ 0.60m で、断面形は浅い U 字状を呈する。規模は東西長さ 6.60m 以上、南北幅 2.20m、深さ 40 cm を測り、主軸方位は東西で E – 4° – S にとる。溝底部での標高は西端が標高 0.18m、東端が標高 0.12 m で、排水方向は SD01 の西側に近接する SD04（背割溝）ではなく、東側の外堀（米子川）方向に向かつて流れていたものと想定している。

溝肩部の構築物は、溝の北側肩部とその対面となる南側肩部で異なる構造をもち、北側肩部では石列、南側肩部では杭列を検出した。北側肩部で検出した石列は、町屋の敷地内の南端に位置し、石材は長軸 20 ~ 30cm、厚さ 5 ~ 10cm 前後の大海崎石や島石が混在している。⁽²⁵⁾ 石列は溝と並列して東西方向に一直線に延びる形で配置され、一部に被熱した痕跡をもつ石材が含まれることから、火災に遭っていた可能性が考えられる。南側肩部で検出した杭列は、武家地の敷地内の北端に位置し、直径 5 cm、長さ 30 ~ 40cm の木杭が 30 本程度打ち込まれていた。厳密な規則性は希薄だが、溝の南側肩部から北側へ 30cm 離れた位置に溝と並列して東西方向に延びる形で配置され、木杭の先端は面取り加工を施して先端を尖らせている。これらの状況から、町屋側と武家地側では溝肩部の構築物の違いがあるという点は指摘できるが、溝の管理・所有については共有していた可能性もあり判然としない。

溝埋土は灰白色粘土の単層が堆積し、土層断面で溝を掘り直した痕跡や溝底部に自然堆積層は確認されず、廃絶時には溝の上端部まで一気に埋め戻している状況であった。遺物は、SD01 の埋土から溝が埋まった段階に廃棄されたものと考えられる陶器・土師器皿・木製品・動物遺存体が出土した。

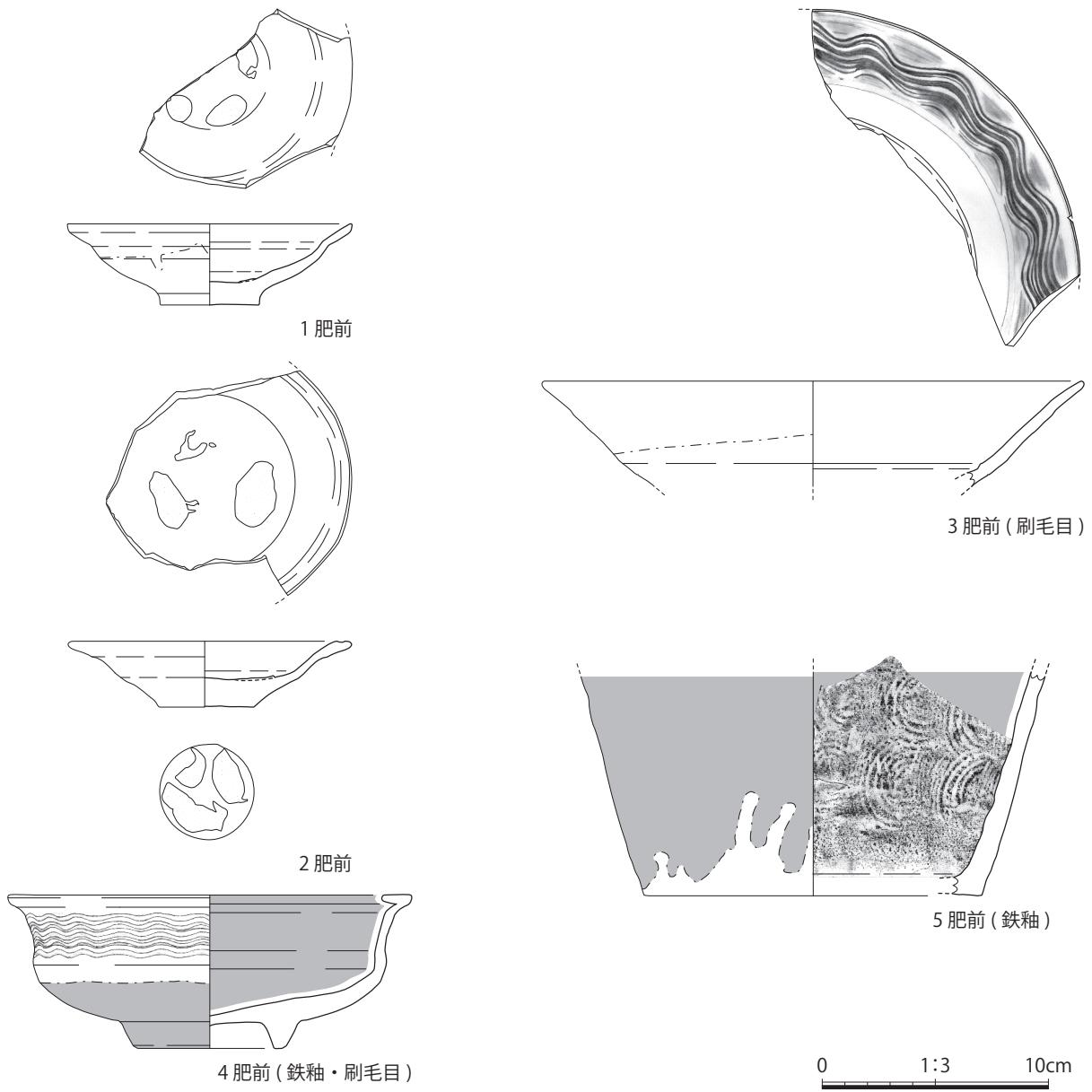
SD01 の性格は、SD02・04・05 と連結して町屋と武家地の敷地内の排水を集約する素掘り溝であり、町屋と武家地との境界を明確に画するための屋敷境溝として位置付けられる。



第 53 図 SD01 平面図・断面図

SD01 出土遺物（第 54 図）

ここでは SD01 の埋土から出土した遺物を掲載する。54-1～5 は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。54-1 は折縁皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに 3 箇所の砂目痕が残る。体部下方から高台は露胎。高台内の抉りが無く、底部に糸切り痕をもつ。九陶 II 期（1610～1650 年代）。54-2 は溝縁皿である。内外面に透明釉を施し、見込みに 3 箇所の砂目痕が残る。高台内の抉りが無く、底部に糸切りと砂目積み痕をもつ。九陶 II 期（1610～1650 年代）。54-3 はやや大振りの刷毛目皿である。内面から口縁部外面にかけて透明釉を施す。口縁部内面に白化粧土で刷毛目文を描く。体部下方は露胎。九陶 II 期（1610～1650 年代）。54-4 は火鉢である。浅筒形の火鉢で、胴部外面上半に緑釉、内面と胴部外面下半に鉄釉を施す。口縁端部を平坦にして内側に張り出し、直立した胴部外面に刷毛目文を描く。九陶 II 期（1630～1650 年代）の 17 世紀代中頃に近い時期。54-5 は甕で、底部のみ残存する。内外面に鉄釉を施し、内面に同心円状の当て具痕をもつ。17 世紀代前半。



第 54 図 SD01 出土遺物

区画境溝 SD02・通路跡 SF01（第 55 図）

調査区の北側で検出した区画境溝と通路跡で、調査時に隣り合う位置関係で遺構を検出したため、ここではまとめて取り扱う。

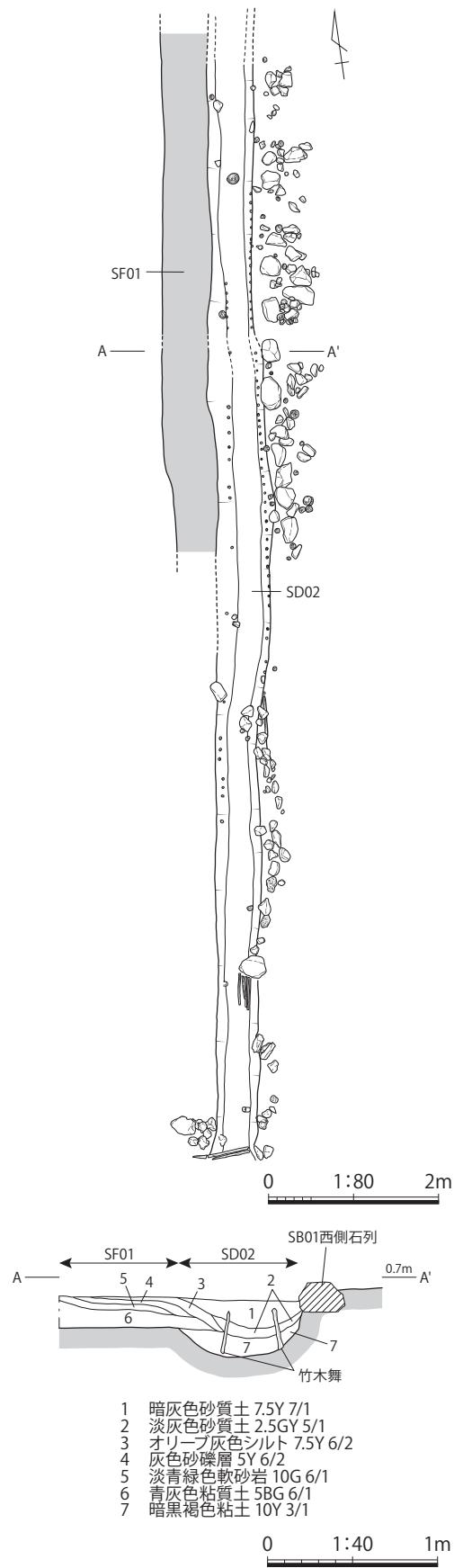
SD02 は、SB01 の西隣で検出した南北方向に一直線に延びる素掘り溝である。検出面は溝上端で標高 0.50～0.60m で、断面形は U 字状を呈する。規模は南北長さ 13.40m 以上、東西幅 50cm、深さ 20～40cm を測り、主軸方位は南北で N - 4° - E にとる。溝底部での標高は北端が標高 0.40m、南端が標高 0.25m で、排水方向は北側から南側へ向かい、溝の南端は SD01 に直交する形で連結する。溝埋土は 3 層に分層でき、溝内の両端には直径 1cm、長さ 20～30cm の竹木舞を伴う。遺物は、SD02 の埋土から溝が埋まった段階に廃棄されたものと考えられる陶磁器・土師器皿・瓦が出土した。SD02 の性格は、町屋の敷地内の排水を目的とした素掘り溝で、町屋の敷地の境界を明確に画するための敷地境溝として位置付けられる。

SF01 は、SD02 の西隣で検出した礫層と粘土層が版築状に堆積する南北方向の通路跡である。規模は南北長さ 6.00m 以上、東西幅 80cm を測る。礫層上面が通路の硬化面となるが、南側の SK23 付近で途切れた状態で検出している。SF01 の性格は、SD02 から西側の町屋の敷地内に伴う通路跡と考えている。SF01 から遺物は出土していない。

SD02 出土遺物（第 56 図）

ここでは SD02 の埋土から出土した遺物を掲載する。56-1 は中国磁器で、景德鎮系の青花鉢である。型押成形された芙蓉手の鉢で、口縁端部を端反形におさめる。16 世紀代末～17 世紀代初頭のもので、森分類青花碗 I2 群に該当する。

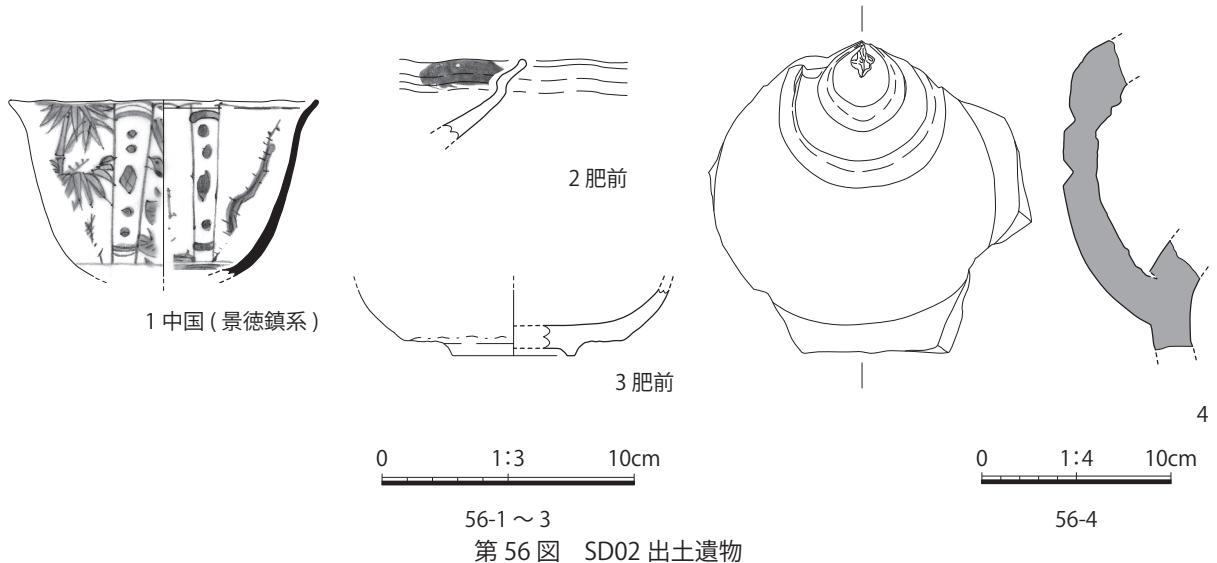
56-2・3 は国産陶器である。56-2 は肥前陶器の向付（四方皿）で、口縁部のみ残存する。内外面に透明釉を施し、口縁部内面に鉄絵で文様を描く。九陶



第 55 図 SD02・SF01 平面図・断面図

I -2期(1594～1610年代)。56-3は肥前陶器の丸皿で、底部のみ残存する。内外面に藁灰釉を施し、高台は露胎。見込みに目跡は無い。九陶 I -2期 (1594～1610年代)。

56-4は鬼瓦である。飾り瓦の一部で、宝珠部分のみ残存する。内面に布目と削りの工具痕をもち、外面に微量の雲母が付着している。



第56図 SD02出土遺物

溝 SD03 (第57図)

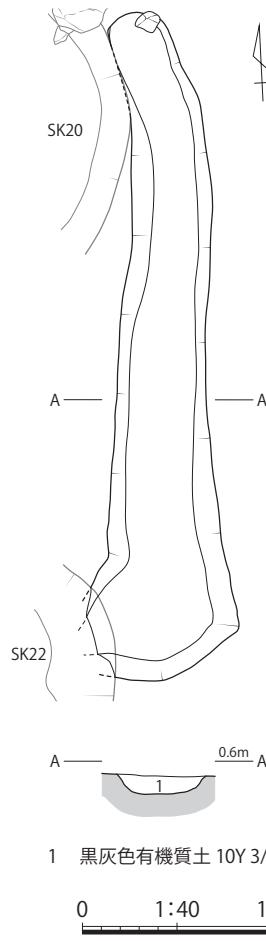
調査区の北側で検出した南北方向に延びる素掘り溝である。検出面は溝上端で標高 0.55m で、断面形は浅い U 字状を呈する。規模は南北長さ 3.50m、東西幅 40cm、深さ 10cm を測り、主軸方位は南北で N – 2° – E にとる。溝底部は標高 0.40 ~ 0.45m で、排水方向は北側から南側へ向かう。

溝埋土は黒灰色有機質土の単層が堆積する。SD03 の性格は、町屋の敷地内における排水用の溝と考えられるが、SD03 の付近では厳密に建物跡と確定できる遺構を検出していなかったため、建物に付属する雨落ち溝なのか、あるいは単独で機能していた溝のかは定かではない。SD03 から遺物は出土していない。

屋敷境溝 SD04・溝 SD05 (第58図)

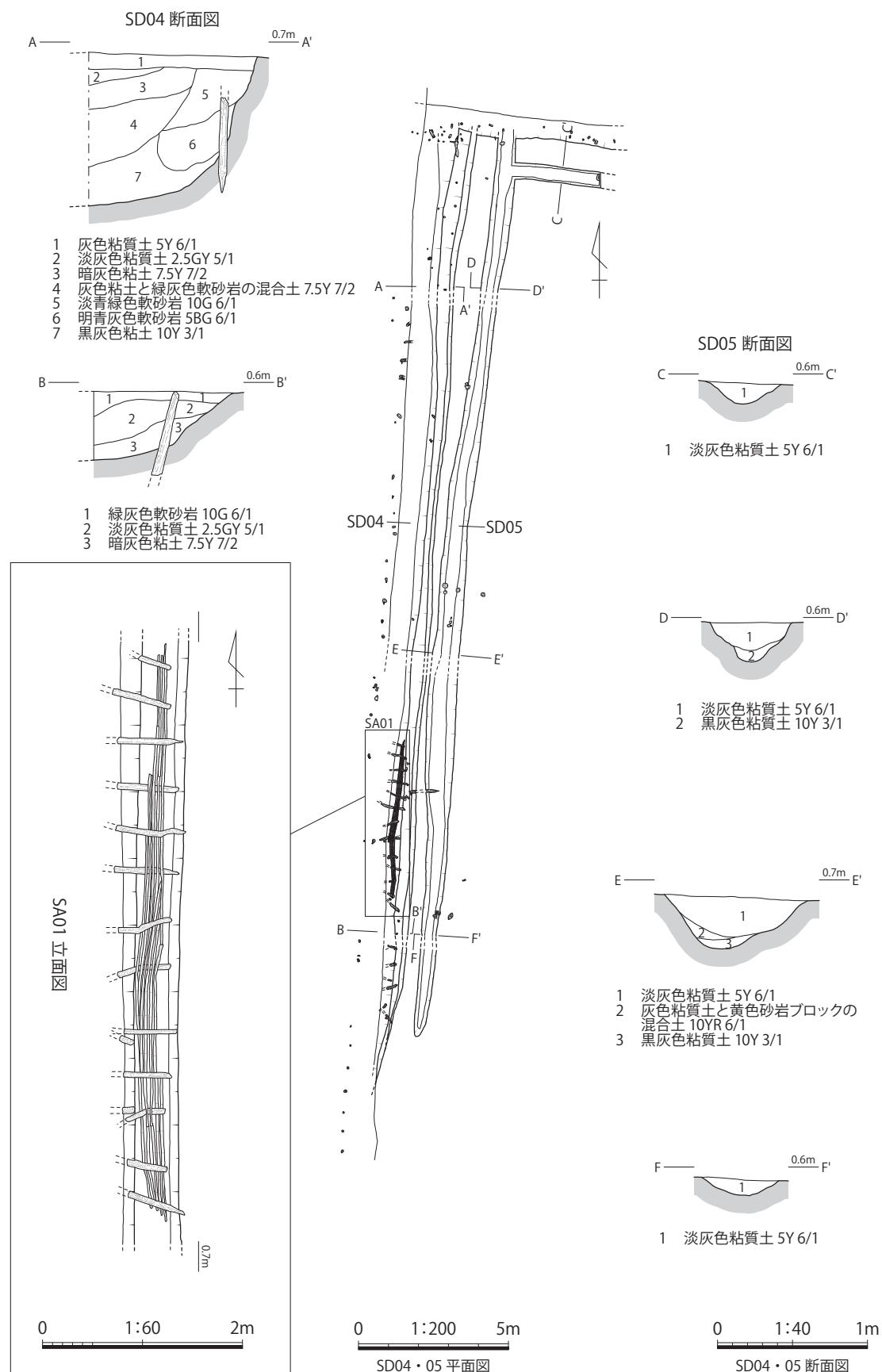
調査区の中央～南側で検出した屋敷境溝と屋敷地内の排水溝で、調査時に SD04 と SD05 は隣り合う位置関係で遺構を検出したため、ここではまとめて取り扱う。

SD04 は、調査区の中央～南側にかけて西壁に沿う形で検出した南北方向に一直線に延びる素掘り溝である。溝の南側および西側は調査区外となるため、全体形は確認できていない。検出面は溝上端で標高



1 黒灰色有機質土 10Y 3/1

0 1:40 1m



第58図 SD04・05 平面図・断面図、SA01 立面図

0.54～0.62mで、断面形は3分の1程度を検出し、U字状を呈するものと想定している。規模は南北長さ35.00m以上、東西幅2.00m以上、深さ80cm以上を測り、主軸方位は南北でN-4°-Eにとる。溝底部での標高は南端が標高0.05m、北端が標高-0.10mで、排水方向は南側から北側の外堀（北田川）へ向かい、溝の北端はSD01に直交する形で連結する。溝埋土は3～7層に分層でき、溝の埋め戻しの際に緑灰色～黄灰色を呈するブロック状の軟砂岩を使用していることが特徴的である。この軟砂岩は、いわゆる松江層軟砂岩と捉えており、SD04の埋土中およびSD01から南側に展開する武家地の範囲内でのみ堆積が確認できた土層である。

SD04の南側に位置する溝内の東側肩部では、柵SA01を検出した。SA01は一部の検出に留まつたが、溝の東側上端に沿う形で南北方向に直径5～8cm、長さ80cm以上を測る木杭が40～50cm間隔で打ち込まれ、杭と杭の間の横木には直径1～1.5cm、長さ1.5～2m前後を測る竹を噛ませることで柵が設けられていた。木杭の先端は、面取り加工を施して先端を尖らせている。このSA01を溝内に設置することで、SA01の背面にあたる東側の屋敷地の土砂（軟砂岩）がSD04の溝内に流出することを防ぐための土留め施設と考えられる。

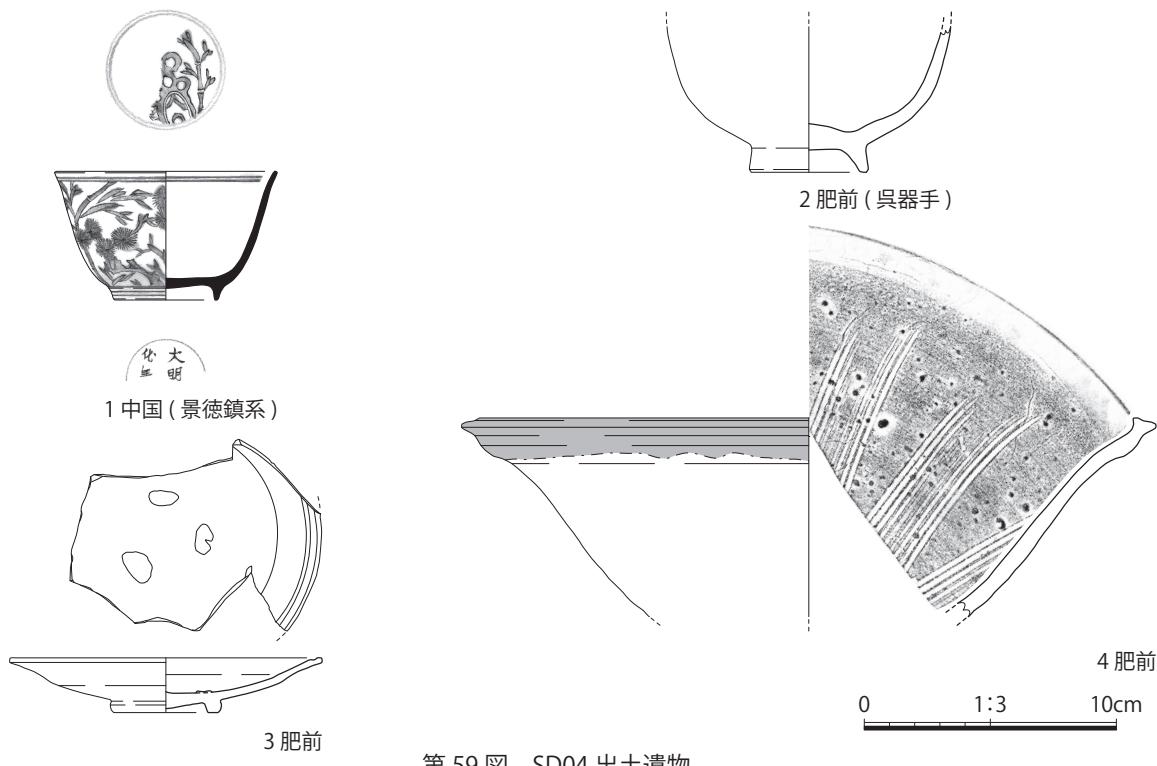
遺物は、SD04の埋土から溝が埋まった段階に廃棄されたものと考えられる陶磁器・土師器皿が出土した。SD04の性格は、武家地の敷地内の排水を目的とした素掘り溝と考えられる。また、SD04の検出位置は、当該期に比定される京極期絵図に描かれている東西の屋敷地のいずれも裏地にあたることから、屋敷地の境界となる背割溝として位置付けられる。

SD05は、SD04の東隣に並走する素掘り溝である。検出面は溝上端で標高0.55～0.60mで、溝は調査区南端付近で消失している。規模は南北長さ30.00m、東西幅70cm前後、深さ15～25cmを測り、主軸方位は南北でN-4°-Eにとる。SD05の北端ではT字状に分岐する箇所があり、南北方向の溝はSD01に直交する形で連結し、東西方向の溝はSD01に並走しながら東側へ向かって調査区外へと延びる。溝底部での標高は南端が標高0.40m、北端が標高0.32mで、排水方向は南北方向の溝が南側から北側、東西方向の溝が西側から東側へ向かう。SD05の性格は、武家地の屋敷地内における排水溝と考えている。SD05から遺物は出土していない。

SD04出土遺物（第59図）

ここではSD04の埋土から出土した遺物を掲載する。59-1は中国磁器で、景德鎮系の青花小壺である。口縁端部を端反形におさめ、胴部外面に竹・松毬文、見込みに筍文を描く。高台内に「大明□化年□（大明成化年製か）」の銘款をもつ。17世紀代初頭のもので、森分類青花小壺I類に該当する。

59-2～4は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。59-2は撥形のやや高い高台をもつ呉器手形の碗である。内外面に透明釉を施し、疊付無釉。九陶Ⅱ期（1630～1650年代）の17世紀代中頃に近い時期。59-3は溝縁皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに3箇所の砂目痕が残る。器高が2.2cmの低い皿で、体部下方から高台は露胎。九陶Ⅱ期（1630～1650年代）の17世紀代中頃に近い時期。59-4は擂鉢である。緩やかに外側へ開く胴部をもち、口縁部周辺のみに鉄釉を施す。口縁端部が三角形のもので、内側へわずかに尖らせる。スリ目は9条を1単位として口縁部下方まで搔き上げる。九陶Ⅱ期（1620～1630年代）。



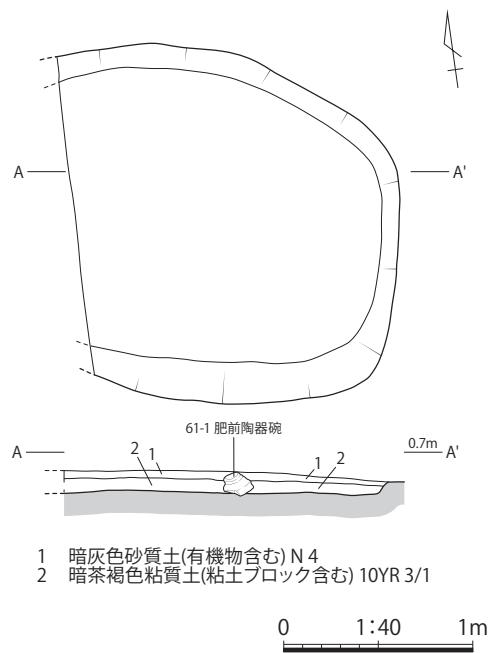
第 59 図 SD04 出土遺物

土坑 SK18（第 60 図）

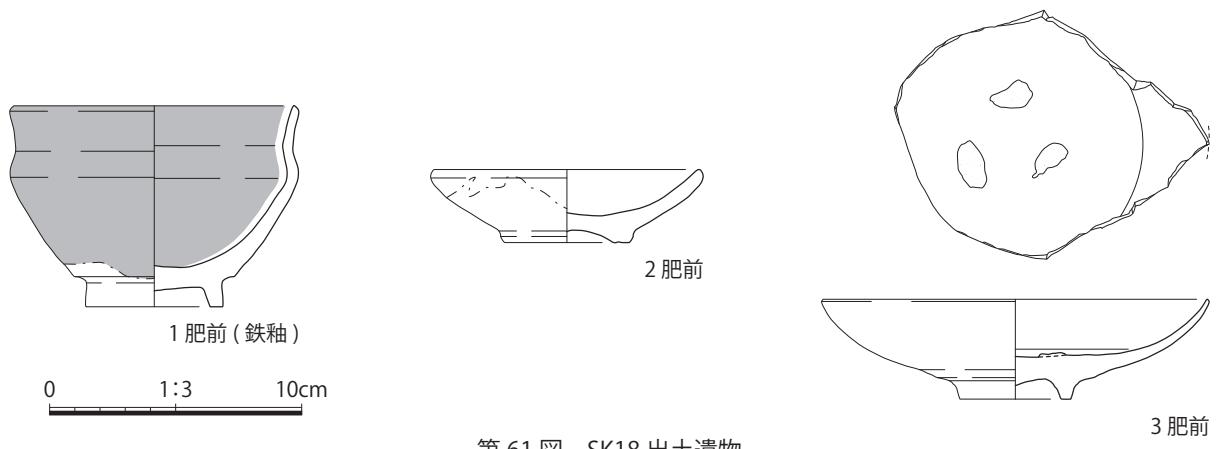
調査区の北西側で検出した土坑である。検出面は標高 0.60m で、平面形は楕円形を呈するものと考えられるが、3 分の 2 程度の検出に留まる。規模は上縁長軸 1.90m 以上、短軸 1.80m、深さ 12 cm を測る。土坑埋土は 2 層に分層でき、下層の暗茶褐色粘質土から陶磁器と 1 部位のみだがヒトの大腿骨（図版 46 №.17）が出土した。SK18 は町屋の空閑部分に形成された土壙墓の可能性もあり、町屋における敷地内の利用状況を考える上で重要である。

SK18 出土遺物（第 61 図）

ここでは SK18 の埋土から出土した遺物を掲載する。61-1～3 は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。61-1 は天目形の碗である。内外面に鉄釉を施し、高台は露胎。九陶 II 期（1610～1650 年代）。61-2 は丸皿である。内外面に灰釉を施し、体部下方から高台は露胎。見込みに目跡は無い。九陶 I -2 期（1594～1610 年代）。61-3 は丸皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに 3 箇所の砂目痕が残る。畳付無釉。九陶 II 期（1610～1650 年代）。なお、掲載した遺物以外に中国磁器・土師器皿が出土している。



第 60 図 SK18 平面図・断面図



第61図 SK18出土遺物

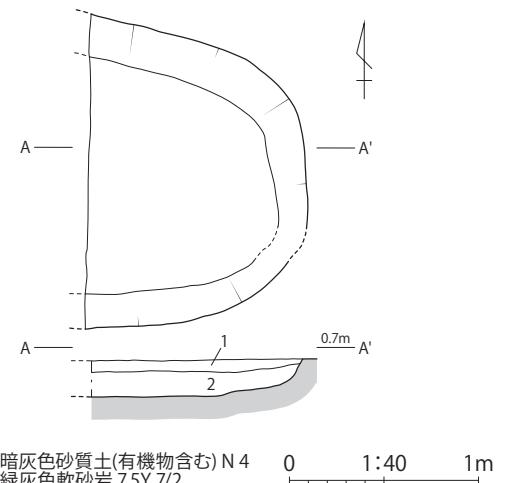
土坑 SK19（第62図）

調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高0.64mで、平面形は橢円形を呈するものと考えられるが、2分の1程度の検出に留まる。規模は上縁長軸1.50m以上、短軸1.40m、深さ20cmを測る。

土坑埋土は2層に分層でき、上層の暗灰色砂質土から陶器が出土した。

SK19出土遺物

遺物は小片のため図示できなかったが、SK19の埋土から17世紀代前半の肥前陶器が出土している。



第62図 SK19平面図・断面図

土坑 SK20（第63図）

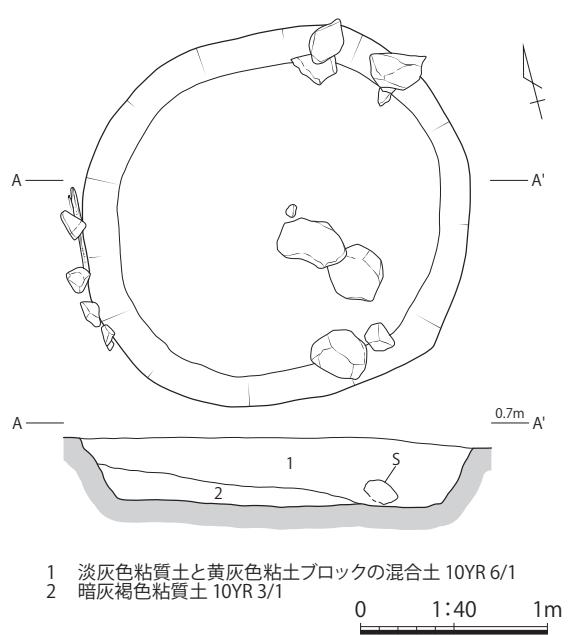
調査区の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高0.62mで、平面形は円形を呈する。規模は直径2.00m、深さ38cmを測る。

土坑埋土は2層に分層でき、下層の暗灰褐色粘質土から陶磁器・金属製品が出土した。

SK20出土遺物（第64図）

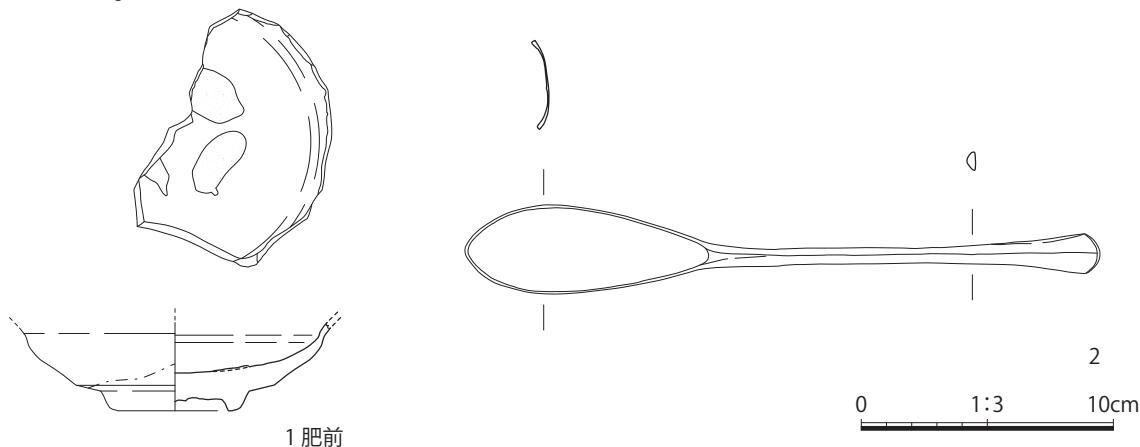
ここではSK20の埋土から出土した遺物を掲載する。64-1は国産陶器で、肥前陶器の折縁皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに3箇所の砂目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）。

64-2は金属製品である。真鍮製の匙で、ツボ



第63図 SK20平面図・断面図

部分は流線形で柄部分は三角形を呈し、全長 25.2cm を測る。なお、掲載した遺物以外に中国磁器が出土している。



第 64 図 SK20 出土遺物

土坑 SK21（第 65 図）

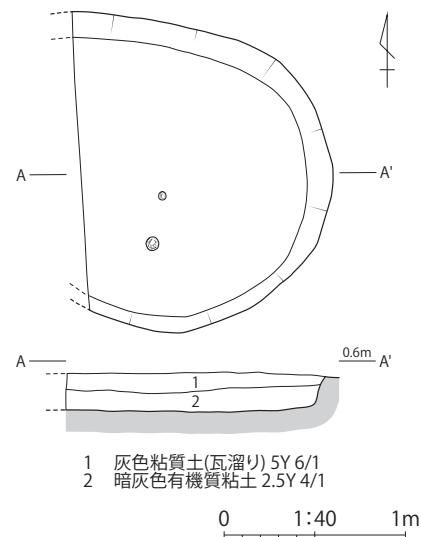
調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。土坑埋土から廃棄された丸瓦や平瓦の破片が多数出土しているため、瓦溜りと捉えている。検出面は標高 0.56m で、平面形は円形を呈するものと考えられるが、3 分の 2 程度の検出に留まる。規模は直径 1.70m、深さ 25cm を測る。

土坑埋土は 2 層に分層でき、上層の灰色粘質土から陶器・土師器皿・瓦が出土した。

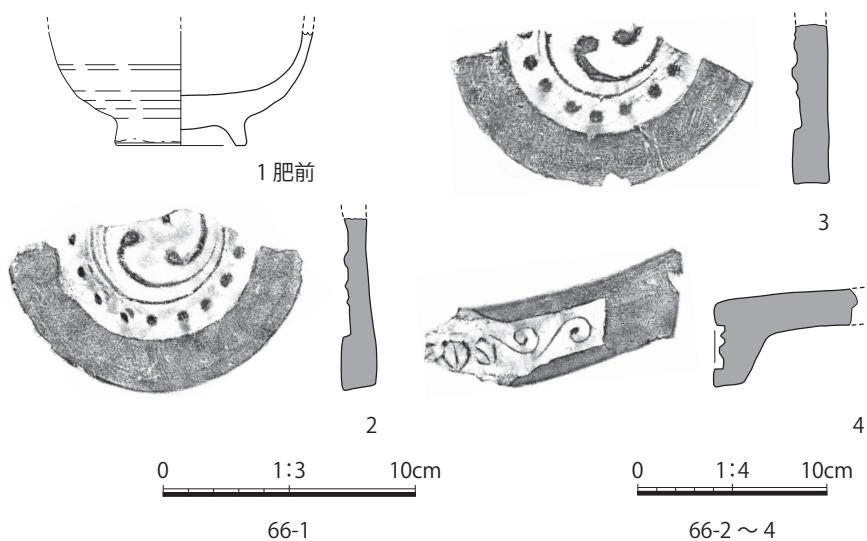
SK21 出土遺物（第 66 図）

ここでは SK21 の埋土から出土した遺物を掲載する。66-1 は国産陶器で、肥前陶器の腰張碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶 II 期（1610～1650 年代）。

66-2～4 は瓦である。
66-2 は軒丸瓦で、圈線がある左巻きの三巴文とその外面に珠文が配される（珠文数 17 か）。巴文の頭部が小さく、互いにやや離れる。松江城軒丸瓦分類巴文 A-1 類 B に該当する。66-3 は軒丸瓦で、圈線がない左巻きの三巴文とその外面に珠文が配される（珠文



第 65 図 SK21 平面図・断面図



第 66 図 SK21 出土遺物

数16か）。瓦当面の範傷が明瞭な段階の製品で、松江城軒丸瓦分類巴文A-3類Dに該当する。66-4は軒平瓦で、中心飾りの三葉が丸味をもち、葉脈は主脈のみを表現する。松江城軒平瓦分類下向三葉B-1類に該当する。

土坑SK22（第67図）

調査区の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高0.54mで、平面形は橢円形を呈する。規模は上縁長軸2.20m、短軸1.70m、深さ38cmを測る。

土坑埋土は2層に分層でき、下層の黒灰色砂質土から陶器・土師器皿が出土した。

SK22出土遺物（第68図）

ここではSK22の埋土から出土した遺物を掲載する。68-1～3は国産陶器である。68-1は肥前陶器の小壺である。内外面に藁灰釉を施し、胴部下方から高台は露胎。九陶I-2期（1594～1610年代）。68-2は瀬戸美濃陶器の折縁皿である。内外面に緑灰釉を施し、口縁部下方の体部内面に鎬文の陰刻を施す。1590～1610年代。68-3は肥前陶器の折縁皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに目跡は無い。高台内に井桁状の墨書きをもつ。九陶I-2期（1594～1610年代）。

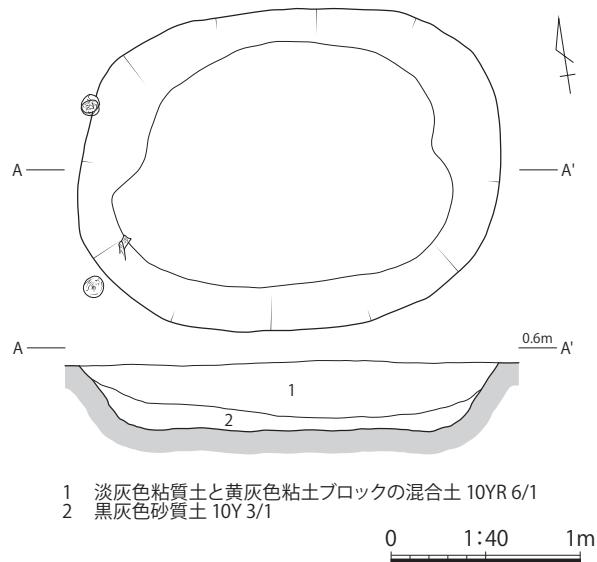
土坑SK23（第69図）

調査区の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高0.52mで、平面形は円形を呈するものと考えられるが、3分の2程度の検出に留まる。規模は直径1.30m、深さ10cmを測る。

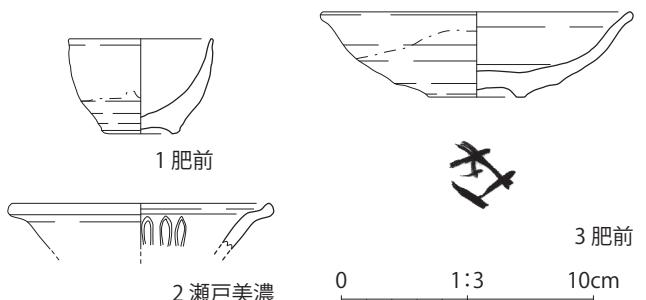
土坑埋土は木片を多く含む暗茶褐色有機質粘土の単層で、埋土から陶器が出土した。

SK23出土遺物（第70図）

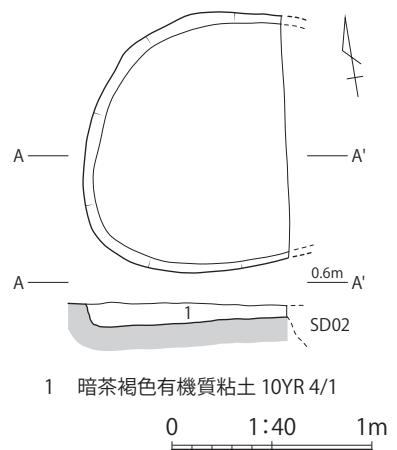
ここではSK23の埋土から出土した遺物を掲載する。70-1は国産陶器で、肥前陶器の折縁皿である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。見込みに目跡は無いが、疊付に砂目積みの痕跡をもつ。九陶II期（1610～1650年代）。



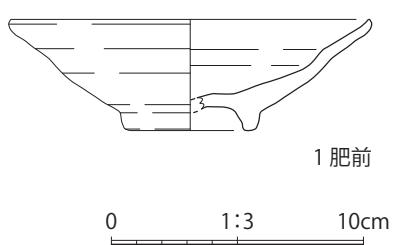
第67図 SK22 平面図・断面図



第68図 SK22 出土遺物



第69図 SK23 平面図・断面図



第70図 SK23 出土遺物

土坑 SK24（第 71 図）

調査区の中央で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.54m で、平面形は橢円形を呈する。規模は上縁長軸 1.40m、短軸 1.10m、深さ 54cm を測る。

土坑埋土は 4 層に分層でき、下層の黒褐色有機質粘土から陶器・動物遺存体が出土した。

SK24 出土遺物

遺物は小片のため図示できなかったが、SK24 の埋土から 17 世紀代前半の肥前陶器が出土している。

土坑 SK25（第 72 図）

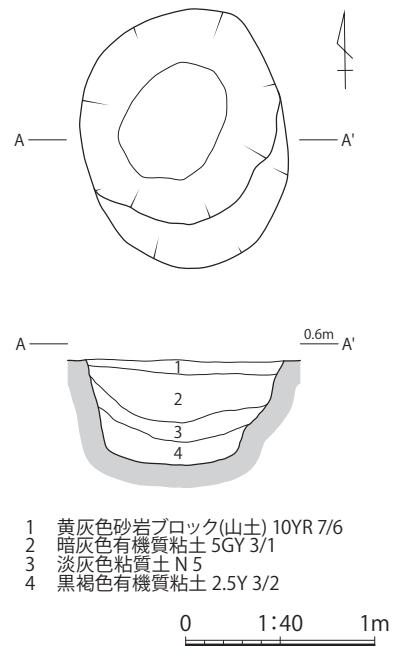
調査区の南西角で検出した廃棄土坑である。SK25 は、第 2 遺構面まで掘り下げた段階に検出した土坑だが、埋土から出土した遺物に肥前磁器（初期伊万里）を数点含むことや遺物の年代から、第 2 遺構面よりも上層から掘り込まれた土坑の底部を検出している可能性も考えられる。第 2 遺構面で中国磁器や肥前陶器と共に伴して肥前磁器がまとまって出土したのは、この土坑のみである。

検出面は標高 0.60m で、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられるが、3 分の 2 程度の検出に留まる。規模は上縁長軸 1.80m 以上、短軸 1.30m 以上、深さ 60cm 以上を測る。

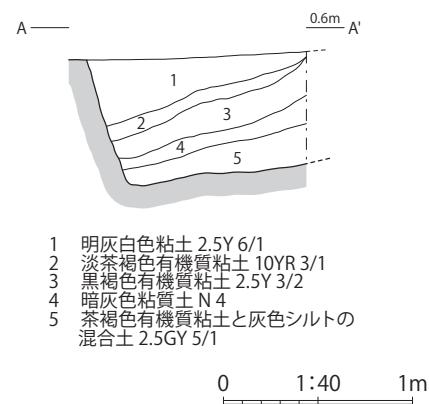
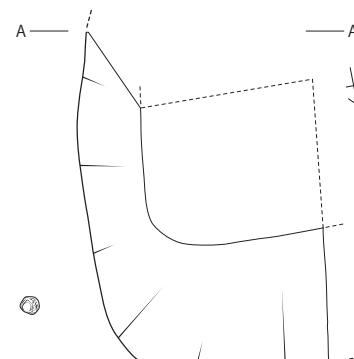
土坑埋土は 5 層に分層でき、中間層の黒褐色有機質粘土と暗灰色粘質土から陶磁器・木製品・金属製品・瓦が出土した。

SK25 出土遺物（第 73・74 図）

ここでは SK25 の埋土から出土した遺物を掲載する。73-1～4 は中国磁器である。73-1 は景德鎮系の青花小壺である。口縁端部を端反形におさめ、胴部外面に花卉文を描く。16 世紀代末～17 世紀代初頭のもので、森分類青花小壺 I 類に該当する。73-2 は景德鎮系の青花小壺である。口縁端部を端反形におさめ、胴部外面に山水文を描く。16 世紀代末～17 世紀代初頭のもので、森分類青花小壺 I 類に該当する。73-3 は景德鎮系の青花碗である。丸碗で、胴部外面に草・蝶文、見込みに二重圈線とその中央に花卉文を描く。高台内に「大明成化年製」の銘款をもつ。17 世紀代前半のもので、森分類青花碗 G 群に該当する。73-4 は景德鎮系の青花皿で



第 71 図 SK24 平面図・断面図

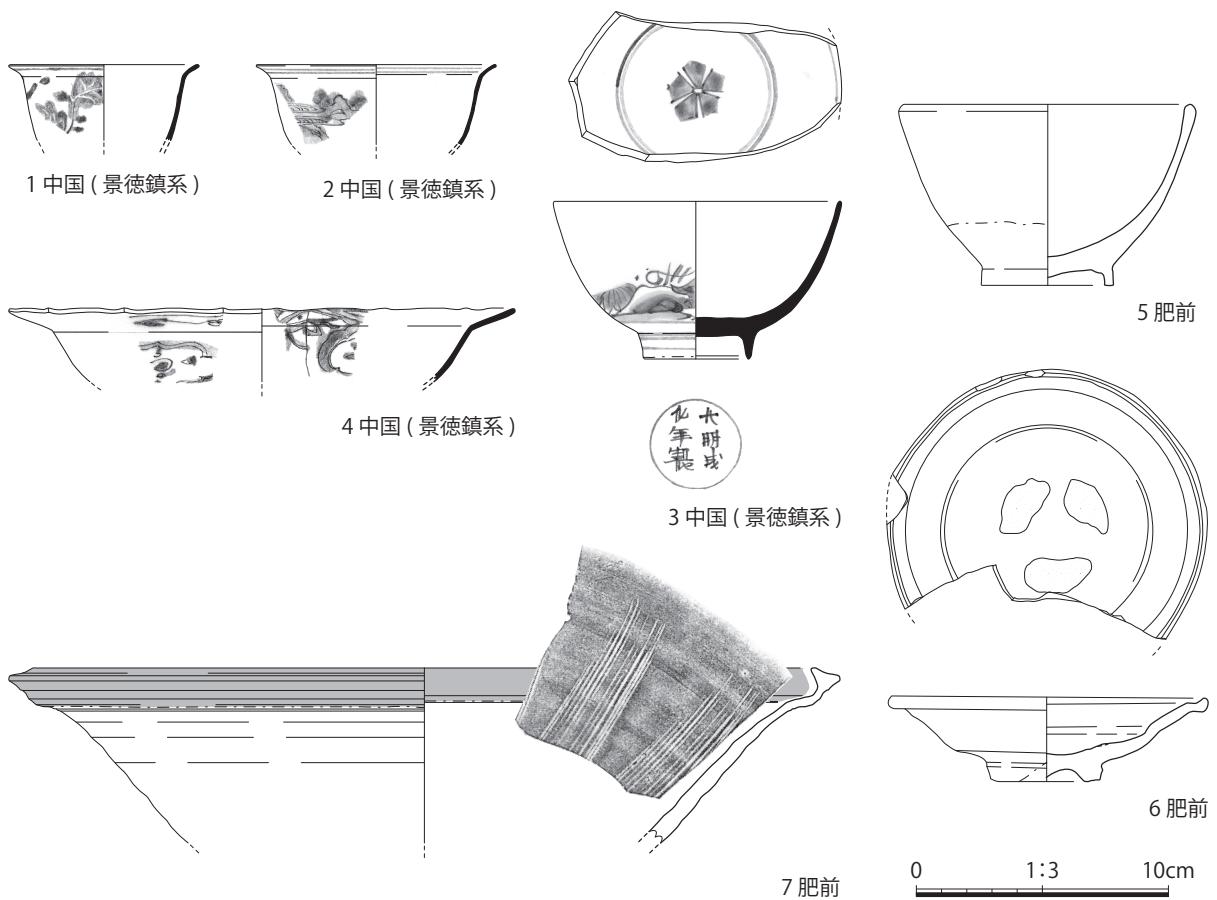


第 72 図 SK25 平面図・断面図

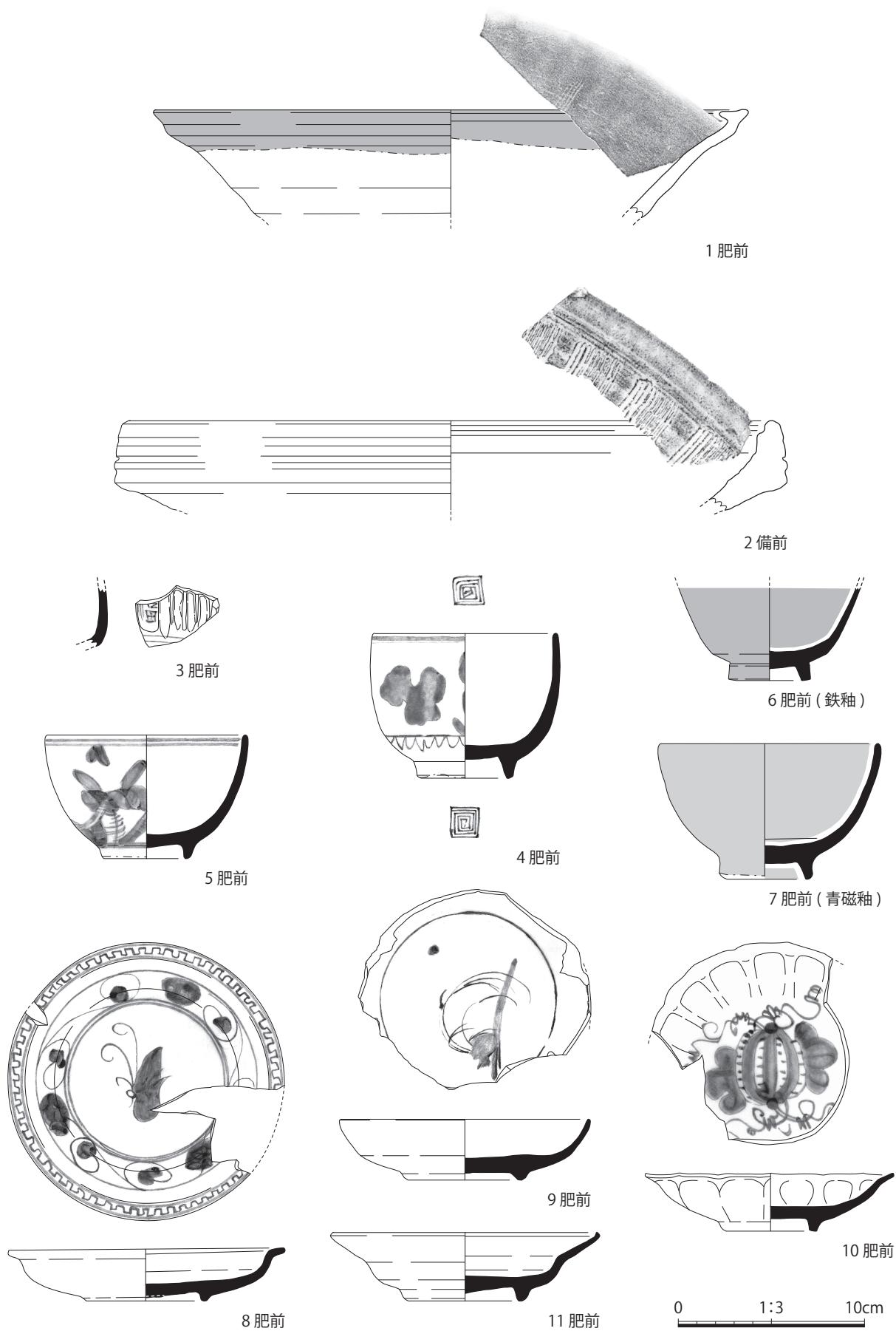
ある。型押成形された芙蓉手の輪花皿で、口縁端部を外側に折り曲げて鍔状におさめる。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花皿G2群に該当する。

73-5～74-2は国産陶器で、73-5～74-1はいずれも肥前陶器である。73-5は杉形碗である。内外面に灰釉を施し、胴部下方から高台は露胎。九陶II期（1610～1650年代）。73-6は溝縁皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに3箇所の砂目痕が残る。高台は露胎。九陶II期（1610～1650年代）。73-7・74-1は擂鉢である。73-7は緩やかに外側へ開く胴部をもち、口縁部周辺のみに鉄釉を施す。口縁部をくの字状に折り曲げ、口縁端部が三角形のもので、内側へ若干尖らせる。スリ目は12条を1単位として口縁部下方まで搔き上げる。九陶II期（1620～1630年代）。74-1は赤褐色を呈する素地の擂鉢で、口縁部周辺のみに鉄釉を施す。口縁端部を平坦にして、上端を水平にする。九陶II期（1630～1650年代）。74-2は備前の擂鉢である。口縁部のみ残存し、口縁帶外面に3条の凹線をもつ。スリ目は10条を1単位として上端を揃える。乗岡編年近世2a期（1620～1640年代）に該当する。

74-3～11は国産磁器で、いずれも肥前磁器である。74-3は天目形の碗の小片で、胴部下方のみ残存する。胴部外面に鎬状の削り込みを施し、「福」の文字銘をもつ。74-4は腰張碗である。胴部外面に水草文、腰部外面に波線文、見込みと高台内に雷文を描く。畠付から高台内無釉。九陶II-1期（1610～1630年代）。74-5は丸碗である。胴部外面の上下に二重圈線とその中央に草花文を描く。畠付無釉。九陶II-2期（1630～1640年代）。74-6は天目形の碗である。内外面に鉄釉を施し、高台は露胎。九陶II-2期（1640～1650年代）。74-7は青磁の丸碗である。内外面に青磁釉を施し、



第73図 SK25出土遺物（1）



第74図 SK25出土遺物(2)

畳付無釉で砂粒が付着する。九陶II-2期（1630～1650年代）。74-8は鍔縁皿である。見込みに蝶文とその外周に花唐草文、口縁部内面に櫛歯文を描く。畳付無釉で砂粒が付着する。九陶II-1期（1620～1630年代）。74-9は丸皿である。口縁端部に鉄釉で口銹を施し、見込みに圈線とその中央に草文を描く。畳付無釉。九陶II-1～2期（1620～1640年代）。74-10は型打成形の輪花皿である。見込みに瓜文を描く。畳付無釉で砂粒が付着する。九陶II-2期（1630～1640年代）。74-11は白磁の折縁皿である。体部中央から口縁部にかけてくの字状に外側へ折り曲げる。九陶II-2期（1630～1650年代）。

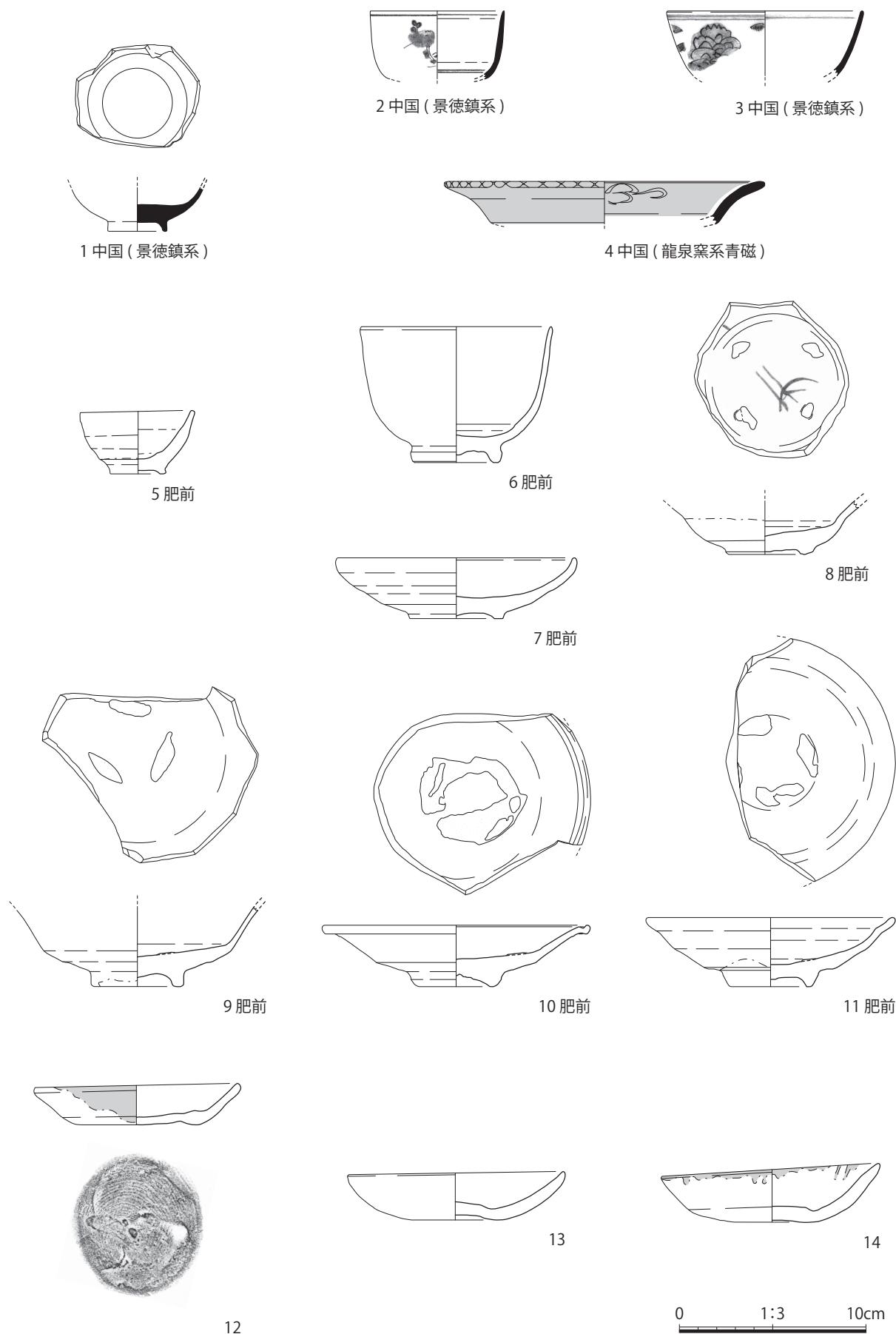
第2遺構面遺構外出土遺物（第75図）

ここで掲載する遺物は、第2遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

75-1～4は中国磁器である。75-1は景德鎮系の白磁小坏で、底部のみ残存する。内外面に透明釉を施す。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、畳付無釉で砂粒が付着する。16世紀代末～17世紀初頭。75-2は景德鎮系の青花小坏で、口縁部から体部のみ残存する。体部下方から上方へ直立する小坏で、直口の口縁部をもつ。胴部外面に草花文を描く。16世紀代末～17世紀初頭のもので、森分類青花小坏Ⅲ類に該当する。75-3は景德鎮系の青花碗で、口縁部のみ残存する。胴部外面に牡丹文を描く。16世紀代末～17世紀初頭のもので、森分類青花碗H群に該当する。75-4は龍泉窯系青磁の綾花皿で、口縁部のみ残存する。口縁部内面にヘラ描きで花卉文を施す。16世紀代末～17世紀初頭。

75-5～11は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。75-5は小坏である。内外面に灰釉を施すが、被熱のため全体的に白っぽくなっている。高台は露胎で、高台脇にヘラ削りを施す。九陶II期（1610～1650年代）。75-6は筒丸碗である。胴部下方から上方へ向かって緩やかに外傾する碗で、内外面に透明釉を施し、畳付を残して全面施釉する。断面に漆継ぎ痕をもつ。九陶II期（1630～1640年代）。75-7は丸形皿である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。見込みに目跡は無く、体部下半は被熱により黒く焦げている。九陶I-2期（1594～1610年代）。75-8は鉄絵皿（絵唐津）である。内外面に透明釉を施し、見込みに鉄絵で草文を描く。見込みに4箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶I-2期（1594～1610年代）。75-9は体部が屈曲し、口縁部が直立気味に外傾するタイプの皿である。内外面に灰釉を施し、畳付を残して全面施釉する。見込みに3箇所の砂目痕が残る。九陶II期（1610～1650年代）。75-10は溝縁皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに3箇所の砂目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶II期（1610～1650年代）。75-11は口縁端部をわずかに外反させる折縁皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに4箇所の砂目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶II期（1610～1650年代）。

75-12～14は土師器皿である。75-12はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。口縁部外面に油煙痕をもつため、灯明皿として使用したものである。75-13・14はいずれも手づくり成形の京都系土師器皿である。いわゆる「へそ皿」で、内面に「の」字状のナデ上げ調整を施す。75-14は口縁部周辺に油煙痕をもつため、灯明皿として使用したものである。なお、掲載した遺物以外に備前擂鉢・土師器皿・金属製品・瓦が出土している。



第75図 第2遺構面遺構外出土遺物

第5項 第3遺構面の概要(第76図)

第3遺構面は、標高0.30～0.50mで検出した遺構面である。遺構は、溝3条(SD06～08)、土坑13基(SK26～38)のほかに、調査区南側で武家地の屋敷地内における造成土と第3遺構面の整地段階に施されたものと考えられる黒褐色有機質粘土(ゴミ層)の広がりを確認した。

第3遺構面の時期に該当する松江城下町絵図に堀尾期絵図(第7図)があり、1区が比定する地点には北側に空白地、南側に武家地が描かれている。空白地と武家地は、東西方向の界線により明確に分けられて区画されており、第3遺構面で検出した東西方向に延びる屋敷境溝SD06がこの境界線にあたるものと考えている。SD06は、第2遺構面で検出したSD01の直下で検出した遺構で、遺構の位置関係はSD01とほぼ同じ位置である。堀尾期絵図を根拠として、第3遺構面で検出した遺構配置を考えた場合、検出したSD06を境に北側は空白地、南側は武家地の敷地内を調査したものと捉えている。

第3遺構面では、SD06の南側で島状整地が施されている状況を確認した。基盤となる土層は、空白地では灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土、武家地では緑灰色シルト質軟砂岩を造成土として使用していた。これらは、空白地と武家地では造成土の使用が異なるということを示しているものと考えている。層厚は40cm前後を測り、最上位の整地面で遺構を検出したことから、これを第3遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から17世紀代初頭～前半を想定している。⁽²⁶⁾

第6項 第3遺構面の遺構と遺物

屋敷境溝SD06(第77図)

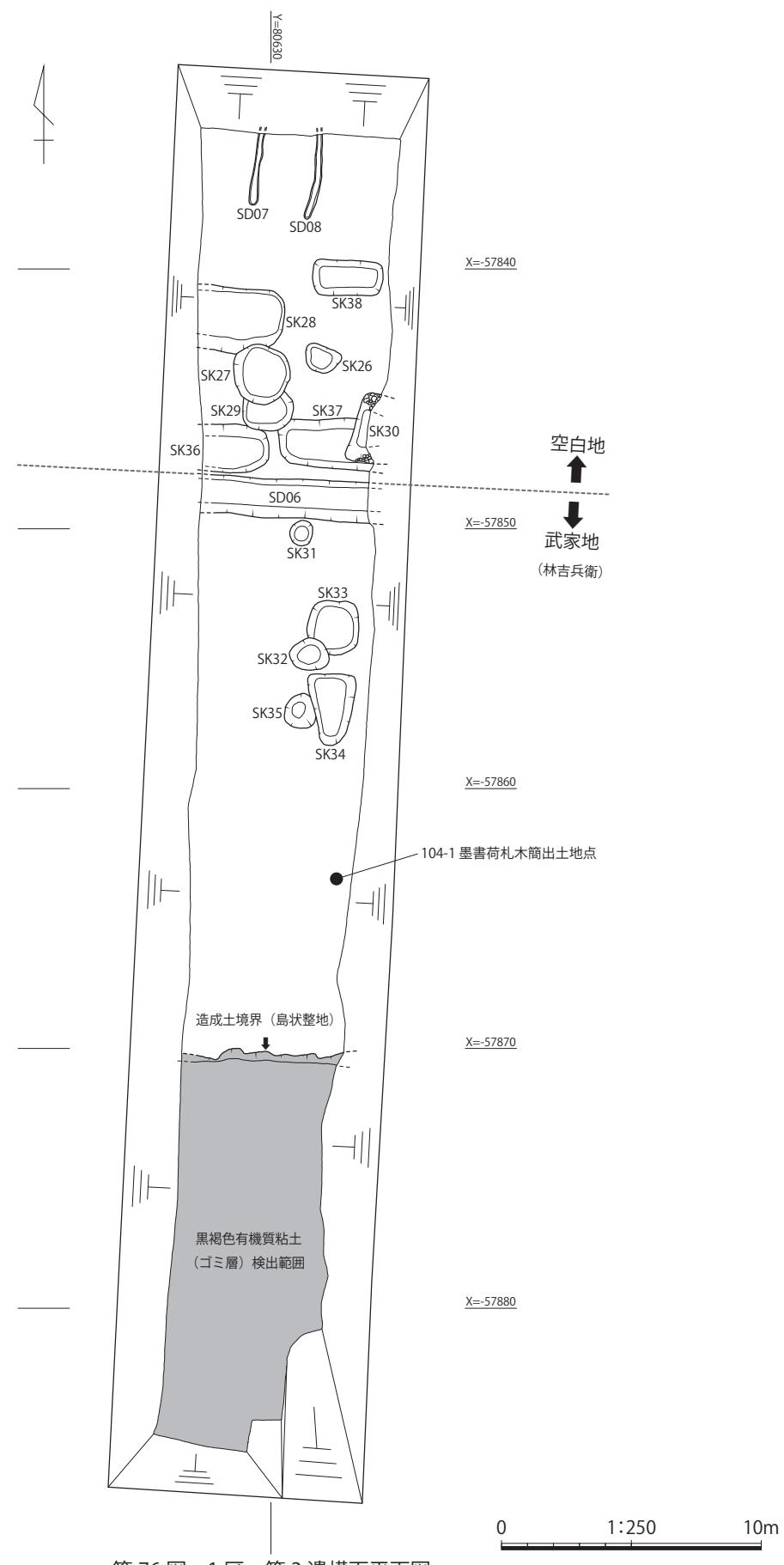
調査区の北側で検出した東西方向に一直線に延びる素掘り溝である。SD06は、第2遺構面の屋敷境溝SD01の直下にあたり、SD01とほぼ重複する位置で検出している。検出面は溝上端で標高0.20mで、断面形は浅いU字状を呈する。規模は東西長さ6.50m以上、南北幅1.50m、深さ20cmを測り、主軸方位は東西でE-4°-Sにとる。溝底部での標高は西端が標高-0.14m、東端が標高-0.26mで、東側の外堀(米子川)方向に向かって流れていたと考えられる。

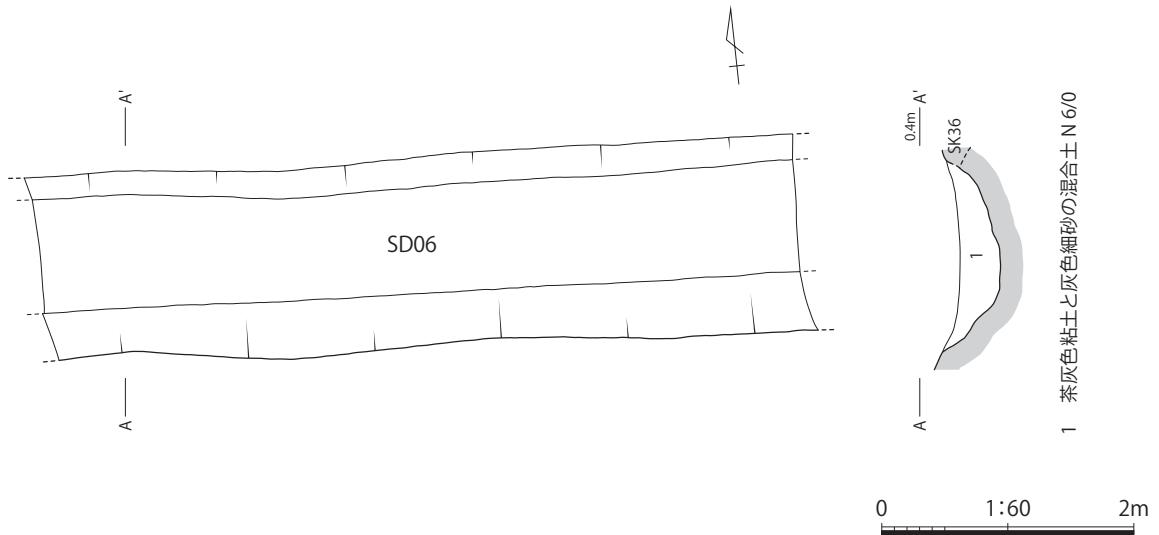
溝埋土は茶灰色粘土と灰色細砂の混合土の単層が堆積し、土層断面で溝を掘り直した痕跡や溝底部に自然堆積層は確認されず、廃絶時には溝の上端部まで一気に埋め戻している状況であった。遺物は、SD06の埋土から溝が埋まった段階に廃棄されたものと考えられる陶磁器・土師器皿・木製品・動物遺存体が出土した。

SD06の性格は、空白地と武家地の敷地内の排水を集約する素掘り溝であり、空白地と武家地の境界を明確に画するための屋敷境溝として位置付けられる。

SD06出土遺物(第78・79図)

ここではSD06の埋土から出土した遺物を掲載する。78-1～5は中国磁器である。78-1は漳州窯系の青花碗で、口縁部のみ残存する。胴部外面に草花文を描く。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花碗C群粗製に該当する。78-2は景德鎮系の青花碗で、底部のみ残存する。見込みに雨龍文を描く。高台内に方形枠と「祥」の文字銘をもつ。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分

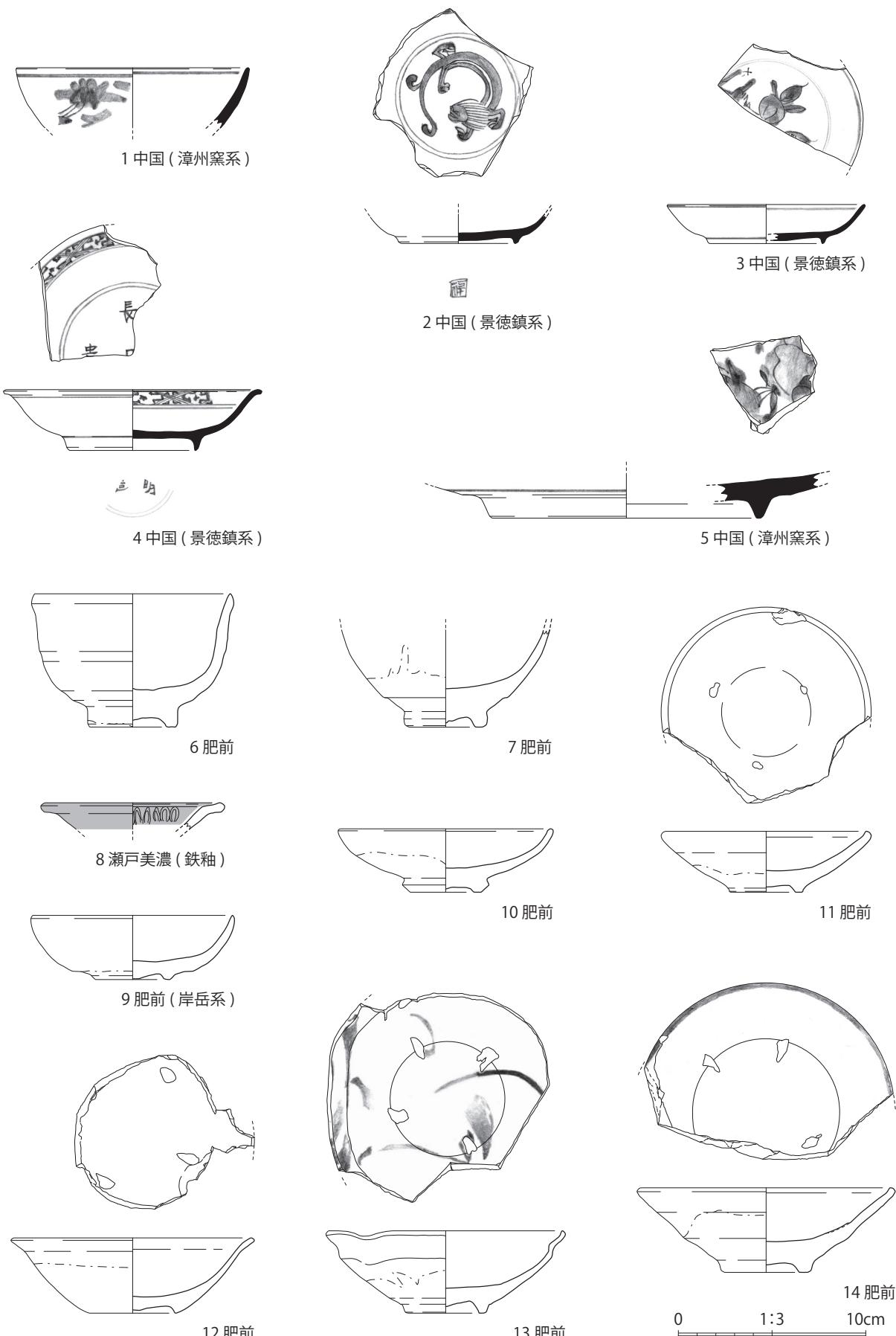




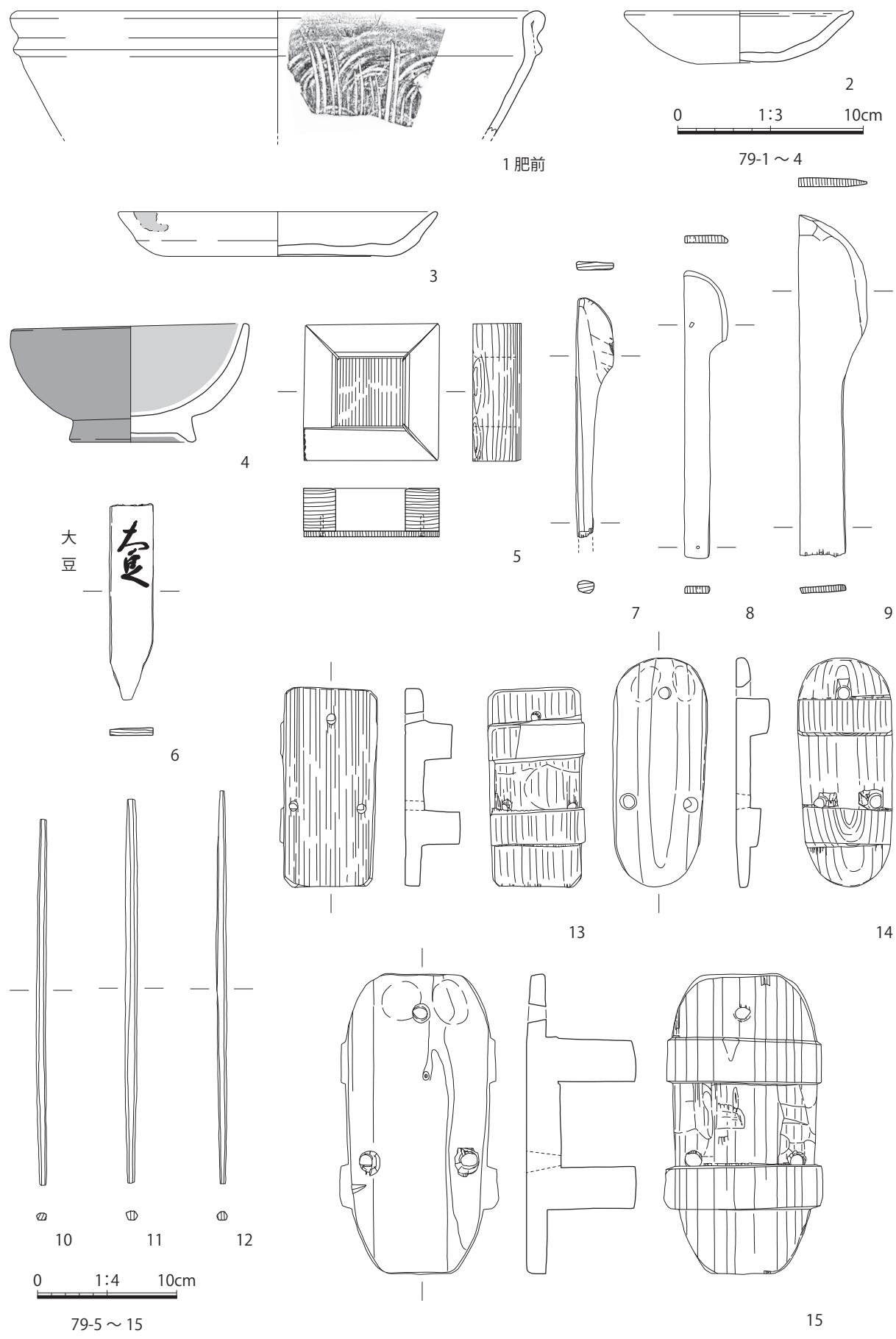
第77図 SD06 平面図・断面図

類青花碗H群に該当する。78-3は景德鎮系の青花皿である。丸皿で、見込みに瑞花纹を描く。畠付に砂粒が付着する。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花皿E群に該当する。78-4は景德鎮系の青花皿である。口縁端部を端反形におさめ、内面に櫛文を描く。見込みに「長□□貴（長春富貴か）」、高台内に「□明□造（大明年造か）」の銘款をもつ。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花皿B2群に該当する。78-5は漳州窯系の青花盤で、底部のみ残存する。見込みに植物文を描き、高台周辺に1～2mmの砂粒が付着する。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花皿F群粗製に該当する。

78-6～14・79-1は国産陶器である。78-6は肥前陶器の端反碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）。78-7は肥前陶器の碗である。内外面に灰釉を施し、胴部下方から高台は露胎。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）。78-8は瀬戸美濃陶器の折縁皿である。内外面に鉄釉を施し、口縁部下方の体部内面に鎬文の陰刻を施す。1590～1610年代。78-9は肥前陶器の岸岳系の丸皿である。内外面に藁灰釉を施し、見込みに目跡は無い。高台は露胎。九陶I-1期（1580～1594年頃）。78-10は肥前陶器の丸皿である。内外面に藁灰釉を施し、見込みに目跡は無い。体部下方から高台は露胎。九陶I-2期（1594～1610年代）。78-11は肥前陶器の丸皿である。内外面に透明釉を施し、見込みに3箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶I-2期（1594～1610年代）。78-12は肥前陶器の端反皿である。内外面に灰釉を施し、見込みに4箇所の胎土目痕が残る。碁笥底状の高台で、底部外面に煤が付着する。体部下方から高台は露胎。九陶I-2期（1594～1610年代）。78-13は肥前陶器の向付（四方皿）である。内外面に透明釉を施し、内面に鉄絵で草文を描く。見込みに4箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶I-2期（1594～1610年代）。78-14は肥前陶器の丸皿である。内外面に透明釉と口縁端部に鉄釉で口銹を施し、見込みに4箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶I-2期（1594～1610年代）。79-1は肥前陶器の擂鉢である。口縁部を直立させ、口縁端部を外側へ折り返して丸くおさめる。口縁部から胴部外面にかけて木灰釉を施す。スリ目は7条を1単位として口縁部下方まで搔き上げる。叩き



第78図 SD06出土遺物(1)



第79図 SD06出土遺物 (2)

成形で、内面に同心円状の当て具痕が残る。九陶I期（1590～1620年代）。

79-2・3は土師器皿で、いずれも手づくね成形の京都系土師器皿である。79-2はいわゆる「へそ皿」で、内面に「の」字状のナデ上げ調整を施す。79-3は口径17cmを測るやや大振りな土師器皿で、内外面に油煙痕をもつことから、灯明皿として使用したものである。

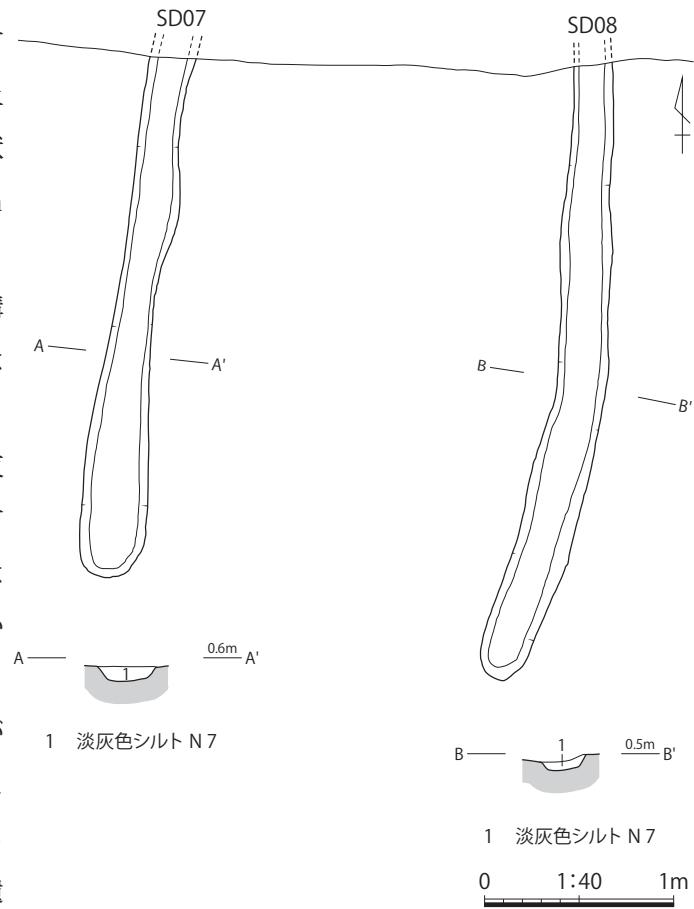
79-4～15は木製品である。79-4は漆器椀である。内面が赤漆、外側が黒漆で塗色された無文の丸椀である。79-5は方形の木地枠である。外法は一辺9.7cm、高さ3.5cm、内法は一辺5.0cm、高さ3.0cmを測り、容量は75ml（約4勺）である。底部外側に4箇所の目釘があり、底板と側板を接合している。79-6は墨書き木簡である。上端は欠損しているが、下端を三角形に尖らせる荷札で、片面に「大豆」と墨書きされる。79-7～9は籠である。いずれも籠部を弧状になるように削り加工を施し、先端部をやや薄くして刃状におさめる。79-10～12は白木の箸で、長さ26～28cm、直径7～8mmを測る。79-13～15は下駄である。79-13は角型連歯下駄である。木取りは柾目で、長さ14.3cm、幅6.7cm、歯高2.6cmを測る子供用の下駄である。79-14は丸型連歯下駄である。木取りは柾目で、長さ16.4cm、幅6.7cm、一部摩滅しているが歯高1.4cmを測る子供用の下駄である。前緒付近には足の指の痕跡が残る。79-15は丸型連歯下駄である。木取りは柾目で、長さ21.5cm、幅10.4cm、歯高6.4cmを測る成人用の下駄である。前緒付近には足の指の痕跡が残る。

溝 SD07・08（第80図）

いずれも調査区の北端で検出した南北方向に延びる素掘り溝である。検出面は溝上端で標高0.50mで、断面形は浅いU字状を呈する。SD07の規模は南北長さ2.70m以上、東西幅30cm、深さ10cm前後を測り、主軸方位は南北でN-4°-Eにとる。溝底部は標高0.40～0.44mで、排水方向は南側から北側の外堀（北田川）へ向かう。

SD08の規模は南北長さ3.30m以上、東西幅30cm、深さ6cm前後を測り、主軸方位は南北でN-2°-Eにとる。溝底部は標高0.44～0.46mで、排水方向は南側から北側の外堀（北田川）へ向かう。

溝埋土はいずれも淡灰色シルトの単層が堆積する。SD07・08の性格は、空白地における排水用の溝（明渠か）と考えられるが、詳細は不明である。SD07・08から遺物は出土していない。



第80図 SD07・08 平面図・断面図

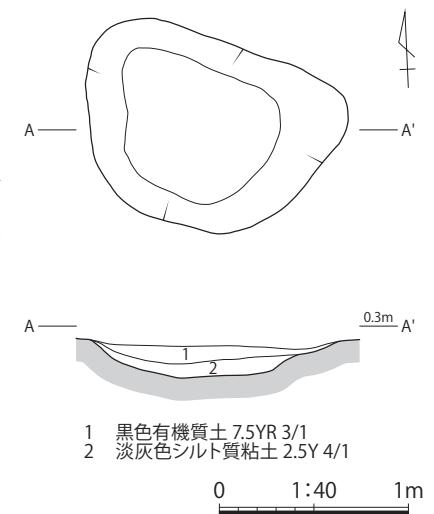
土坑 SK26 (第 81 図)

調査区の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.20m で、平面形は歪んだ橢円形を呈する。規模は上縁長軸 1.30m、短軸 1.00m、深さ 18cm を測る。土坑床面では、木の枝を含む薄い有機物層の堆積を確認したが深さが浅いため、上層から掘り込まれた土坑の底部を検出している可能性が考えられる。

土坑埋土は 2 層に分層でき、上層の黒色有機質土から陶器が出土した。

SK26 出土遺物

遺物は小片のため図示できなかったが、SK26 の埋土から 17 世紀代前半の肥前陶器が出土している。



第 81 図 SK26 平面図・断面図

土坑 SK27 (第 82 図)

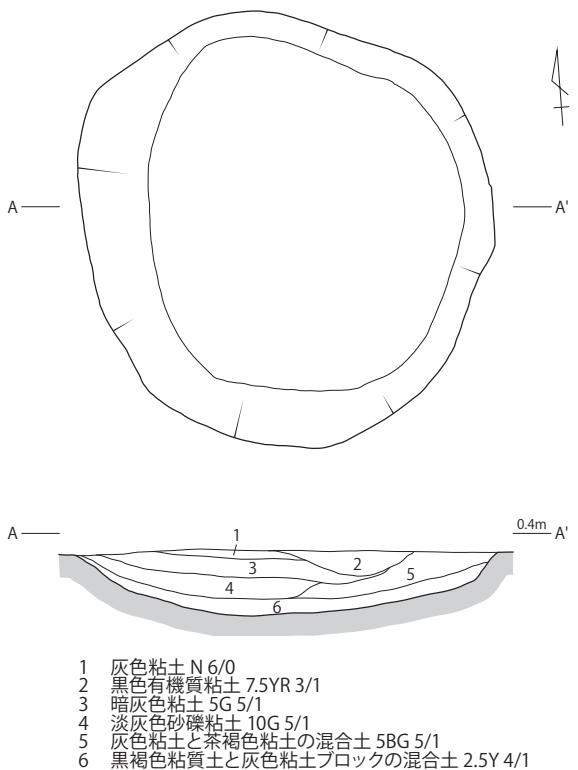
調査区の北側で検出した廃棄土坑である。土坑の北側は SK28 と、南側は SK29 とそれぞれ一部切り合い、新旧関係は SK28・29 が古く、SK27 が新しい土坑である。

検出面は標高 0.34m で、平面形は円形を呈する。規模は直径 2.20m、深さ 34cm を測る。土坑を掘り直した痕跡は確認できなかったが、土坑埋土は有機物層と粘土層が互層状に堆積していることから、数回にわたって廃棄行為が行われていた可能性が考えられる。

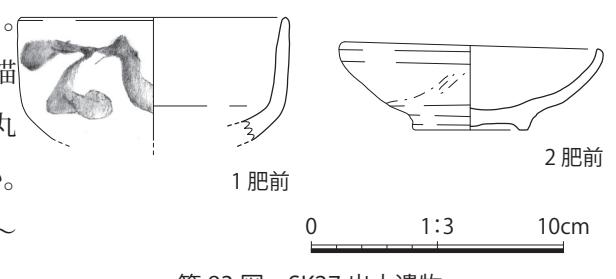
土坑埋土は 6 層に分層でき、上層の黒色有機質粘土と暗灰色粘土から陶器・土師器皿・動物遺存体が出土した。

SK27 出土遺物 (第 83 図)

ここでは SK27 の埋土から出土した遺物を掲載する。83-1・2 は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。83-1 は半筒碗で、口縁部～胴部のみ残存する。内外面に透明釉を施し、胴部外面に鉄絵で草文を描く。九陶 I -2 期 (1594 ~ 1610 年代)。83-2 は丸皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに目跡は無い。体部下方から高台は露胎。九陶 I -2 期 (1594 ~ 1610 年代)。



第 82 図 SK27 平面図・断面図



第 83 図 SK27 出土遺物

土坑 SK28 (第 84 図)

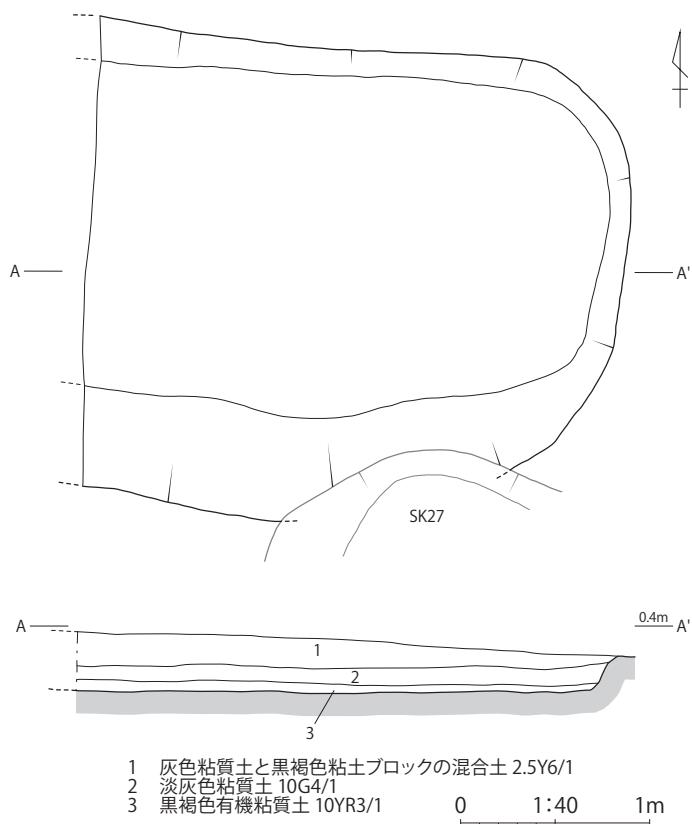
調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。土坑の南側は SK27 と一部切り合い、新旧関係は SK28 が古く、SK27 が新しい土坑である。

検出面は標高 0.36m で、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられるが、3 分の 2 程度の検出に留まる。規模は上縁長軸 2.80m 以上、短軸 2.50m、深さ 30cm を測る。

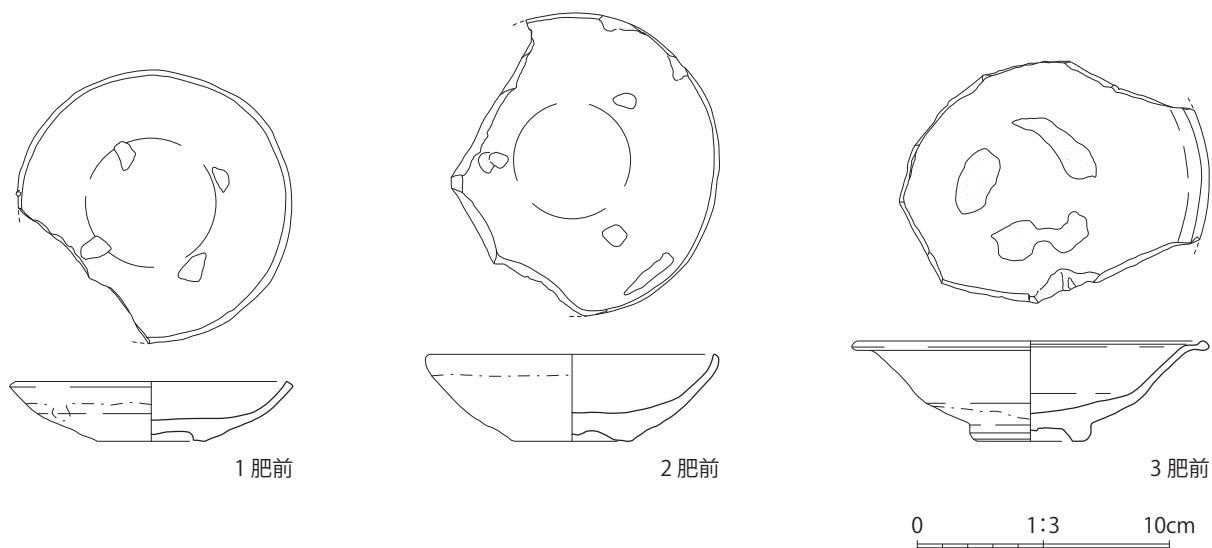
土坑埋土は 3 層に分層でき、下層の黒褐色有機粘質土から陶器・瓦が出土した。

SK28 出土遺物 (第 85 図)

ここでは SK28 の埋土から出土した遺物を掲載する。85-1～3 は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。85-1 は丸皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに 4 箇所の胎土目痕が残る。碁笥底状の高台で、体部下方から高台は露胎。九陶 I -2 期 (1594～1610 年代)。85-2 は丸皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに 3 箇所の胎土目痕が残る。高台脇の削りがあまく、体部との境は不明瞭である。体部下方から高台は露胎。九陶 I -2 期 (1594～1610 年代)。85-3 は溝縁皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに 3 箇所の砂目痕が残る。体部下方から高台は露胎。九陶 II 期 (1610～1650 年代) の中でも古手のタイプか。



第 84 図 SK28 平面図・断面図



第 85 図 SK28 出土遺物

土坑 SK29 (第 86 図)

調査区の北側で検出した廃棄土坑である。土坑の北側は SK27 と一部切り合い、新旧関係は SK29 が古く、SK27 が新しい土坑である。

検出面は標高 0.32m で、平面形は円形を呈する。規模は直径 1.90m、深さ 35cm を測る。

土坑埋土は 4 層に分層でき、下層の暗灰色有機質土から陶器・土師器皿・木製品が出土した。

SK29 出土遺物

遺物は小片のため図示できなかったが、SK29 の埋土から 17 世紀代前半の肥前陶器が出土している。

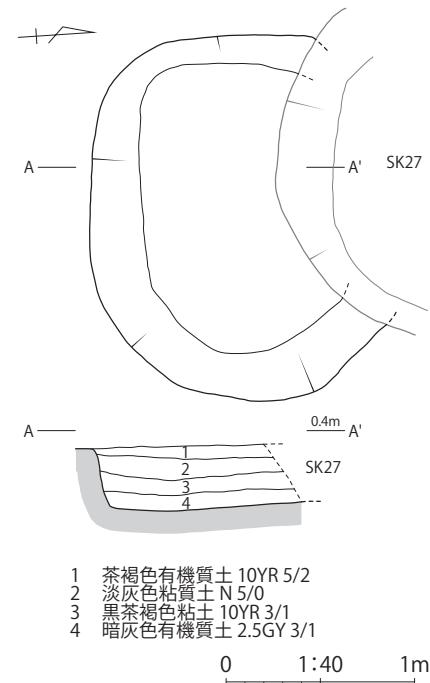
土坑 SK30 (第 87 図)

調査区の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.38m で、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられるが、土坑西端の一部の検出に留まる。規模は上縁長軸 2.70m 以上、短軸 60cm 以上、深さ 56cm を測る。この土坑上端の北側と南側の一部では、長軸 10 ~ 15cm、厚さ 5 ~ 10cm 前後を測る拳大の礫を土坑内に投げ込んだような状態で検出している。

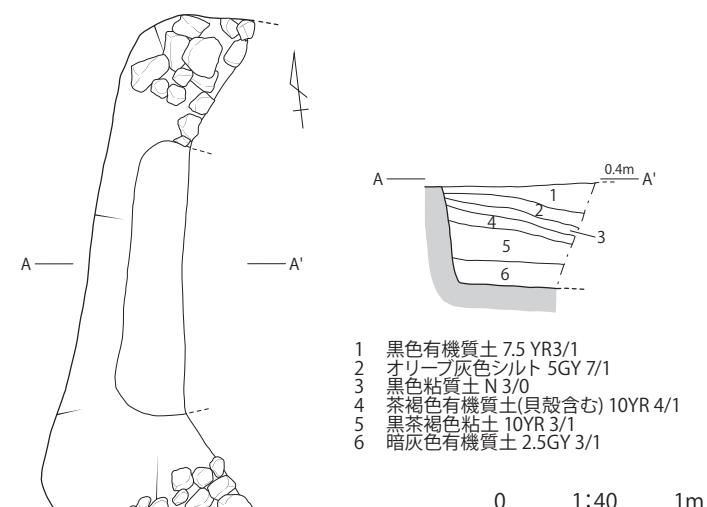
土坑埋土は 6 層に分層でき、中間層の茶褐色有機質土から動物遺存体、下層の黒茶褐色粘土と暗灰色有機質土から陶器・土師器皿・木製品が出土した。

SK30 出土遺物 (第 88 図)

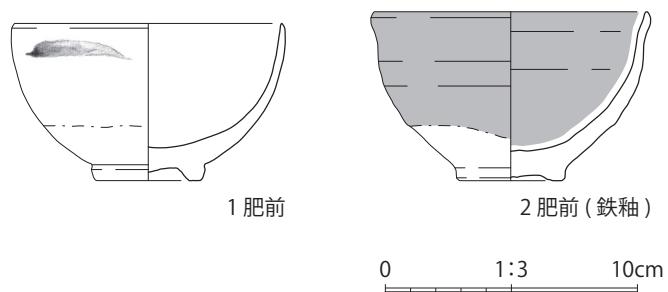
ここでは SK30 の埋土から出土した遺物を掲載する。88-1・2 は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。88-1 は丸碗で、内外面に透明釉を施し、胴部外面に鉄絵で草文を描く。胴部下方から高台は露胎。九陶 I - 2 期(1594 ~ 1610 年代)。88-2 は天目形の碗で、内外面に鉄釉を施し、胴部下方から高台は露胎。九陶 II 期(1610 ~ 1650 年代)。



第 86 図 SK29 平面図・断面図



第 87 図 SK30 平面図・断面図

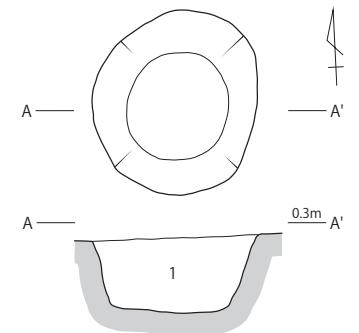


第 88 図 SK30 出土遺物

土坑 SK31（第 89 図）

調査区の北側で検出した無遺物土坑である。検出面は標高 0.24m で、平面形は円形を呈する。規模は直径 85cm、深さ 40cm を測る。

土坑埋土は灰色シルトと黒褐色粘質土の混合土の単層が堆積する。SK31 から遺物は出土していない。



1 灰色シルトと黒褐色粘質土の混合土 10YR 6/1

0 1:40 1m

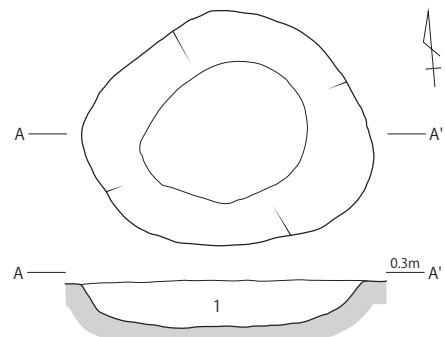
第 89 図 SK31 平面図・断面図

土坑 SK32（第 90 図）

調査区の中央からやや北側で検出した無遺物土坑である。土坑の北東側は SK33 と一部切り合い、新旧関係は SK33 が古く、SK32 が新しい土坑である。

検出面は標高 0.26m で、平面形は歪んだ円形を呈する。規模は直径 1.20m、深さ 25cm を測る。

土坑埋土は淡灰色粘土と緑灰色シルトの混合土の単層が堆積する。SK32 から遺物は出土していない。



1 淡灰色粘土と緑灰色シルトの混合土 7.5GY 5/1

0 1:40 1m

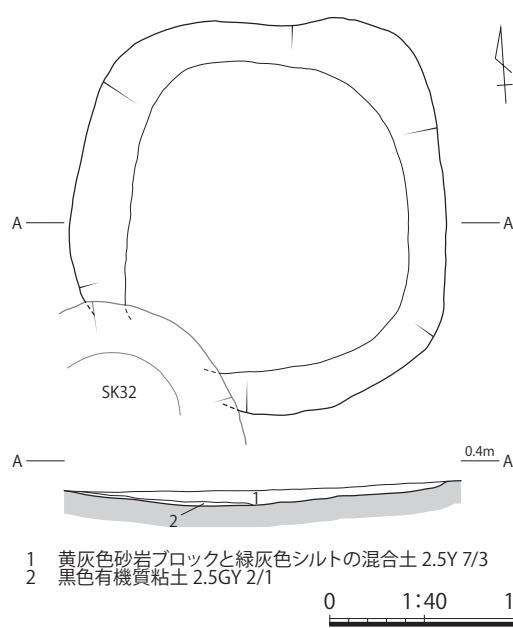
第 90 図 SK32 平面図・断面図

土坑 SK33（第 91 図）

調査区の中央からやや北側で検出した無遺物土坑である。土坑の南西側は SK32 と一部切り合い、新旧関係は SK33 が古く、SK32 が新しい土坑である。

検出面は標高 0.30m で、平面形は円形を呈する。規模は直径 2.00m、深さ 10cm を測る。土坑の深さが浅いため、上層から掘り込まれた土坑の底部を検出している可能性が考えられる。

土坑埋土は 2 層に分層でき、下層の黒色有機質粘土は少量の炭化物を含む。SK33 から遺物は出土していない。



1 黄灰色砂岩ブロックと緑灰色シルトの混合土 2.5Y 7/3

2 黒色有機質粘土 2.5GY 2/1

0 1:40 1m

第 91 図 SK33 平面図・断面図

まれた土坑の底部を検出している可能性が考えられる。

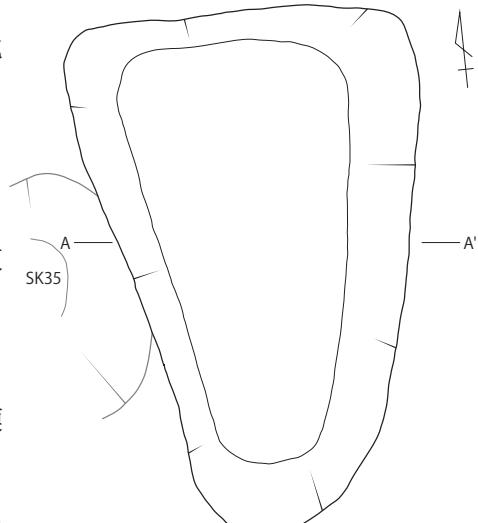
土坑埋土は黒色有機質粘土の単層が堆積し、少量の炭化物を含む。SK34 から遺物は出土していない。

土坑 SK35（第 93 図）

調査区の中央で検出した無遺物土坑である。土坑の東側は SK34 と一部切り合い、新旧関係は SK35 が古く、SK34 が新しい土坑である。

検出面は標高 0.32m で、平面形は円形を呈する。規模は直径 1.30m、深さ 50cm を測る。

土坑埋土は 2 層に分層できるが、SK35 から遺物は出土していない。



1 黒色有機質粘土 2.5GY 2/1

0 1:40 1m

第 92 図 SK34 平面図・断面図

土坑 SK36（第 94 図）

調査区の北側で検出した大型廃棄土坑である。ただし、最下層の茶灰色粘土は無遺物層であるため、当初は土取穴（城下町初期造成土の採掘穴）として機能していたが、土坑を埋め戻す段階に有機物層（ゴミ層）を投入して廃棄土坑とした可能性が考えられる。

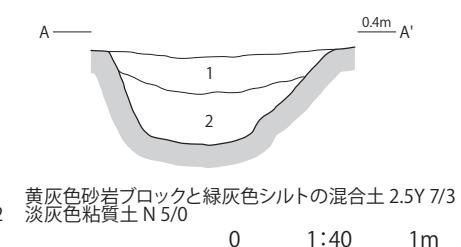
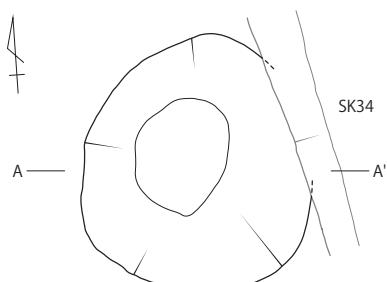
検出面は標高 0.28m で、平面形は長楕円形を呈するものと考えられるが、2 分の 1 程度の検出に留まる。規模は上縁長軸 2.20m 以上、短軸 1.80m、深さ 70cm を測る。

土坑埋土は 7 層に分層でき、上層の暗茶色有機質土と暗黒褐色有機質粘土から陶磁器・木製品・動物遺存体が出土した。

SK36 出土遺物（第 95 図）

ここでは SK30 の埋土上層から出土した遺物を掲載する。95-1 は中国磁器である。景德鎮系の型押成形された芙蓉手の青花碗で、底部のみ残存する。16 世紀代末～17 世紀代初頭のもので、森分類青花碗 I 群に該当する。

95-2～8 は国産陶器である。95-2 は肥前陶器の岸岳系（山瀬窯か）の丸碗である。⁽²⁷⁾ 内外面に藁灰釉を施し、胴部下方から高台は露胎。高台脇の削りがあまく、胎土に 1mm 前後の長石を含む。九陶 I -1 期（1580～1594 年頃）。95-3 は肥前陶器の半球碗である。内外面に透明釉を施すが、被熱のため全体的に白っぽくなっている。胴部下方から高台は露胎。九陶 I -2 期（1594～1610 年代）。95-4 は肥前陶器の杉形碗である。内外面に藁灰釉と口縁端部に鉄釉で口銹を施す。胴部下方から高

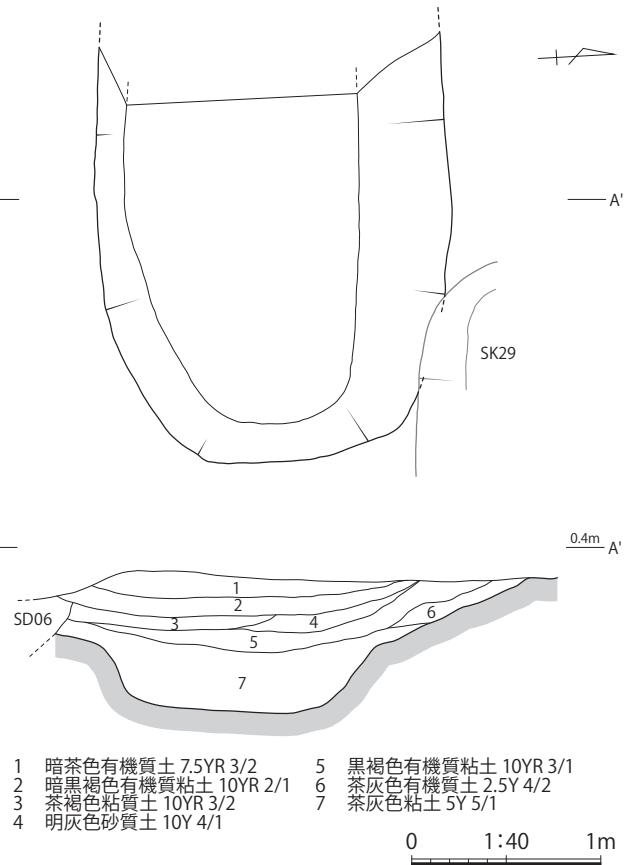


1 薦灰色砂岩ブロックと緑灰色シルトの混合土 2.5Y 7/3
2 淡灰色粘質土 N 5/0

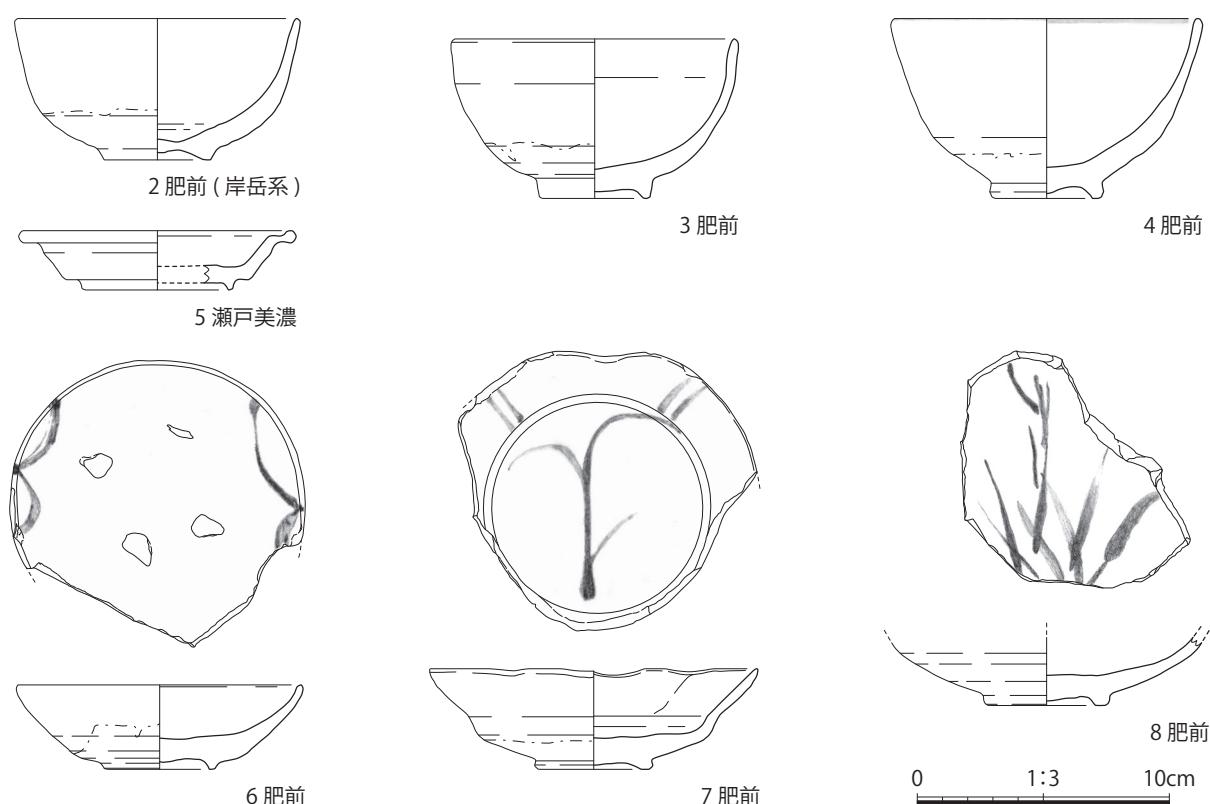
0 1:40 1m

第 93 図 SK35 平面図・断面図

台は露胎。九陶 I -2 期（1594～1610 年代）。95-5 は瀬戸美濃陶器の内禿皿である。内外面に灰釉を施し、見込みは釉剥ぎ。1590～1610 年代。95-6～8 は肥前陶器の鉄絵皿（絵唐津）である。内外面に透明釉を施し、口縁部付近または見込みに鉄絵で草文を描く。95-6 は丸皿で、見込みに 4 箇所の胎土目痕が残り、体部下方から高台は露胎。95-7 は向付で、見込みに目跡は無く、体部下方から高台は露胎。95-8 は底部のみ残存し、見込みに目跡は無く、疊付を残して全面施釉を施す。いずれも九陶 I -2 期（1594～1610 年代）。



第 94 図 SK36 平面図・断面図



第 95 図 SK36 出土遺物

土坑 SK37 (第 96 図)

SK36 の東側に隣接する位置で検出した大型廃棄土坑である。土坑の東側は SK30 と一部切り合い、新旧関係は SK37 が古く、SK30 が新しい土坑である。

この土坑は SK36 と同様に最下層の茶灰色粘土は無遺物層で、当初は土取穴として機能していたが、その後の段階で廃棄土坑とした可能性が考えられる。

検出面は標高 -0.05m で、平面形は長楕円形を呈するものと考えられるが、3 分の 2 程度の検出に留まる。規模は上縁長軸 3.50m 以上、短軸 1.80m、深さ 40 cm を測る。

土坑埋土は 4 層に分層でき、中間層の黒褐色有機質粘土と黒色有機物層から陶磁器・土師器皿・木製品・瓦が出土した。

SK37 出土遺物 (第 97 図)

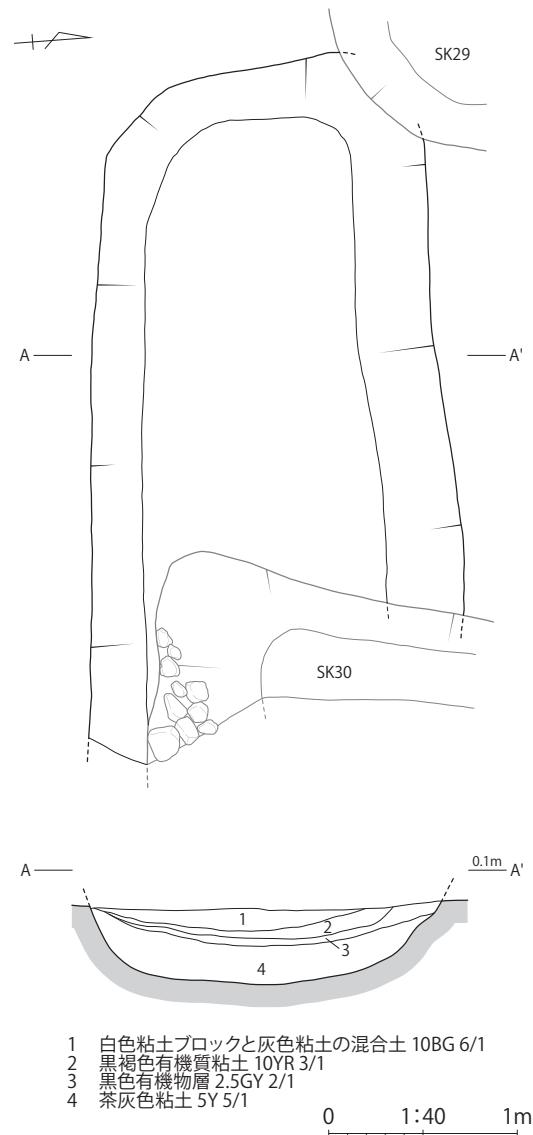
ここでは SK37 の埋土上層から出土した遺物を掲載する。97-1 は中国磁器である。漳州窯系の青花碗で、見込みに圈線とその中央に「壽」の字文を描く。16 世紀代末～17 世紀代初頭のもので、森分類青花碗 C 群粗製に該当する。

97-2～11 は国産陶器で、いずれも肥前陶器である。

97-2 は小壺である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。

九陶 I -2 期 (1594～1610 年代)。97-3 は肥前陶器

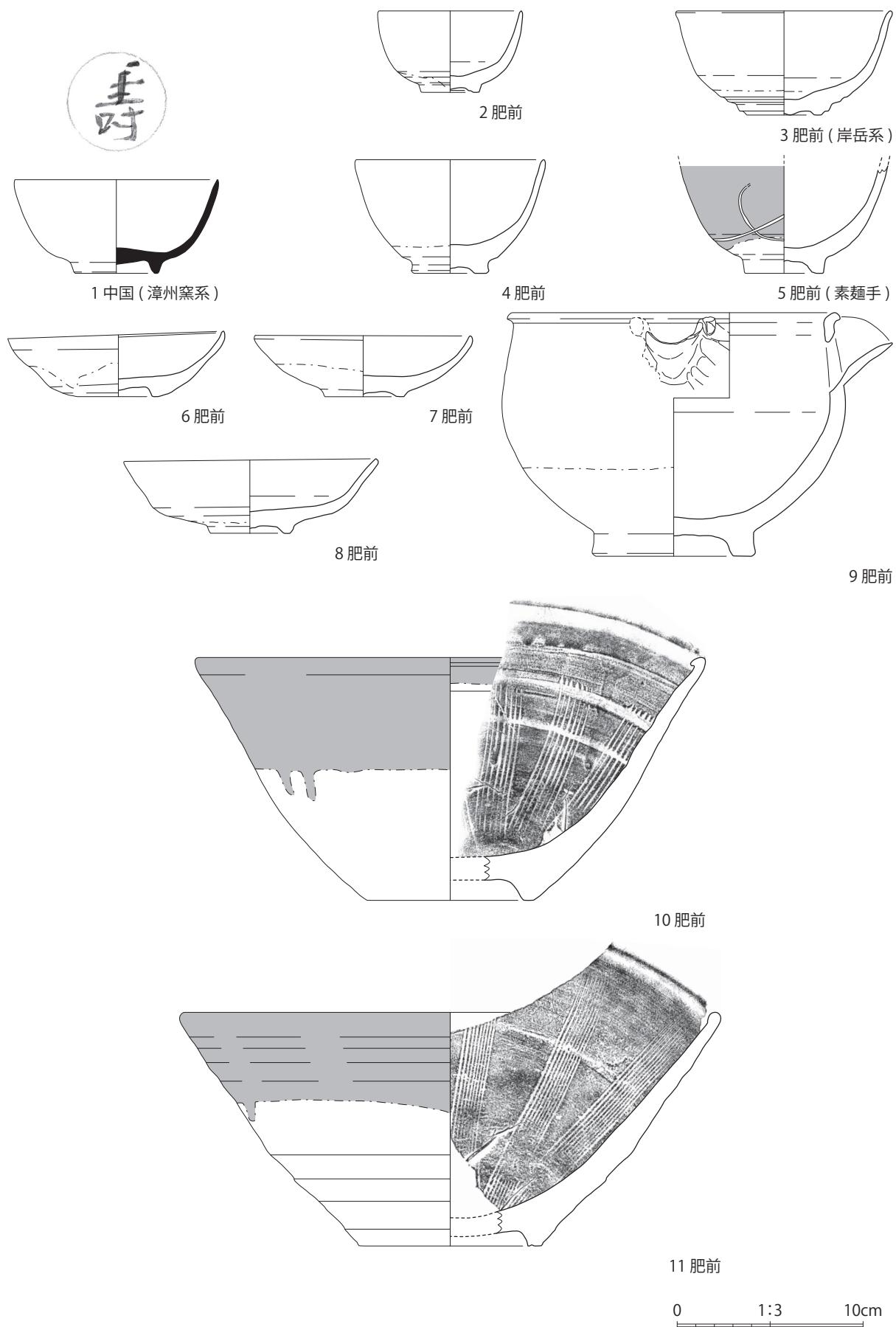
の岸岳系 (山瀬窯か) の丸碗である。内外面に藁灰釉を施し、胴部下方から高台は露胎。胴部下方の削りが顕著で、胎土に 1mm 前後の長石を含む。九陶 I -1 期 (1580～1594 年頃)。97-4 は杉形碗である。内外面に灰釉を施し、胴部下方から高台は露胎。九陶 I -2 期 (1594～1610 年代)。97-5 は素麺手の丸碗である。内外面に黒釉を施し、胴部外面に白い長石質の釉薬でイッチン掛けの装飾を施す。胴部下方から高台は露胎。九陶 II 期 (1610～1650 年代)。97-6・7 は丸皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに目跡は無い。97-6 は碁笥底状の高台で、体部下方から高台は露胎。いずれも九陶 I -2 期 (1594～1610 年代)。97-8 は平皿である。内外面に灰釉を施すが、被熱のため全体的に白っぽくなっている。見込みに目跡は無く、体部下方から高台は露胎。九陶 I -2 期 (1594～1610 年代)。97-9 は片口である。内外面に灰釉を施し、注口脇の両側に「鉢止め」と呼ばれる小さな丸い粘土を貼り付ける。胴部下方から高台は露胎。17 世紀代初頭～前半。97-10・11 は擂鉢である。97-10 は口縁端部を内側へ折り曲げ、口縁部周辺から胴部上方に鉄釉を施す。97-11 は口縁端部を丸くおさめ、口縁部周辺から胴部上方に鉄釉を施す。いずれも九陶 I 期 (1590～1620 年代)。



第 96 図 SK37 平面図・断面図

- 1 白色粘土ブロックと灰色粘土の混合土 10BG 6/1
- 2 黒褐色有機質粘土 10YR 3/1
- 3 黒色有機物層 2.5GY 2/1
- 4 茶灰色粘土 5Y 5/1

0 1:40 1m



第97図 SK37出土遺物

土坑 SK38 (第98図)

調査区の北東側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高0.34mで、平面形は長楕円形を呈する。規模は上縁長軸2.70m、短軸1.35m、深さ40cmを測る。

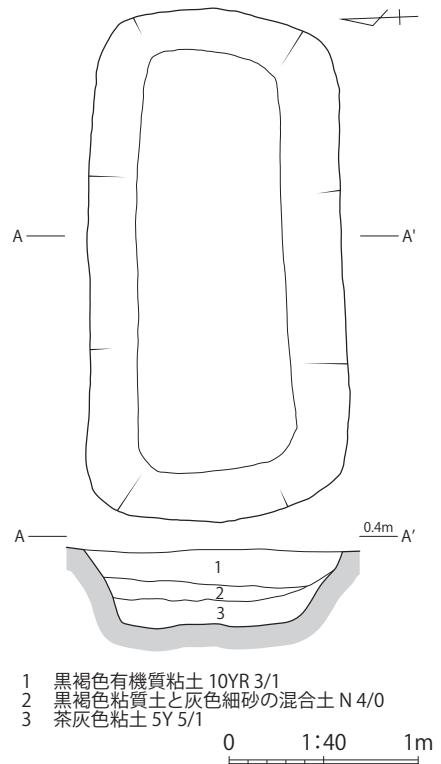
土坑埋土は3層に分層でき、上層の黒褐色有機質粘土から陶器・金属製品・錢貨が出土した。

SK38 出土遺物 (第99図)

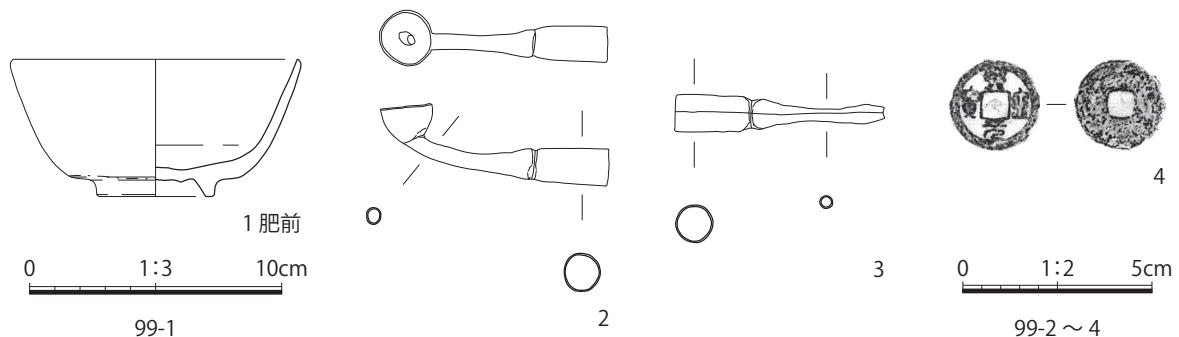
ここではSK38の埋土から出土した遺物を掲載する。99-1は国産陶器で、肥前陶器の丸碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期(1610~1650年代)。

99-2・3は金属製品である。99-2は真鍮製の煙管の雁首である。火皿はやや大きく、肩部を筒状におさめる。99-3は真鍮製の煙管の吸口である。肩部を筒状におさめ、首部を口付に向かって細くする。

99-4は錢貨の熙寧元寶である。初鑄年が1068年の北宋錢で、模鋳錢の可能性がある。



第98図 SK38 平面図・断面図

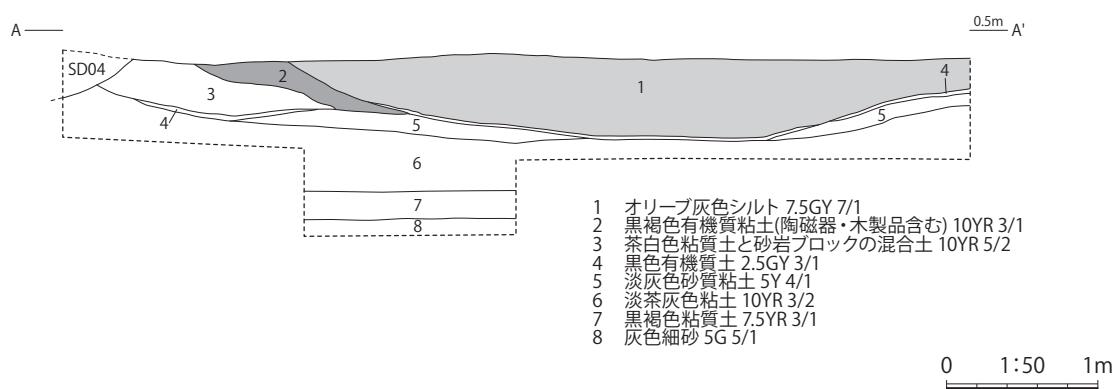
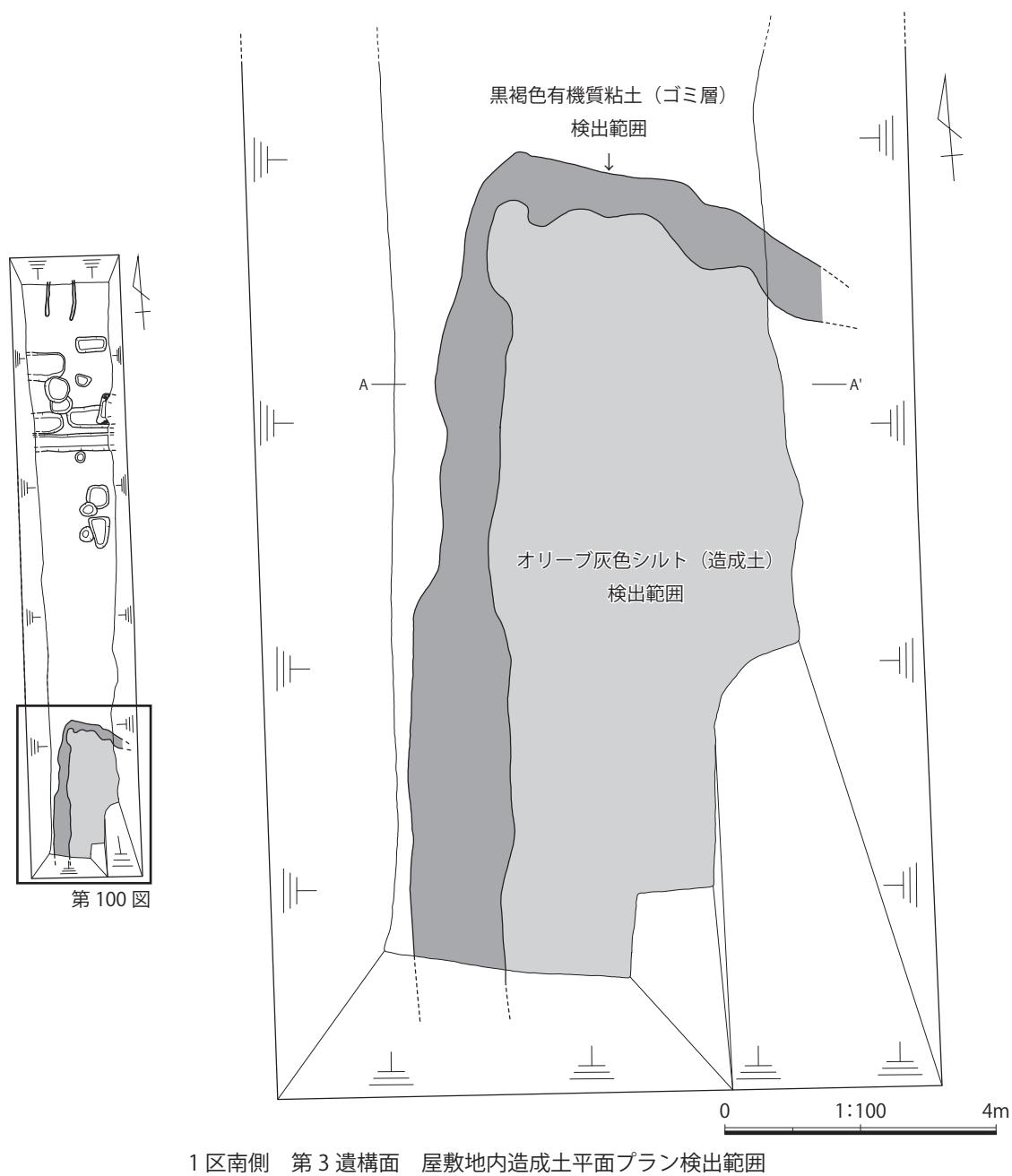


第99図 SK38 出土遺物

調査区南側 屋敷地内造成土・有機物堆積層 (第100図)

調査区の南側では、標高0.30mで武家地の屋敷地内における造成土と有機物堆積層(ゴミ層)の広がりを確認した。検出した平面プランでの規模は、東西5.60m以上、南北12.10m以上、深さ50cmを測る。この部分で検出した造成土は、オリーブ灰色シルトを検出し、東西方向の土層確認トレチでの断面形は浅いU字状を呈する。この土層から遺物は出土していない。その外側で黒褐色有機質粘土を検出し、この土層は陶器・土師器皿・木製品・瓦・動物遺存体などを多く含むゴミ層で、造成土として使用されたものと考えている。平面形では黒褐色有機質粘土の窪みにオリーブ灰色シルトを投入したような形状で、ここでは造成手順の変化を平面的に検出したものと捉えている。

第3遺構面で使用されている造成土は、調査区内北側の空白地では灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土、SD06から南側の武家地では黄褐色~緑灰色シルト質軟砂岩を造成土として使用しており、こ



第100図 調査区南側屋敷地内造成土平面図・断面図

これらは屋敷地によって造成土の使用が異なるということを示しているものと考えられる。さらに細部を見ると、屋敷地内の表口と裏地の造成土の使用についても場所によって異なることが想定される。これまでの調査成果から、当該期の屋敷地内の縁辺部や裏地はゴミ捨て場として利用されている場合が多い傾向にあり、今回の調査で検出したゴミ層はこれらの事例に共通するものと理解している。

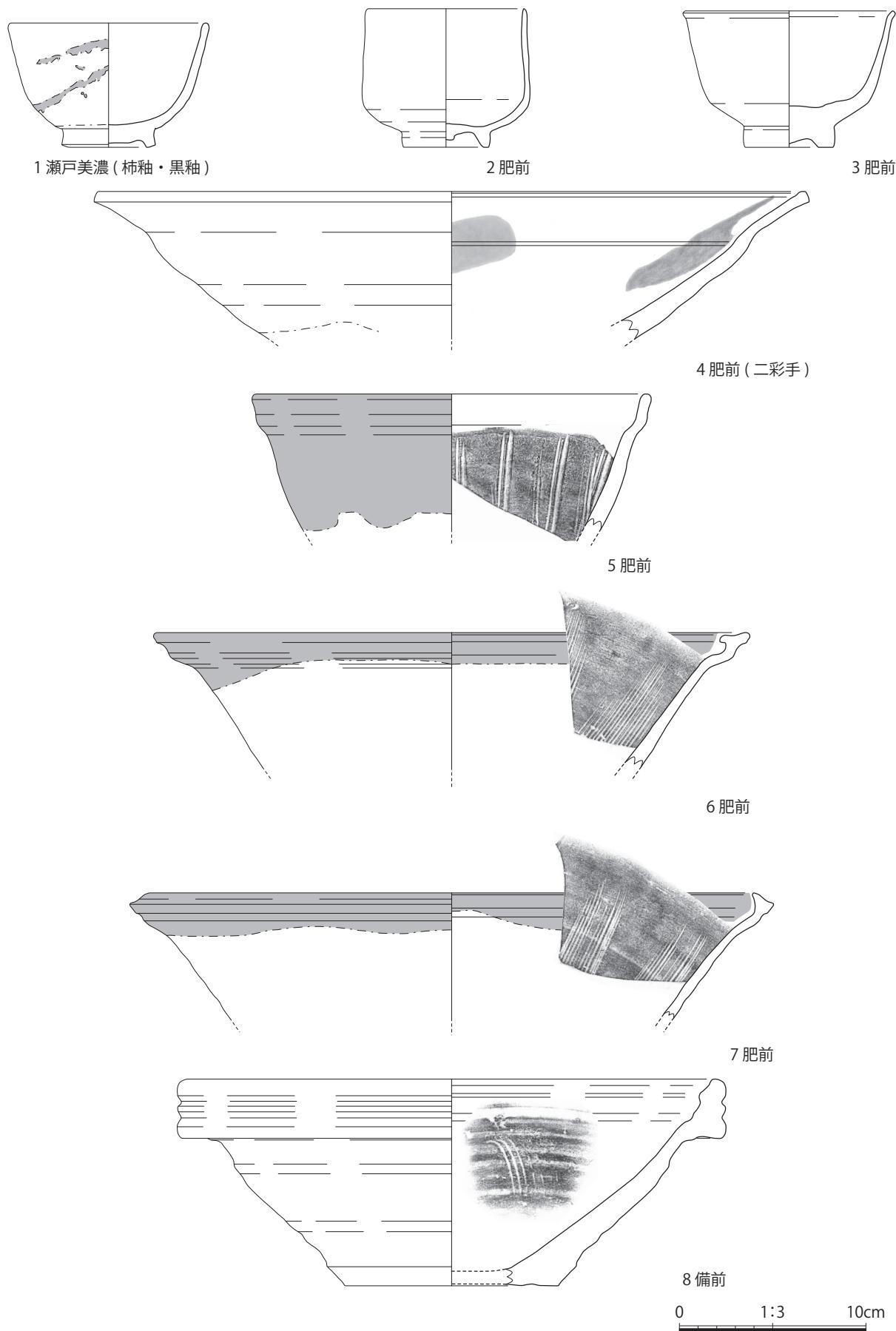
黒褐色有機質粘土（ゴミ層）出土遺物（第101・102図）

ここでは調査区南側で検出した黒褐色有機質粘土（ゴミ層）から出土した遺物を掲載する。いずれもこの土層の上面を露出した段階および土層の掘り下げ段階に出土した遺物である。

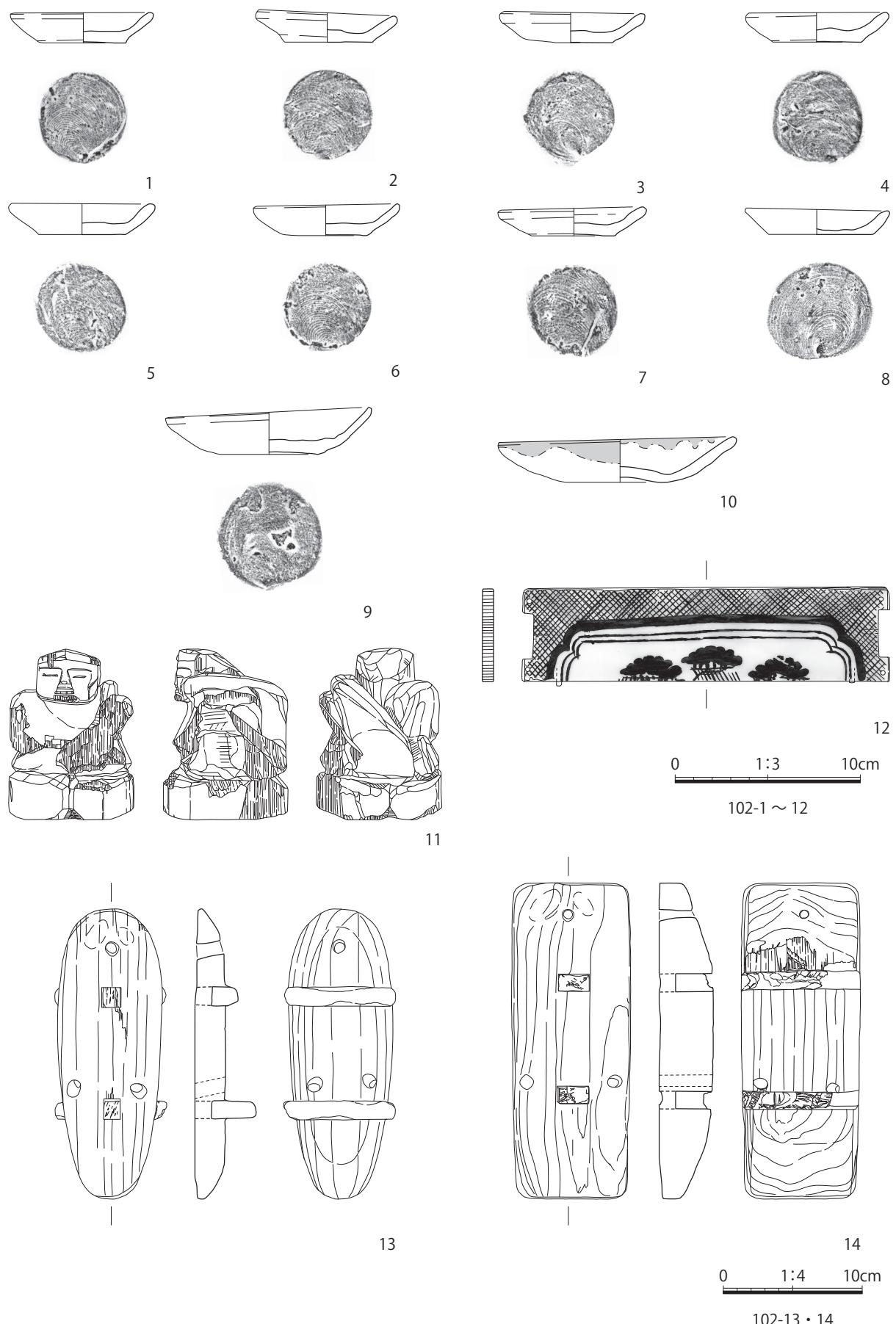
101-1～8は国産陶器である。101-1は瀬戸美濃陶器の丸碗である。内外面に茶色を呈する柿釉を施し、その上に黒釉を流し掛けて装飾を施す。高台は露胎。1590～1610年代。101-2は肥前陶器の筒形碗である。内外面に透明釉を施し、畳付を残して全面施釉を施す。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）。101-3は肥前陶器の端反碗である。内外面に透明釉を施し、畳付を残して全面施釉を施す。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）。101-4は肥前陶器の二彩手の大皿である。内外面に透明釉を施し、内面に緑釉と鉄釉を流し掛ける。体部下方は露胎。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）。101-5～7は肥前陶器の擂鉢である。101-5は口縁部上方をくの字状に湾曲させ、口縁端部を直立気味に外傾させる。口縁部周辺から胴部上方に鉄釉を施す。スリ目はヘラ描きで3～4条を1単位とする。九陶Ⅰ期（1590～1620年代）。101-6は口縁端部を平坦にして、上端を水平にする。口縁部周辺のみに鉄釉を施す。スリ目は14条を1単位として口縁部下方まで搔き上げる。九陶Ⅱ期（1620～1630年代）。101-7は口縁端部が三角形のもので、内側へ若干尖らせる。口縁部周辺のみに鉄釉を施す。スリ目は12条を1単位として口縁部下方まで搔き上げる。九陶Ⅱ期（1620～1630年代）。101-8は備前の擂鉢である。口縁帶外面に2条の凹線をもつ。スリ目は放射状の直線と考えられるが、使用頻度が高く、かなり摩滅している。乗岡編年近世1c期（1600～1620年代）に該当する。

102-1～10は土師器皿である。102-1～9は黒褐色有機質粘土の上面を露出した段階に9枚の土師器皿が密集した状態でまとめて出土した。102-1～8はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。いずれも口径7.3～7.7cm、底径4.4～5.6cm、器高1.4～1.7cmを測る小皿である。口縁部外面に油煙痕や内外面に煤が付着するものがあり、灯明皿として使用したものである。102-9はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。102-10は手づくね成形の京都系土師器皿である。いわゆる「へそ皿」で、内面に「の」字状のナデ上げ調整を施す。内外面に油煙痕をもつことから、灯明皿として使用したものである。

102-11～14は木製品である。102-11は大黒天の木彫り人形である。胴体の両側は一部欠損するが、高さ9.2cm、幅6.7cmを測る。102-12は漆器で、重箱の側板である。内外面に黒漆を施した後、外面に金漆で松文と斜め格子文を絵付けする。102-13・14は下駄である。102-13は丸型差歎下駄である。木取りは柾目で、長さ20.8cm、幅8.0cm、歯高4.4cmを測る成人用の下駄である。前緒付近には足の指の痕跡が残る。102-14は角型差歎下駄である。歯部の接合部以外は欠損するが、木取りは柾目で、長さ22.7cm、幅8.5cmを測る成人用の下駄である。前緒付近には足の指の痕跡が残る。



第101図 黒褐色有機質粘土（ゴミ層）出土遺物（1）



第102図 黒褐色有機質粘土（ゴミ層）出土遺物（2）

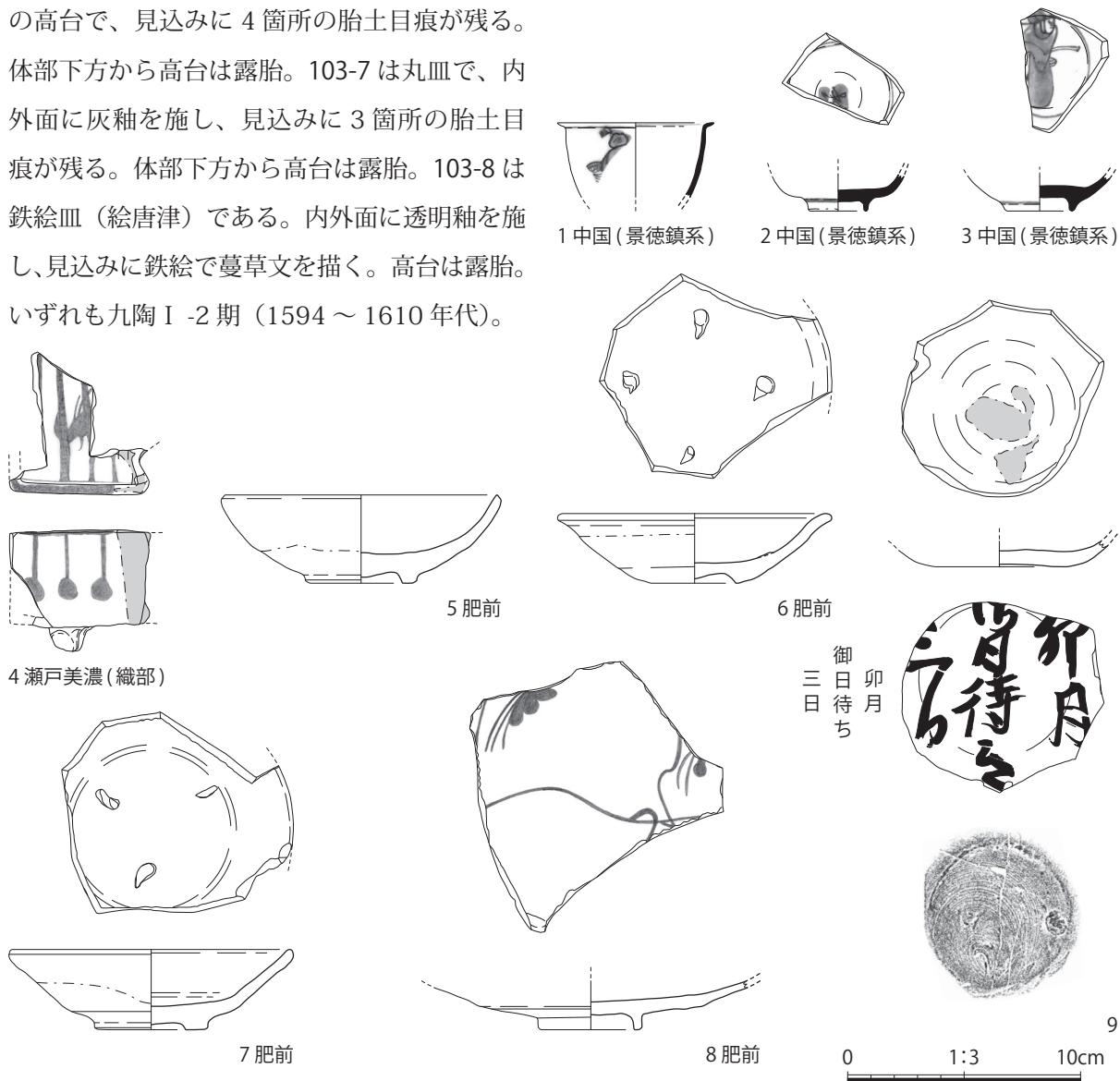
第3 遺構面遺構外出土遺物（第103・104図）

ここで掲載する遺物は、第3遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

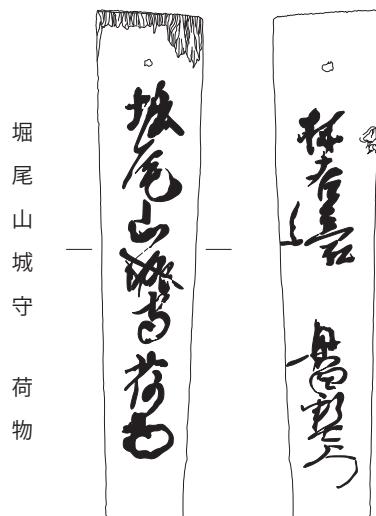
103-1～3は中国磁器である。103-1は景德鎮系の青花小壺で、口縁部から体部のみ残存する。端反形の小壺で、胴部外面に人物文を描く。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花小壺I類に該当する。103-2は景德鎮系の青花小壺で、底部のみ残存する。見込みに二重圈線とその中に草文を描く。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花小壺III類に該当する。103-3は景德鎮系の青花小壺で、底部のみ残存する。見込みに圈線とその中に人物文を描く。16世紀代末～17世紀代初頭のもので、森分類青花小壺I類に該当する。

103-4～8は国産陶器である。103-4は瀬戸美濃陶器の変形皿である。青織部の向付で、内外面に長石釉を施し、一部に緑釉を掛け流す。見込みと側面の内外面に鉄絵で幾何学文を描く。16世紀代末～17世紀代初頭。103-5～8は肥前陶器の皿である。103-5は丸皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに目跡は無い。体部下方から高台は露胎。103-6は端反皿で、内外面に透明釉を施す。碁笥底状の高台で、見込みに4箇所の胎土目痕が残る。

体部下方から高台は露胎。103-7は丸皿で、内外面に灰釉を施し、見込みに3箇所の胎土目痕が残る。体部下方から高台は露胎。103-8は鉄絵皿（絵唐津）である。内外面に透明釉を施し、見込みに鉄絵で蔓草文を描く。高台は露胎。いずれも九陶I-2期（1594～1610年代）。



第103図 第3遺構面遺構外出土遺物（1）



1
堀尾山城守荷物

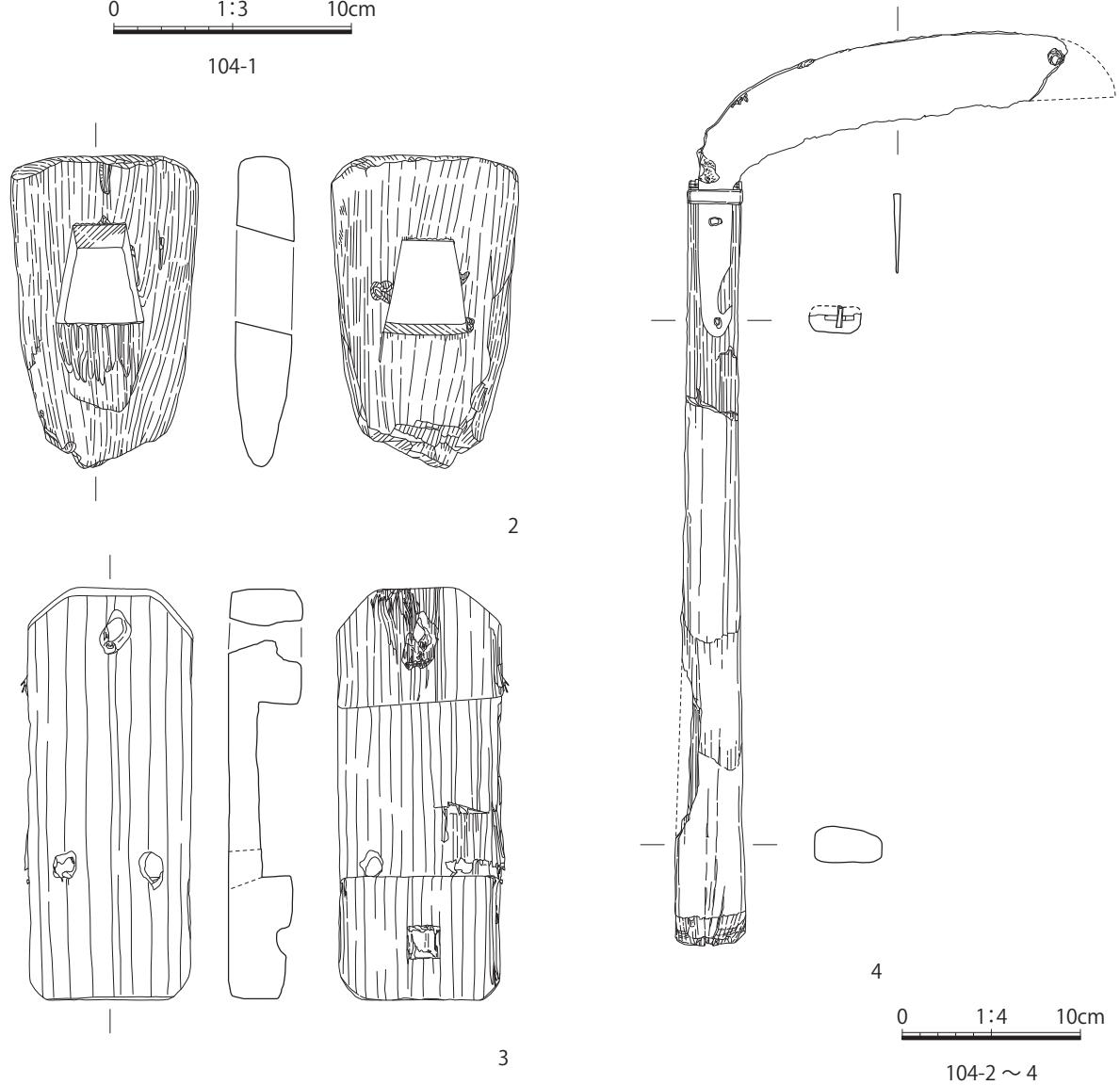
0 1:3 10cm
104-1

103-9は墨書土師器皿である。口クロ成形の在地系土師器皿で、底部外面に「卯月 御日待ち 三日」の墨書がある。⁽²⁸⁾

104-1～3は木製品である。104-1は荷札木簡である。短冊形の木簡で、片面に「堀尾山城守 荷物」、その裏面に「林吉兵衛殿参 奥田新右衛門」の墨書がある。木簡に書かれている「林吉兵衛」は、堀尾期絵図に記載がある屋敷地名義と一致する。⁽²⁹⁾

104-2は打鍬の風呂部分である。先端に鉄製の鍬先を装着したものか。104-3は角型削り下駄である。木取りは柾目で、長さ23.1cm、幅9.0cm、歯高4.1cmを測る成人用の下駄である。

104-4は金属製品である。刃部は鉄製で柄部は木製の鎌である。刃部先端は欠損するが、全長46cmを測る大振りの鎌で、2箇所の目釘と楕円形の金具で刃と柄を固定している。



第104図 第3遺構面遺構外出土遺物（2）

第7項 第4遺構面の概要(第105図)

第4遺構面は、標高0.00～0.10mで検出した城下町形成以前の旧地表面である。本遺跡の旧地表面は、北から南に向かって緩やかに傾斜している。遺構は、調査区の中央～南側で性格不明遺構SX01を検出した。

第4遺構面の基盤層は、土壤分解が進んだ有機質の黒褐色粘質土を主体とする城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、下位の自然堆積層である灰色細砂の直上に層厚20cm前後のほぼ均一の厚さで水平堆積している。この土層は、末次砂州の北の水域が流水のない帶水状態の時代に堆積した自然堆積層の腐食土である。なお、黒褐色粘質土の検出範囲は、調査区の北端から南端までのほぼ全域で堆積を確認している。

遺構面の時期は、旧地表面形成土が堆積した時期の上限は不明だが、下限は第3遺構面の城下町初期造成土が盛られる前段階までを想定している。第4遺構面で遺物は出土していない。

第8項 第4遺構面の遺構

性格不明遺構 SX01(第106図)

調査区の中央～南端で検出した大型の掘り方をもつ性格不明遺構である。検出面は標高-0.20～-0.40mで、平面形は長楕円形を呈する。規模は上縁長軸30.00m以上、短軸6.00m、深さ50～100cmを測る。掘り方は歪んだU字状を呈し、北側から南側に向かって浅くなっている。SX01から遺物は出土していない。

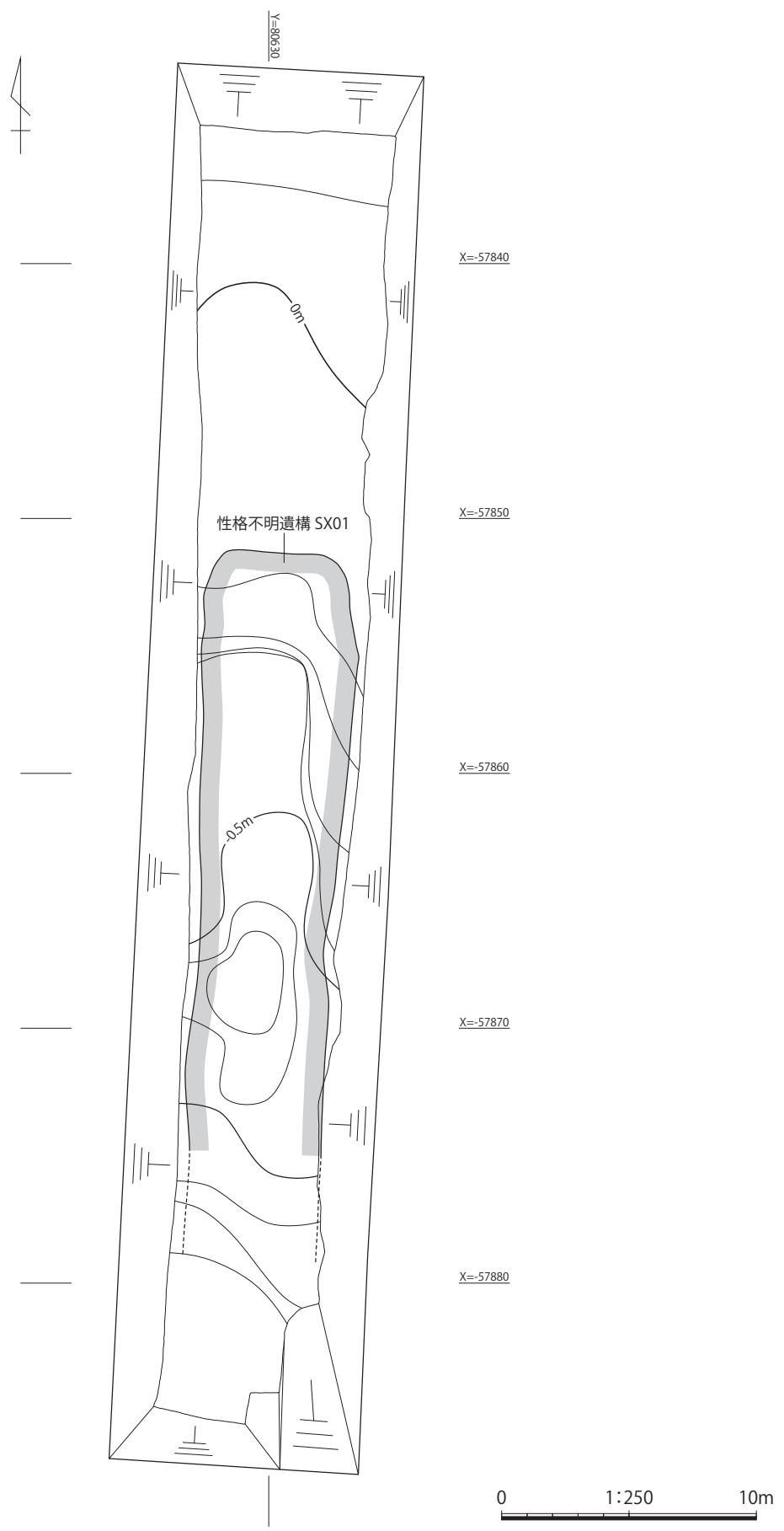
SX01は、城下町形成以前の旧地表面である黒褐色粘質土の直下で検出した遺構である。黒褐色粘質土が堆積する以前の段階に人為的に掘り込まれ、埋土は自然に堆積したものと捉えている。ここではSX01の時期を明らかにするという目的で、土壤分析によるAMS年代測定を実施した。⁽³⁰⁾

分析対象とした試料の採取地点は、第106図A-A'間土層断面に図示した黒色粘土である。黒色粘土の土壤中には植物片や微細な有機物が含まれ、土層断面ではアナジャコの可能性がある生痕を確認している。AMS年代測定の結果、黒色粘土の堆積時期は15世紀中頃(1422～1454calAD)の年代値を示すという成果が得られた。

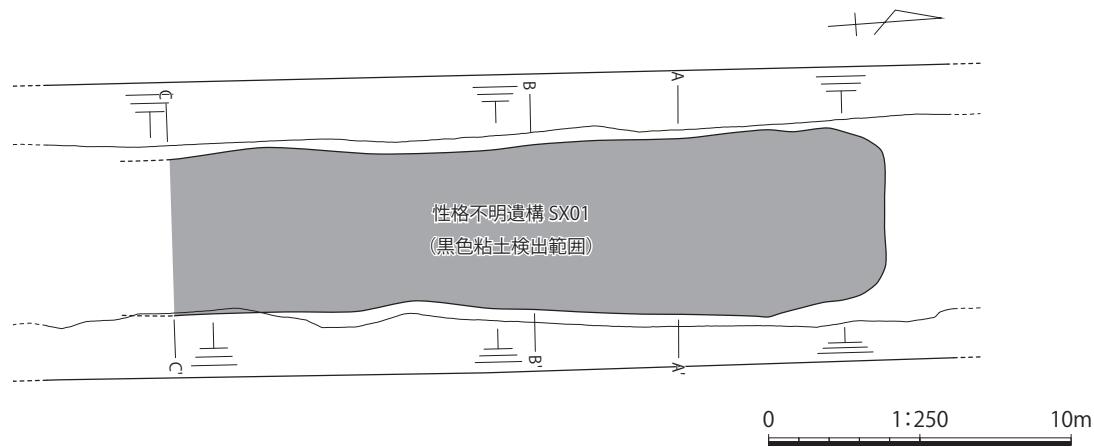
土壤の堆積過程については、土壤分析で層相による考察が行われている。試料を採取した黒色粘土の下部には細砂のラミナが確認されており、「このラミナは水流や風流などの作用によって形成されることから、少なくとも黒色粘土の下部が堆積した時期(年代測定の結果から15世紀中頃)には自然に堆積した可能性が高い。」と考察されている。また、「黒色粘土は上部に向かってラミナが不明瞭になっており、下部とは異なる環境あるいは事象で堆積している。」との指摘もある。

これらの分析結果を踏まえると、SX01は人為的に掘り込まれ、一定期間はオープンな状態で機能していた時期があり、その後の段階で徐々に細砂のラミナが自然に堆積して、黒色粘土がSX01の上部まで埋まったものと考えられる。

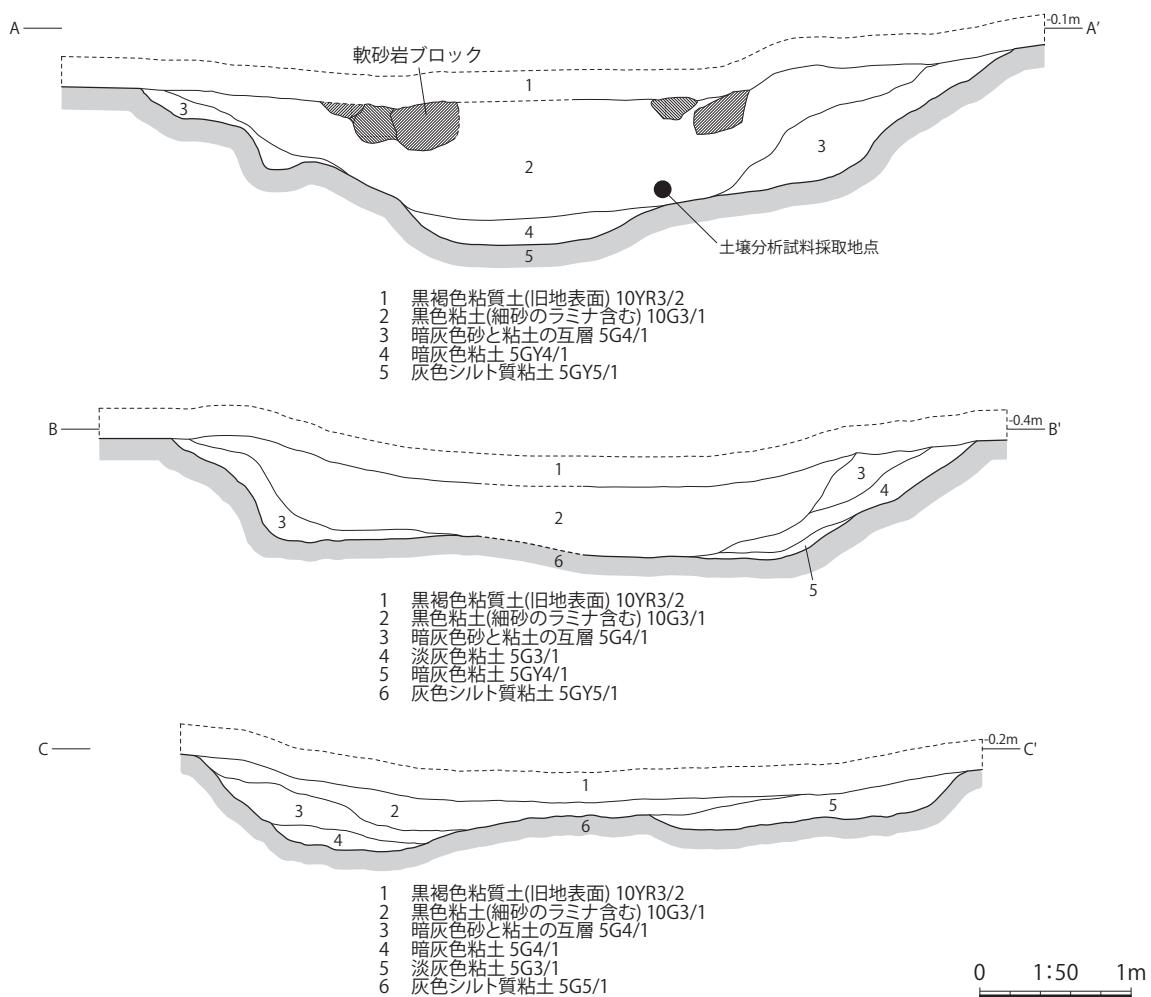
遺構の時期は城下町形成以前の中世後半に位置付けられるものの、遺構の性格については土坑なのかあるいは溝なのか用途不明な点があり、判然としない。



第105図 1区 第4遺構面平面図



1区南側 第4遺構面 性格不明遺構 SX01 平面プラン検出範囲



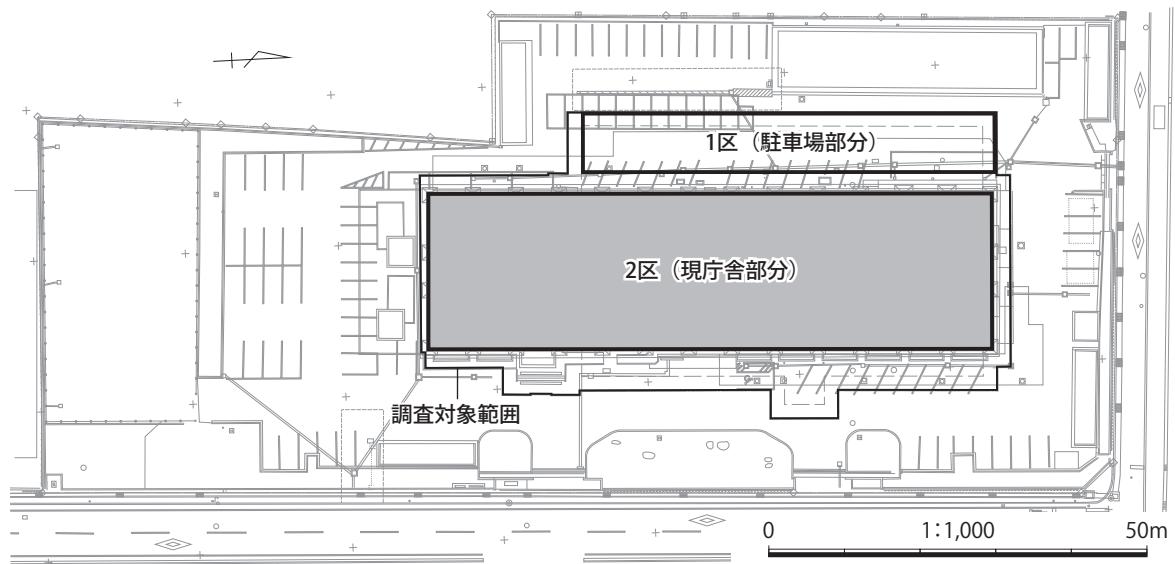
第106図 SX01 平面図・断面図

第4節 2区の調査（第107図）

2区は、現庁舎跡地に設定した調査区である。調査区は四方を地中梁で囲まれた東西7m×南北5mの範囲内に東西または南北方向の長さ5～7m×幅2～2.5mのトレントを設定して調査を行った。ここでは狭小な調査面積しか確保することができなかつたため、先行して調査を行つた1区の調査成果を踏まえて、目的を絞つた10箇所のトレント調査（T1～T10）を実施した。

調査前の現況は、現庁舎の建物基礎部分にあたり、現地表面は標高1.90～2.10mである。建物基礎内には層厚約100～120cmを測る搅乱層が堆積していたため、0.45m³バックホーを用いた表土掘削を実施した。重機掘削はバケットに平爪を装着し、少しづつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。併せて土層観察を行いながら、旧地表面以下に堆積する自然堆積層までの掘削を行つた。

調査の結果、2区では建物基礎の搅乱を免れた2つまたは3つの遺構面を確認した。以下では、各トレントの調査成果を述べ、検出遺構と出土遺物を含めた各遺構面の詳細について報告する。



第107図 2区 調査区配置図

第1項 調査区の設定と調査の目的（第108図）

前述したように2区では調査区の設定に制約があり、面的な調査が実施できなかつたため、1区の調査成果を踏まえて、調査の目的を絞つたトレント調査に切り替えて調査を実施している。

調査区の設定は、現庁舎の建物基礎部分にあたる東西21m×南北75mの範囲内に、長さ5～7m×幅2～2.5mの東西または南北方向のトレントを10箇所設定して調査を行つた。トレントは建物基礎部分のうち、四方を地中梁で囲まれた東西7m×南北5mの範囲内に1箇所ずつ設定し、各調査ブロックは調査区内東側と西側で縦軸が並列する形となるように2列の配置とした。調査区の呼称は、北側から南側に向かって、第1・2ブロック（T1・2）、第3・4ブロック（T3・4）、第5・6ブロック（T5・6）、第7・8ブロック（T7・8）、第9・10ブロック（T9・10）と呼称している。

各トレントにおける調査の目的は、T1・2は1区で確認した調査区北壁土層の連続性を把握するために設定した東西トレントである。T3・4は1区の第2遺構面で検出したSD01と第3遺構面で